はじめに

令和2年に創立50年を迎えた明海大学は、平成28年度に、教職を目指す学生に対して、教員免許状の取得に必要となる教職課程の履修、教育実習、教員採用試験、赴任後に求められる授業実践力など、教職に関するさまざまな課題をトータルにサポートするために全学的な組織である「教職課程センター」を設置した。また、教職を目指す学生や教職課程担当の教員が、大学が所在する浦安市をはじめ広く千葉県、東京都等に所在する小学校、中学校、高等学校、これを所管する教育委員会及び地域社会に対して、計画的・継続的に、本学の教育研究の成果を発信し、還元することを目的に、「教職課程センター」設置に併せて、「地域学校教育センター」を設置した。その上で、明海大学は、公立高等学校6校、東京都足立区、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市と教育に関する連携協定を締結して、連携先における児童生徒の英語力向上や教師に対する研修等を継続的に実施してきたところである。

また、明海大学は平成2年以来、中学校・高等学校の英語の教員免許取得のための教職課程認定を国から受けてはいるものの、小学校教員の教職課程認定は受けていない。しかしながら、現行学習指導要領の告示前の中央教育審議会の審議の経過や文部科学省の英語教育改善の動きなどをとらえて、平成30年度には、小学校英語指導者認定協議会（J-SHINE）から登録団体としての認証を受けた。そして、同年度から、教職課程に「小学校英語基礎概論」という科目を新設して、中学校や高校の英語の免許を取得しようとする学生に対して、小学校で実施されている外国語活動や令和2年度から実施が見込まれていた教科・外国語について十分理解した英語科教員養成に努めてきた。

こうしたことを背景として、明海大学は、令和2年度に、文部科学省が公募した「令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）」に応募し採択された。このことにより、東京都足立区、千葉県浦安市と秋田県横手市と連携して、管下の200名を超える小学校の教師に対して、年間5回の小学校英語に関する講座を実施して、令和3年3月には、その成果報告書を文部科学省に提出したところである。なお、本事業終了に当たり、連携した教育委員会からは、本事業の継続を望む声が高かった。

折しも、文部科学省は、令和3年4月、「令和3年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）」の公募を行った。そこで、明海大学は再度、公募に応募することとした。応募に当たっては、令和2年度に連携した足立区教育委員会、浦安市教育委員会、横手市教育委員会とともに新たに参加を希望した福島県いわき市教育委員会と新潟県妙高市教育委員会を連携教育委員会とし、併せて協力機関・外部有識者にJ-SHINEの他、小学校英語教育学会愛知支部理事を加えることとした。その上で、講座時間を90分から60分に短縮、講座回数を5回から10回とするなどして、講座内容の充実を図るとともに、授業研究型の講座を設け受講者のニーズを踏まえることとした。その結果、再度採択され本事業を実施することとなった。

本成果報告書においては、この事業に応募するまでの取組、委託決定後から講座実施前までの取組や各講座の内容を明らかにするとともに、各講座への参加者のリフレクションに関する分析、各講座参加者の評価アンケート結果や分析を詳説した。本成果報告書が広く全国の小学校英語教育の関係者の皆様方の参考となれば幸甚である。

令和4年3月

明海大学副学長・外国語学部長

高野 敬三

目次

はじめに

Ⅰ 事業概要

1. 事業委託決定までの取組 5
2. 委託(予定)決定後から講座実施までの取組 9
3. 検討委員会設置要綱、委員名簿及び検討委員会議事録 11
4. 講座開発・実施チーム設置要項及び講座開発・実施チーム委員名簿 15
5. 組織図:協力・連携体制 18

Ⅱ 講座概要

第1回講座 19
第2回講座 21
第3回講座 23
第4回講座 26
第5回講座 28
第6回講座 30
第7回講座 32
第8回講座 34
第9回講座 36
第10回講座 38
特設講座 40

Ⅲ 講座受講による意識の変容

各回のリフレクションシートの内容 42

Ⅳ 講座内容に対する評価

各回の評価アンケート結果分析及びクロス集計を用いた分析 52

Ⅴ 講座運営に対する評価

全講座総合評価アンケート結果分析 70

Ⅵ 講座全体の総括 73

Ⅶ 教育委員会・受講者等の総括

1. 東京都足立区教育委員会総括 77
2. 東京都足立区受講者感想 78
3. 千葉県浦安市教育委員会総括 78
4. 千葉県浦安市受講者感想 79
5. 秋田県横手市教育委員会総括 80
6. 秋田県横手市受講者感想 81
7. 福島県いわき市教育委員会総括 81
8. 福島県いわき市受講者感想 82
9. 新潟県妙高市教育委員会総括 83
10. 新潟県妙高市受講者感想 84
11. 講師総括 85
12. J-SHINE 事務局 88
13. 運営業者(株式会社モアカラー) 88

終わりに

Ⅰ 事業概要

1. 事業委託決定までの取組

1 公募要領の公表

文部科学省から、「令和3年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業)」に関する公募が公示され募集が始まったのが、令和3年3月23日であった。公募要領によれば、その目的に、「小・中・高等学校を通して、外国語教育に関する専門性が求められる人材の育成・確保に関する取組を促進するために、また、より深く多様な専門性をもった人材を活用するために、大学と教育委員会が連携し、専門性の高い外国語指導者(英語)を育成するための講習等を開発し、実施する。特に、小学校中学年での外国語活動、高学年での外国語科が導入された新学習指導要領(平成29年3月31日告示)を円滑に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行える指導体制を構築することが喫緊の課題である。このため、現職の小学校教師等を対象に外国語活動及び外国語科(英語科)の指導に対応する講習等を開発し、実施する。」とある。また、事業の内容としては、①小学校外国語の専科指導等を担当し得る専門性を有する教員の育成と②小・中・高等学校を通して、より深く多様な専門性を持った外部人材を外国語(英語)教育に活用するために必要な講義・講座等の開発・実施の二つが示されていた。そして、①では、中学校教諭免許状(外国語(英語))を取得するための免許法認定講習等の開発・実施や、現職教員や教員を目指す学生等を対象とした、小学校外国語科・外国語活動に係る専門的な指導力・英語力向上に係る講座等の開発・実施が例示されていた。②では、特別免許状を授与される者(授与が期待される者)等が小学校外国語教育に関わる上で必要とされる資質や能力を養成する講習の開発・実施が例示されていた。

さらに、今回の公募では、留意事項として、開設にあたっては、新型コロナウイルス感染症に係る現下の状況を鑑み、講習、講座等の全部又は一部を対面により予定通り実施することが困難と認められる場合には、対面による講習に相当する教育効果を有すると講習開設者において認められるものについては、対面によらない講習として実施することや、教育委員会・受講者に負担がかからないように配慮することなどが示された。また、実施する講習・講座については、継続的に能力の育成を図り、また、免許状更新講習との相互認定を可能にするため、一回限りの講演会やセミナー等ではなく、複数回にわたって行われ、かつ総時間数が少なくとも6時間以上の講習・講座であることが望ましいことが示されていた。また、いずれの講習・講座においても単に英語力向上のみを目的とする内容のものは対象外とし、平成29年、30年告示の小中高の学習指導要領に対応していること、「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」及び「小学校教員研修外国語(英語)コア・カリキュラム」「中・高等学校教員研修外国語(英語)コア・カリキュラム」を参考とした内容としていることなどが示された。更には、講習・講座の開発に伴い、作成した教材や関連資料等をわかりやすくまとめ、成果物としてホームページで広く公表する等、講義・講座終了後も受講者が自主的に学び続けることができる、受講者以外の者もアクセスできる等、成果普及に努めることと示されていた。

2 公募準備開始

前述の公募要領によると、公募開始が令和3年3月23日で、公募締切が4月14日となっており、締切まで間がないこともあり、以下に示すような段階を経て、企画提案書(事業実施計画書)を提出することとした。

①学内組織の検討

事業実施主体は、令和2年度と同様、明海大学教職課程センター・地域学校教育センターとし、事務局には本学企画広報課が当たることとした。その上で、本事業に係る教職員の担当を決定した。

②協力機関の検討

明海大学では、小学校英語の導入を視野にさまざまな改革を実施してきたところであるが、まだその取組は始まったばかりであった。そこで、令和2年度と同様、具体的な事業実施内容を決定し実行に移していく上で、過去20年にも亘り小学校英語の指導者を認定してきたJ-SHINE(小学校英語指導者認定協議会)を協力機関・外部有識者とした。具体的には、J-SHINEの事業運営委員会の藤田保・上智大学言語教育研究センター長・教授(J-SHIE専務理事)、佐藤久美子・玉川大学大学院名誉教授(J-SHINE会長)及び鈴木菜津美事務局長に協力を仰いだ。更には、今回から、小学校英語に関する学会である小学校英語教育学会愛知支部理事である池田周・愛知県立大学教授を外部有識者に加えた。

③連携教育委員会の検討

前述のとおり、すでに本学と教育に関する連携協定を締結して事業を実施している、東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市教育委員会を連携教育委員会として、管下の小学校の先生方を対象とするとともに、連携協定は締結をしていないものの、本事業に参画の希望を示した、福島県いわき市教育委員会(いわき市総合教育センター)を加えることとした。なお、4月13日に文部科学省提出の企画提案書(事業実施計画書)には具体的に記載はできなかったが、5月17日に文部科学省に再提出した企画提案書(事業実施計画書)では、4月16日に本事業に参画することを希望した新潟県妙高市教育委員会も加え、最終的には、5つの教育委員会と連携することとした。

④再委託先の検討

公募要領では、新型コロナウイルス感染症の流行といった状況から、オンラインによる講習等の実施に関して記載されていた。そこで、令和2年度と同様、オンライン講座の撮影・配信サポートやアーカイブ制作等オンライン環境整備を実施していただくために、㈱モカカラーを再委託先とした。

3　公募事業への応募

前述のとおり、令和3年度の文部科学省の公募事業に参画する意思決定をされた東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市教育委員会及び福島県いわき市教育委員会(いわき市総合教育センター)並びに協力機関・外部有識者や再委託先である㈱モアカラーに対しては、応募前段階で明海大学が作成した文部科学省提出予定の企画提案書(事業実施計画書)(案)を提示して意見を求めた。また、本事業への参画を正式に意思決定した新潟県妙高市教育委員会に対しては、文部科学省へ修正企画提案書(事業実施計画書)を提出する前には、事業の実施内容・方法等について詳細に説明して理解が得られた。その上で、明海大学は、事業の実施体制、実施内容、実施方法や実施日程などを定め、4月13日に企画提案書(事業実施計画書)を、そして、5月10日付文部科学省からの指摘事項を踏まえて、以下の通り、修正企画提案書(事業実施計画書)を5月17日に、文部科学省に提出した。

実施体制

実施体制は、検討委員会、講座開発・実施チームと実施事務局とで構成する。

検討委員会は、本事業の全体進行管理、協力機関との調整、本事業に係る連携教育委員会との間の調整、本事業の在り方及び成果目標の検討、関係学校・関係教員等への本事業の周知、講座開始後の本事業の中間評価の実施及び改善策の検討、本事業の成果公表に向けた内容の検討などを行う。

講座開発・実施チームは、講座内容の検討及び作成、講座における教材・資料の作成、足立区立小学校、浦安市立小学校、横手市立小学校、いわき市立小学校及び妙高市立小学校における講座の実施や講座途中及び終了時の評価の実施や成果の発表・本事業終了時における事業全体の評価の実施を行う。

実施事務局は、検討委員会、講座開発・実施チーム等の運営、経理事務全般や本事業に係る広報全般を取り扱う。

実施内容

前述の5つの教育委員会と連携して、J-SHINEや小学校英語教育学会愛知支部理事を協力機関・外部指導者として、㈱モアカラーに動画撮影配信等の業務を委託する形で、小学校外国語活動及び外国語科(英語科)の指導に対応する講習・講座の開発、実施を行う。具体的には、小学校外国語の専科指導等を担当し得る専門性を有する教員の育成とする内容とする。その上で、本事業の名称を、明海大学「小学校外国語科等講座」(仮称)とする。

【目的】

小学校外国語活動・外国語科が導入された新学習指導要領を円滑に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行える指導体制を構築する。

【受講対象者】

東京都足立区、千葉県浦安市、秋田県横手市、福島県いわき市及び新潟県妙高市の公立小学校の教員等とする。

【主な講座内容】

令和2年度実施した委託事業は、連携する教育委員会から講座内容に関する希望調査を取り入れて講座を実施したが、本学や協力機関・外部有識者が予め設定した講義テーマに基づくものであった。事業実施後の評価では、講座受講者の多くが、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと(やり取り)」、「話すこと(発表)」、「書くこと」の各領域の具体的な活動事例の研修や、実際の授業映像を活用した講座(実際の授業実演に対する協議・指導・講評)による研修を望んでいることが判明した。

こうしたことを踏まえて、令和3年度の本事業では、受講者が「明日の授業」にすぐに生かせる、いわゆるhands-on研修としての位置づけで講座内容を構成する。具体的には、五つの領域ごとの研修講座と受講者が実施した実際の授業(動画撮影)について研究協議を行う「授業研究」を中心とした講座とする。

併せて、令和2年度実施した事業における各講座については、小学校の授業が終了してからの15:00を開始として、90分構成としたが、授業終了直後からの講座開始については児童等への指導で時間的に難しいことや、90分のオンラインによる講座が少し長すぎるとの声があった。そこで、連携教育委員会との協議を踏まえて、開始時刻を15:30と30分繰り下げ16:30終了とするなど、講座そのものを60分とするなどの改善を図ることとする。

以下は、明海大学が応募時に、明海大学「小学校外国語科等講座」(仮称)の講座内容(案)として示したものである。

【第1回】

- テーマ　**新学習指導要領改訂の趣旨及び第二言語習得理論を踏まえた小学校英語科等の指導の心構え**
- 令和3年度の本講座のオリエンテーションと位置付ける。特に、令和2年度の講座で扱った新学習指導要領改訂の趣旨及び第二言語習得理論を踏まえた小学校外国語活動・英語科の指導に当たってのポイントや心構えについて理解する講座とする。(「講義+協議・質疑応答」型)。

【第2回】～【第5回】

- テーマ　**五つの領域ごとの活動事例(「聞くこと」「読むこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」「書くこと」)**
- 講座内容の詳細は、事前に教育委員会を通して受講者に対する講座内容に係る希望調査を実施し、その結果に基づいて決定する。
- 講座の前半をテーマに関する講義とし、後半をアクティビティと質疑応答の時間とする。
- 講座の中で、受講者同士のやり取りを多く取り入れるとともに講師と受講者とのやり取りも随時行う(ワークショップ型)。
- 各回の講座の時間配分は、おおむね、挨拶5分、講義20分、アクティビティ20分、質疑応答15分とする(合計60分)。

【第6回】

- テーマ　**小・中・高等学校における指導の接続**
- 中学校・高等学校における指導と円滑に接続できるようにするための指導方法や学習環境等について理解する講座とする(「講義+協議・質疑応答」型)。

【第7回】～【第10回】

・テーマ　**授業研究①～④**

・第1回～第6回講座の研修内容を生かした授業を各区市で実施し、その授業（撮影動画）について研究協議を行う。協議の際には、各区市教育委員会の指導主事等が進行役を務める。（「授業研究」型）。

・各回の講座の時間配分は、おおむね、挨拶5分、動画視聴15分、協議25分から30分、講評を10分から15分とする。

なお、全講座の実施に当たって、以下のことを付記した。

・各講座については、リアルタイムのオンラインとアーカイブ（講座内容や資料の保存）の併用を図るものとする。

・受講者の負担感の解消と受講者一人一人の多様なニーズに応えるとともに、質の高い授業を行える指導体制を構築する上で必要な講座を提供するため、

①「複数回・総時間数が6時間以上の講座が望ましい。」とする本事業の公募要領に則り、講座回数を10回、総時間数を10時間とした。

②各講座は、受講者の主体的な参加を促すために、リアルタイムのオンライン講座とするとともに、受講者の時間的負担の軽減を図るためアーカイブを活用する。また、各回の講座のタスクについてはアーカイブで受講者が確認して取組ができるようにする。

③オンライン講座をより充実した内容とするため、受講者がいつでも振り返ることができるように、オンライン講座をアーカイブで視聴できるようにする。また、予め提供された資料（動画を含む）をアーカイブで視聴できるようにする。

④本学が令和2年度開発・実施した5回の講座について有効活用して、参加する受講者がいつでも視聴可能となるようにする。

⑤各講座における受講者の理解度や満足度などについては、各講座の直後に実施するアンケート調査（Google フォーム）を使用して把握するとともに、各受講者に対するフィードバックについては講座中の質疑応答の時間を活用したり、講座実施直後に提出を求めるリフレクションシート（学んだ点や疑問点・質問点など）で対応する。

実施方法

①検討委員会は、本事業の基本方針（在り方や講座内容の方向性）等を決定するとともに、講座開発・実施チームはそのことを踏まえて、講座内容の詳細を決定し実施する。

②講座開発・実施チームによる講座内容が決定した段階で、各講師はオンライン講座の教材・資料を作成し、講座前にアーカイブに格納する。

③各講座はZoomによるオンライン講座とする。

④各講座の講師は、講座開発・実施チームの担当が当たる。

⑤明海大学は、連携教育委員会と協議の上、「講座内容・講座実施期日・時間等一覧」を作成して、連携教育委員会に周知する。

⑥連携教育委員会は、本講座を受講する学校若しくは教員等を決定する。

⑦各講座は、各連携教育委員会が指定した一つの学校等（拠点校）におけるパソコン教室等に集まった受講者に対して配信する。また、令和2年度と同様に、移動時間等の理由で学校等（拠点校）に参集できない受講者に対してもZoomで参加することも可能とする。なお、学校等（拠点校）で使用するスクリーン、プロジェクター、パソコンとモバイルルーターについては教育委員会で用意する。

⑧本事業で作成した教材や関連資料については、本事業終了後に、本学ホームページで広く公表することにより、受講者やその他受講者以外の教員等がアクセスできるようにして、成果の普及に努める。

実施日程

6月から7月までを講座内容の決定とそれに基づく講座内容・方法の開発、7月から12月までを全10回講座のオンライン実施として、事業開始の最初、中間期と最後に検討委員会を開催する。

4　文部科学省からの決定通知

5月10日には、文部科学省から、明海大学に事業を委託することを予定していること、事業採択に当たり改善・見直しを行うべきことなどが文書で指摘された。これを受け、明海大学は、企画提案書（事業実施計画書）を修正して、文部科学省に5月17日提出した。そして、6月15日、文部科学省から明海大学を委託先として正式に決定した旨、文書通知があった。

2. 委託（予定）決定後から講座実施までの取組

委託決定を受け、明海大学はその旨を連携教育委員会と協力機関・外部有識者や再委託先である㈱モアカラーに通知して、実施に向けての準備に入った。まずは、事業を遂行するための検討委員会の設置要綱並びに講座内容の開発のための「講座開発・実施チーム」の設置要項を6月15日に決定した。ここで事業名についても、昨年度との違いがわかるように、MEIKAI-JOEプラスという略称を使用することとした（昨年度は、明海大学のMEIKAI、協力機関のJ-SHINEのJ、そして教育委員会のOffice of Educationの頭文字をとって、MEIKAI-JOEという略称を使用）。

以下が、そのMEIKAI-JOEプラス事業を円滑に進めるために取り組んだ内容である。

1　明海大学事務局の取組

事業の正式決定を受け、企画提案書（事業実施計画書）に基づき事業運営を円滑かつ適切に行う必要があることから、以下の取組を行った。

①MEIKAI-JOEプラス・ミーティングの実施

学内組織ではあるが、本事業の進行管理のため、「MEIKAI-JOEプラス・ミーティング」を事業正式決定直後の6月から毎週月曜日（後に水曜日）に定例開催することとした。本事業に係る組織として、協力機関が2つ、再委託先が1つ、教育委員会が5つあり、明海大学がそれぞれとの連絡調整を行ったり、協力機関・再委託先・教育委員会相互間の中で本事業実施主体として連絡調整する業務が多いことから、事業の進行管理のために実施してきた。また、MEIKAI-JOEプラス事業の肝となる講座内容について教材開発を行う必要があることから、教材開発の検討も行ってきた。特に、明海大学教員が担当する回の講座については、その開発した教材について、必要に応じて協力機関との協議を踏まえて講座実施日に備えた。

②MEIKAI-JOEプラス共有アドレスの運用開始及びWebページの開設

MEIKAI-JOEプラス事業に参加する各区市教育委員会事務局、協力機関及び㈱モカカラーとの連絡専用の共有アドレスの運用を6月から開始した。また、講座開始に先立ち、受講する各区市の教員の便宜性を考え、受講者が適宜事前に講座内容を確認したり、受講後に振り返りができるようにするため、本事業受講者に限定したWebページを開設した。

③各区市教育委員会に対する貸与機材等の配備

10回の講座を円滑に実施するため、明海大学はレンタル機器等（ビデオカンファレンスツールCONNECT　1台、第7回講座から第10回講座の授業動画撮影用・iPad　1台、三脚1台及びボイスレコーダー1台）を各区市の拠点校に配送して講座実施に備えた。

④検討委員会の企画・開催

企画提案書（事業実施計画書）や6月15日に決定されたMEIKAI-JOEプラス検討委員会の設置要綱等に基づき、事業期間中の検討委員会の開催の準備を行った。新型コロナウイルス感染拡大が続く中であったので、3回行うこととしていた検討委員会を、全てZoomで開催するとともに、MEIKAI-JOEプラス検討委員会の下部組織である講座開発実施チームとの合同会議とすることとした。

第1回MEIKAI-JOEプラス検討委員会は、6月23日に実施して全ての協議題について賛同をいただいた。中間期の事業評価を協議するため、第2回検討委員会を10月6日に開催して、これまで実施してきた第1回から

第5回の講座に関する受講者のアンケート結果を説明して評価と改善点を協議するとともに、第7回から第10回までの授業研究の講座回の実施方法について協議した。そして、令和4年3月3日には、本事業の締めくくりとして第3回検討委員会を開催して、事業の最終評価を確認した。（検討委員会の詳細については後述。）

2　教育委員会への連絡・調整

事業の正式決定の1日前であったが、6月14日に、本事業の連携教育委員会とZoomによる会議を開催して、本事業の概要や講座内容について企画提案書（事業実施計画書）に基づき説明を行うとともに、各回の講座において、具体的に取り上げてほしい講座内容に関するアンケート調査の回答を依頼した。併せて、全10回の講座内容、実施日及び時程の調整作業に入るとともに、各教育委員会管下における拠点校（会場校）や参加教員の決定を依頼した。

講座内容については、第1回講座を「学習指導要領と第二言語習得」、第2回講座を「読むこと・書くことの指導」、第3回講座を「ALTとのティーム・ティーチング」、第4回講座及び第5回講座を「聞くこと・話すことの指導」、第6回講座を「小学校英語から中高への接続」、第7回講座から第10回講座については、各区市の代表の教員による授業動画に関する「授業研究」として、参加者全員で研究協議を行い、講師から指導助言をいただくものとした。また、実施日については、第1回講座を7月16日、第2回講座及び第3回講座を8月2日、第4回講座及び第5回講座を8月3日、第6回講座を9月21日、第7回講座を10月25日、第8回講座を11月15日、第9回講座を11月29日、そして第10回講座を12月10日とした。時程については、昨年度は15:00から16:30としていたが、今回からは、15:30開始で16:30終了とした。ただし、8月2日と8月3日実施の第2回から第5回の講座は、夏季休業中であり、二つの講座を連続して実施することとし、9:30から12:00までとした。なお、第7回講座から第10回講座は、当初15:30開始、16:30終了としていたが、今回の事業の目玉である各区市の授業研究の講座であることから、協議の充実を図るため、第8回講座からは、10分前倒して、開始時刻を15:20、終了時刻を16:30とする70分とした。

拠点校や参加者氏名については、MEIKAI-JOEプラスの全10回の講座開始前には、最終決定をみた。拠点校（会場校）については、足立区が区立西新井第二小学校、浦安市は市立明海小学校、横手市は市立朝倉小学校、いわき市は総合教育センター、そして妙高市は市立新井小学校と市立妙高小学校と決定した。参加者数については、足立区が20名、浦安市が30名、横手市が12名、いわき市が15名、そして妙高市が新井小学校30名、妙高小学校26名と決定した。その他、拠点校に集合しない拠点校外からの参加者についても、足立区が60名、浦安市が50名、横手市が20名、いわき市が15名と決定した。なお、妙高市については拠点校外からの参加者はなしと決定した。

その後、8月下旬までには、第7回講座から第10回講座で実施する授業研究（区市の教員の授業動画を基に研究協議を行うもの）は、どの区市が担当するか、どの講座を踏まえての内容とするかについて決定をした。具体的には、第7回講座（10月25日）は横手市が「読むこと、書くことの指導」を踏まえての授業研究とすること、第8回講座（11月15日）は妙高市が「聞くこと、話すことの指導」を踏まえての授業研究とすること、第9回講座（11月29日）は浦安市が「聞くこと、話すことの指導」を踏まえての授業研究とすること、第10回講座（12月10日）はいわき市が「ALTとのティーム・ティーチング」を踏まえての授業研究とすることが決定した。なお、足立区の授業研究については、企画提案書（事業実施計画書）で示した全10回の講座では消化できないことから、実際のリアルタイムによる講座という形式ではなく、オンデマンドの特設講座として実施した。

3　㈱モアカラーとの連絡・調整

文部科学省からの委託予定通知を受け、6月2日と6月8日には、㈱モアカラーと具体的な講座配信について打合せを実施した。令和2年度と同様に、明海大学をスタジオとして動画を配信することとし、どのように各区市の参加者にZoomを使用した動画配信を実施するかについて協議を行った。その後、7月6日には、動画配信の接続テストを各区市教育委員会の拠点校（会場）とともに実施し、第1回講座の実施に万全を期した。また、7月8日には、参加する小学校の先生方に提供するMEIKAI-JOEプラス専用のWebページについて協議した。更には、第7回講座以降の各区市の代表者による授業動画を活用した授業研究をどのように配信するかについて検討するため、9月6日に協議を行った。なお、10月1日には、第7回から第10回講座（特設講座を含む）で実施する授業研究で配信する授業動画がそれぞれ5つの連携教育委員会から送付されてきたので、㈱モアカラーに簡易編集を依頼した。

4　協力機関・外部有識者との連絡・調整

事業の正式決定を受け、それ以前に実施したZoom会議に引き続き、6月19日には、J-SHINEの藤田保・上智大学言語教育研究センター長・教授、佐藤久美子・玉川大学大学院名誉教授（J-SHINE会長）、鈴木菜津美・J-SHINE事務局長及び池田周・小学校英語教育学会愛知支部理事・愛知県立大学教授とZoomで協議を行い、MEIKAI-JOEプラス全10回の講座内容や実施日等について合意を得た。

3. 検討委員会設置要綱、委員名簿及び検討委員会議事録

本事業を円滑に遂行するため、以下のとおり、設置要綱及び構成メンバーを定めた。また、検討委員会は3回実施した。議事録も併せて示す。

1　設置要綱

2021年6月15日

令和3年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業に係る明海大学とJ-SHINE等及び連携教育委員会との検討委員会設置要綱

（設置目的）

第1　明海大学は、文部科学省から委託認可を受けた「令和3年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業（以下、「本事業」という。）」を遂行するため、標記の検討委員会（以下、「MEIKAI-JOEプラス（MEIKAI, J-SHINE and Office of Education Plus；メイカイ・ジョー・プラス）検討委員会」という。）を設置し、本事業を遂行する。

（検討内容）

第2　MEIKAI-JOE プラス検討委員会は、次の事項を所掌する。

(1) 本事業の全体進行管理に関すること。
(2) 本事業に係る連携教育委員会との間の調整に関すること。
(3) 本事業の在り方及び成果目標の検討に関すること。
(4) 本事業の中間評価の実施及び改善策の検討に関すること。
(5) 本事業の成果公表に関すること
(6) その他必要な事項に関すること。

（構成）

第3　MEIKAI-JOEプラス検討委員会は、次の委員をもって構成する。

明海大学教員、学識経験者（J-SHINE及び小学校英語教育学会愛知支部理事）、足立区教育委員会、浦安市教育委員会、横手市教育委員会、いわき市教育委員会、妙高市教育委員会の職員

2　MEIKAI-JOEプラス検討委員会には、委員長及び副委員長を置く。
3　委員長は、明海大学副学長・外国語学部長の職にある者を当てる。
4　副委員長は、委員長が指名する。副委員長は、委員長を補佐し、委員長が不在のときはその職務を代理する。
5　委員長は、必要があると認めるときは、関係者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

6　委員は、別表1のとおりとする。

（設置期間）

第4　MEIKAI-JOEプラス検討委員会の設置期間は、MEIKAI-JOEプラス検討委員会が設置された日から令和4年3月24日までとする。

（講座開発・実施チーム）

第5　MEIKAI-JOEプラス検討委員会の下に、講座内容を決定し実施するための、講座開発・実施チームを設置する。

2　講座開発・実施チームの委員は、別表2のとおりとする。

（庶務）

第6　MEIKAI-JOEプラス検討委員会の庶務は、明海大学企画広報課及び明海大学地域学校教育センターにおいて処理する。

（その他）

第7　この要綱に定めるもののほか、MEIKAI-JOEプラス検討委員会の運営に関し必要な事項は、明海大学企画広報課及びセンターが別に定める。

附　則

この要綱は、令和3年6月15日から施行する。

2　MEIKAI-JOEプラス検討委員会　委員名簿

別表1

	氏名	所属部署・職名	役割分担（専門分野等）
明海大学	高野 敬三	副学長・外国語学部長	委員長 （教育行政、英語教育等）
	石鍋 浩	教職課程センター・ 地域学校教育センター 教授	講座開発・実施リーダー （学校経営、英語教育等）
	金子 義隆	教職課程センター・ 地域学校教育センター 教授	講座開発・実施サブリーダー （応用言語学、第二言語習得、英語教育等）
協力機関	佐藤 久美子	J-SHINE会長 （玉川大学大学院名誉教授）	講座開発・実施アドバイザー等 （英語教育、言語学）
	藤田 保	J-SHINE専務理事 （上智大学言語教育研究センター長・教授）	副委員長・講座開発・実施アドバイザー等 （言語学、英語教育）
	池田 周	小学校英語教育学会愛知支部理事 （愛知県立大学外国語学部教授）	講座開発・実施アドバイザー等 （英語教育、言語学）
	志村 昌孝	足立区教育委員会 英語教育推進担当課長	講座開発・実施推進調整担当
	長野 栄一	浦安市教育委員会 指導課長	講座開発・実施推進調整担当
連携 教育委員会	西村 直崇	横手市教育委員会 教育指導課長	講座開発・実施推進調整担当
	津田 直人	いわき市教育委員会 総合教育センター研修調査室長	講座開発・実施推進調整担当
	重野 準司	妙高市教育委員会 妙高市教育研究会外国語部部長（妙高高原中学校長）	講座開発・実施推進調整担当

3　MEIKAI-JOEプラス検討委員会　委員名簿

	氏名	所属部署・職名	役割分担（専門分野等）
事 務 局	永田 美絵	企画広報課長	全体統括
	磯見 隆行	企画広報課課長補佐	経理事務・広報総括
	渡邉 久美子	企画広報課主任	経理事務・広報
	辻井 文男	企画広報課主任	経理事務・広報
	玉貫 美幸	学事課・教務担当	経理事務補助
	坂本 純一	教職課程センター・地域学校教育センター 教授	調整

4　検討委員会議事録

議事録

会　議　名	第1回検討委員会
日　　時	令和3年6月23日（水）　午前9時00分から1時間程度
場　　所	Zoomによる開催（新型コロナ感染症拡大防止のため）
出席者（敬称略）	高野委員長、石鍋委員、金子委員、佐藤委員、藤田委員、池田委員、志村委員、長野委員、西村委員、津田委員、重野委員

【議題】

1　学長あいさつ　　明海大学長　安井利一

2　検討委員会委員長あいさつ　　明海大学副学長　高野敬三

3　検討委員会委員自己紹介

　＊事務局及び講座開発・実施チーム、再委託機関も自己紹介

4　協議

(1) 事業実施計画書について

(2) 検討委員会設置要綱（案）について

(3) 検討委員会委員名簿について

(4) 講座開発・実施チームに係る設置要項（案）について

(5) 講座開発・実施チーム委員名簿について

(6) 事業推進計画について

(7) MEIKAI-JOEプラス講座内容等一覧（案）について

(8) MEIKAI-JOEプラス講座内容調査回答まとめについて

(9) MEIKAI-JOEプラス第7回目講座以降の授業研究について

(10) 各教育委員会へのレンタル機器の配備について

(11) 参加者人数概数（6月1日現在）について

(12) MEIKAI-JOEプラス共有アドレスの活用方法について

(13) 講座評価アンケートについて

(14) リフレクションシートについて

(15) Zoom接続テスト希望日程調査（案）について

(16) 各講座に係るZoomのURL等及びアンケート、リフレクションシートに係るGoogle FormsのURLの送付について

(17) 再委託先モアカラーからの講義配信の説明について

(18) 再委託先モアカラーからの授業動画の撮影方法の説明について

(19) MEIKAI-JOEプラス受講者の受講日・タスクの確認及び各種提出物の締切について

5　その他

⇒特になし。

【配付資料】

資料 1　令和3年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）事業実施計画書

資料 2　令和3年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業に係る明海大学とJ-SHINE等及び連携教育委員会との検討委員会設置要綱(案)
資料 3　MEIKAI-JOEプラス検討委員会　委員名簿
資料 4　講座開発・実施チームに係る設置要項(案)
資料 5　講座開発・実施チーム　委員名簿
資料 6　事業推進計画
資料 7　MEIKAI-JOEプラス講座内容等一覧(案)
資料 8　MEIKAI-JOEプラス講座内容調査回答まとめ
資料 9　MEIKAI-JOEプラス第7回目講座以降の授業研究について
資料10　各教育委員会へのレンタル機器の配備について
資料11　参加者人数概数(6月1日現在)
資料12　MEIKAI-JOEプラス共有アドレスの活用方法について
資料13　講座評価アンケートについて
資料14　リフレクションシートについて
資料15　Zoom接続テスト希望日程調査(案)
資料16　各講座に係るZoomのURL等及びアンケート、リフレクションシートに係るGoogle Formsの URLの送付について
資料17　文部科学省令和3年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業　講座配信への参加方法
資料18　授業動画の撮影について
資料19　MEIKAI-JOEプラス受講者の受講日・タスクの確認及び各種提出物の締切

会　議　名	第2回検討委員会
日　　時	令和3年10月6日(水)　午前9時から1時間程度
場　　所	Zoomによる開催(新型コロナ感染症拡大防止のため)
出席者(敬称略)	高野委員長、石鍋委員、金子委員、佐藤委員、藤田委員、池田委員、志村委員、長野委員、西村委員、津田委員、重野委員

【議題】
1　検討委員会委員長あいさつ　　明海大学副学長　高野敬三
2　協議
(1) 評価アンケート結果(第1回～第5回)について(資料1)
(2) リフレクションシート記述概要(第1回～第5回)について(資料2)
(3) MEIKAI-JOE プラス　各講座出席者数について(資料3)
(4) MEIKAI-JOEプラス　第7回講座以降の授業研究について(資料4)
(5) MEIKAI-JOEプラス　第7回～第10回講座 Webページ概要の作成について(資料5)
(6) 第7回以降の授業研究の講座におけるURLの送付及び参加方法の諸注意について(資料6)
(7) 全講座総合評価アンケートについて(資料7)
(8) MEIKAI-JOEプラス　報告書について(参考資料)
3　その他
⇒特になし。

【配付資料】
資料1-1～資料1-5　評価アンケート結果(第1回～第5回)
資料 2　リフレクションシート記述概要(第1回～第5回)
資料 3　MEIKAI-JOEプラス　各講座出席者数
資料 4　MEIKAI-JOEプラス　第7回講座以降の授業研究について(確認)
資料 5　MEIKAI-JOEプラス　第7回～第10回講座 Webページ概要の作成について(依頼)
資料 6　第7回以降の授業研究の講座におけるURLの送付及び参加方法の諸注意
資料 7　全講座総合評価アンケート

参考資料　MEIKAI-JOE　報告書について(案)　※昨年度の資料

会　議　名	第3回検討委員会
日　　時	令和4年3月3日(木)　午前9時から1時間程度
場　　所	Zoomによる開催(新型コロナ感染症拡大防止のため)
出席者(敬称略)	高野委員長、石鍋委員、金子委員、佐藤委員、藤田委員、池田委員、志村委員、長野委員、西村委員、津田委員、重野委員

【議題】
1　検討委員会委員長あいさつ　　明海大学副学長　高野敬三
2　協議
テーマ:本事業に係る総括
(1) 評価アンケート結果分析(第6回講座～第10回講座)について(資料1)
(2) 第1回～第10回講座の総合評価アンケート結果分析について(資料2)
(3) リフレクションシート記述概要(第6回講座～第10回講座)について(資料3)
(4) MEIKAI-JOEプラス　各講座出席者数について(資料4)
(5) MEIKAI-JOEプラス成果報告書について
⇒細かな課題はあったものの講座全体としては受講者にとって有意義なものになった。
今後、この成果をどのように広く周知・還元していくかを明海大学と各教育委員会とで検討していくことになった。
(6) 各教育委員会からの総括
3　その他
⇒特になし

【配付資料】
資料1-1～資料1-5　評価アンケート結果分析(第6回～第10回講座)
資料 2　第1回～第10回講座の総合評価アンケート結果分析
資料 3　リフレクションシート記述概要(第6回～第10回講座)
資料 4　MEIKAI-JOEプラス　各講座出席者数

4. 講座開発・実施チーム設置要項及び講座開発・実施チーム委員名簿

本事業を円滑に遂行するため、以下のとおり、設置要項及び構成メンバーを定めた。

1　設置要項

令和3年6月15日

講座開発・実施チームに係る設置要項
(設置)
第1　明海大学は、文部科学省から委託認可を受けた「令和3年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(以下、「本事業」という。)」を遂行するため、「令和3年度教員養成機関等との連携による専門門人材育成・確保事業に係る明海大学とJ-SHINE等及び連携教育委員会との検討委員会設置要綱第5に規定された、講座開発・実施チームを設置する。
(検討内容)
第2　講座開発・実施チームは、本事業を遂行するために、文部科学省から認可を受けた本事業の事業実施計画書に示した講座を開発し実施する。
(1) オンラインによる10回の講座の開発に関すること。
(2) 各講座について、オンデマンド配信する講座内容・資料の作成に関すること。
(3) オンライン講座の実施に関すること。
(4) 各講座間の調整に関すること。
(5) その他必要な事項に関すること。

（構成）

第３　講座開発・実施チームは、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

⑴ 明海大学教員、学識経験者（J-SHINE及び小学校英語教育学会愛知支部理事）、足立区教育委員会、浦安市教育委員会、横手市教育委員会、いわき市教育委員会、妙高市教育委員会の職員

⑵ 再委託業者として、（株）モアカラー職員

２　講座開発・実施チームには、講座開発統括責任者及び講座開発・実施リーダーと講座開発・実施サブリーダーを置く。

３　講座開発統括責任者は、明海大学副学長・外国語学部長の職にある者を当てる。

４　講座開発・実施リーダーは、講座開発統括責任者が指名する。講座開発・実施リーダーは本事業の講座の内容決定や実施に係る職務に当たるとともに、講座開発統括責任者を補佐し、講座開発統括責任者が不在のときはその職務を代理する。

５　講座開発・実施サブリーダーは講座開発・実施リーダーを補佐する。

６　全10回の講座の実施に関して、講座開発・実施アドバイザーを置く。アドバイザーは全10回の講座内容や実施方法などについて指導・助言を行う。

７　委員は、別表２のとおりとする。

（設置期間）

第４　講座開発・実施チームの設置期間は、講座内容・実施チームが設置された日から令和４年３月24日までとする。

（再委託機関）

第５　講座開発・実施チームが円滑に講座を実施するために、㈱モアカラーを本事業の再委託機関とする。

２　再委託機関は講座開発・実施チームと連携して事業の遂行に当たる。

（庶務）

第６　講座開発・実施チームの庶務は、地域学校教育センター及び明海大学企画広報課において処理する。

（その他）

第７　この要項に定めるもののほか、講座内容実施チームの運営に関し必要な事項は、明海大学地域学校教育センター及び明海大学企画広報課が別に定める。

附　則

この要項は、令和３年６月15日から施行する。

2　講座開発・実施チーム委員名簿

別表２

	氏名	所属部署・職名	役割分担（専門分野等）
明海大学	高野 敬三	副学長・外国語学部長	講座開発総括責任者
	石鍋 浩	教職課程センター・地域学校教育センター教授	講座開発・実施リーダー（学校経営、英語教育等）
	金子 義隆	教職課程センター・地域学校教育センター教授	講座開発・実施サブリーダー（応用言語学、第二言語習得、英語教育等）
	百瀬 美帆	教職課程センター・地域学校教育センター教授	講座開発・実施担当者（英語教育等）
	坂本 純一	教職課程センター・地域学校教育センター教授	講座開発・実施担当者（学校経営、英語教育等）
	Patrizia Hayashi	多言語コミュニケーションセンター教授	講座開発・実施担当者（英語教育等）
	Tyson Rode	多言語コミュニケーションセンター准教授	講座開発・実施担当者（英語教育等）
協力機関	佐藤 久美子	J-SHINE会長（玉川大学大学院名誉教授）	講座開発・実施アドバイザー等（英語教育、言語学）
	藤田 保	J-SHINE専務理事（上智大学言語教育研究センター長・教授）	講座開発・実施アドバイザー等（言語学、英語教育）
	鈴木 菜津美	J-SHINE事務局長	講座開発・実施アドバイザー
	池田 周	J-SHINE事務局長 小学校英語教育学会愛知支部理事 （愛知県立大学外国語学部教授）	講座開発・実施アドバイザー（英語教育、言語学）
連携教育委員会	三輪 政継	足立区教育委員会 学力定着推進課統括指導主事	講座開発・実施推進調整担当者（英語教育等）
	山口 哲治	足立区教育委員会 学力定着推進課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者（英語教育等）
	山﨑 由美	浦安市教育委員会 指導課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者（英語教育等）
	鈴木 真弓	横手市教育委員会 教育指導課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者（英語教育等）
	磯上 優美	いわき市教育委員会総合教育センター 研修調査室指導主事	講座開発・実施推進調整担当者（英語教育等）
	丸山 文雄	妙高市教育委員会 こども教育課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者（算数・数学）

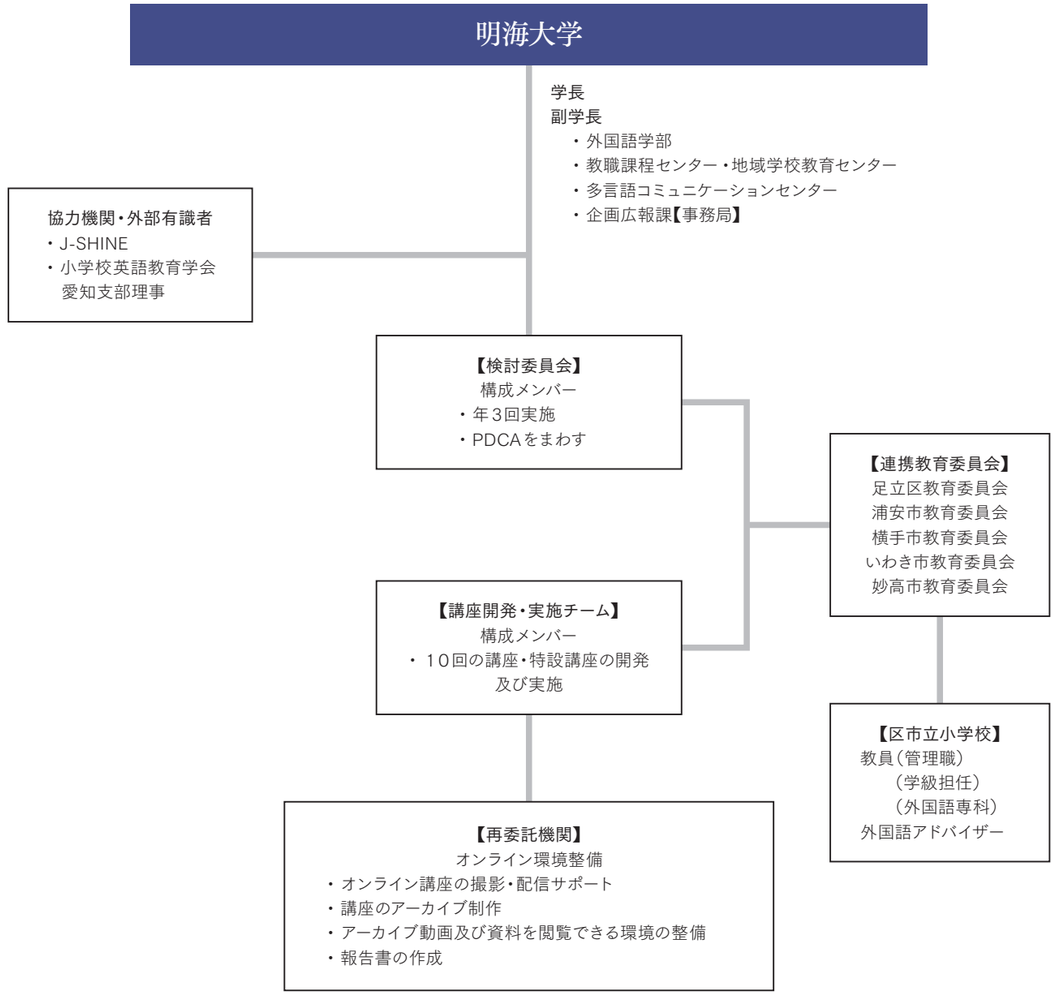
再委託機関　モアカラー

	氏名	所属部署・職名	役割分担（専門分野等）
再委託機関	石川 彩	㈱モアカラー 取締役	委託業務統括責任者
	谷口 竜介	㈱モアカラー チーフディレクター	オンライン環境整備（講座撮影配信、アーカイブ作成）等担当者

講座開発・実施チーム　事務局

	氏名	所属部署・職名	役割分担（専門分野等）
事務局	永田 美絵	企画広報課長	全体統括
	磯見 隆行	企画広報課課長補佐	経理事務・広報総括
	渡邉 久美子	企画広報課主任	経理事務・広報
	辻井 文男	企画広報課主任	経理事務・広報
	玉貫 美幸	学事課・教務担当	経理事務補助

5. 組織図：協力・連携体制



Ⅱ 講座概要

各区市における講座受講予定者数は拠点校133名、拠点校外で145名の合計278名であったが、新型コロナ感染症拡大に伴う緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が適用され、区市内の教育活動に制限が加えられたことなどにより、実参加者数は予定より少なくなった。

第１回講座　令和３年７月16日（金）午後３時30分～午後４時30分

【講座詳細ページ】⇒

学習指導要領と第二言語習得理論の理解に基づいた小学校英語教育の心構え

J-SHINE 専務理事（上智大学言語教育研究センター長・教授）
　藤田 保
教職課程センター・地域学校教育センター
　教授　金子 義隆

参加者

拠点校 106名

拠点校外 54名

目標

学習指導要領と第二言語習得の理解を基に小学校英語指導者が抱える課題解決の糸口を見つける。

概要

主体的に参加される先生方と本講座の講師が対話しながら日常の授業改善の道を探る。その中で学習指導要領やその背景にある第二言語習得理論についての理解を深めながら、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせた授業はどのように行うのか」などの小学校の先生方が抱える具体的な課題について話し合う。

事前課題

予めご覧になったMEIKAI-JOEの第1回講座と第5回講座（金子担当部分のみ：約25分）のビデオを再確認したり、当日配布資料を事前に読んだりして、講師に聞きたい質問やみんなで議論したい課題を考える。

講座の流れ(略案)

展開		参加者の活動	講師の動き	教材
1	挨拶及び講師紹介 (5分)	紹介された内容を理解する。	髙野先生の挨拶と講師紹介	なし
2	講師登場		【藤田先生】 【金子】	なし
3	講師の話題提供	講師の話を聞く。	【藤田先生】	なし
4	受講者とのやり取り	講師とやり取りする。	【藤田先生】 【金子】	なし (適宜PPT使用)
5	講師のミニ講義	講師の話を聞く。	【金子】	PPT
6	受講者とのやり取り	講師とやり取りする。	【藤田先生】 【金子】	なし
7	講座修了挨拶と連絡 (3分)		【金子】	PPT(1枚)

事後課題

この講座で学んだことを基にして、自身の外国語(活動)の授業を振り返り、その優れた点・改善すべき点について学校で同僚と分かち合い、更なる授業実践に活かしていく。

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

ここでは、講座実施後に受講者から寄せられた講座内容に関する質問に対する回答の代表例を記載している。全質問に対する回答は【講座詳細ページ】のQRでご覧ください。

質問 **今回の研修では、お世話になりました。3年の担任をしています。毎回の授業の振り返りを書かせています。児童が書いた内容を発表させています。「いいね。」「いいこと書いているね。」など、ありきたりな価値づけの言葉かけになってしまいます。どういった視点で、価値づけをおこなっていけばよいか教えてください。よろしくお願いします。**

回答 ほめるときは、具体的にほめてあげるといいと思います。ただ「いいね。」だけでなく、どこがどのように良かったのか、どこがまだ努力が必要なのかを子供がわかることが大切だと思います。また、良かったと思うには評価規準があるのだと思います。つまり、その授業の「めあて」に対して、どのくらい達成できたのかという視点からコメントをすることができるのではないでしょうか。さらに、結果だけでなく、プロセスをほめてあげることも大事だと思います。そのためには教師による継続的な見取りが必要になると思います。また、友達同士で褒め合うのも、良い勉強になります。友達からの評価はプラスの動機づけにつながります。「〇〇さんの発表は声が大きくて聞き取りやすかった」「しっかり相手の目を見て、話していた!」こんな、振り返りをしても良いと思います。

第2回講座　令和3年8月2日(月) 午前9時30分～午前10時40分

【講座詳細ページ】⇒

読むこと、書くことの指導

小学校英語教育学会愛知支部 理事(愛知県立大学 教授)
池田 周

参加者

拠点校 113名　拠点校外 58名

概要

本講座では、小学校「外国語活動」「外国語」を通して育成を目指す文字に関する技能、および「読むこと」「書くこと」の資質・能力の理解を構築し、それらの指導のポイントを学んでいきます。特に、文字や「読むこと」「書くこと」の領域において、「何を」「どのように」「どこまで」指導するのかについて、具体的なイメージをもっていただけることを目指します。さらにその評価のあり方についても、現状の課題を含めてお話しします。講師によるポイント整理と解説だけでなく、受講者同士の意見交換、実践・課題共有も行いながら進めていきます。

事前課題

事前課題(1)　「小学校外国語・外国語活動研修ガイドブック」(文部科学省)のうち、以下2つのセクションを熟読しておいてください。
◆実践編の中にある、授業研究の視点3「読むこと」の活動　pp.80-81
◆実践編の中にある、授業研究の視点4「書くこと」の活動　pp.82-83

事前課題(2)　文部科学省 MEXT Channel　のうち以下2つの動画を視聴しておいてください。
◆[なるほど!小学校外国語②] 読むこと　書くこと
◆小学校の外国語教育はこう変わる!④
～言語活動の進め方及び、読むこと・書くことの指導のあり方～

講座の主な流れ

(1) 本講座の目的	・小学校「外国語活動」「外国語」を通して育成を目指す文字に関する技能、および「読むこと」「書くこと」の資質・能力を理解する ・小学校外国語教育における「読むこと」の指導のポイントを理解する ・小学校外国語教育における「書くこと」の指導のポイントを理解する ・小学校における英語の「読むこと」「書くこと」の評価のポイントを理解する

(2) 小学校外国語教育を通して 文字に関係することについて 「何ができるようになる」のか、 そして、「どのように」指導するか	・中学校の学習指導要領について ・中学年「外国語活動」における文字の指導 ・高学年「外国語」の「読むこと」の指導
(3) 日本語と英語それぞれの 「音と文字の関係」について知る	・アルファベットの文字 ・日本語と英語それぞれの「音と文字の関係」の特徴 ・高学年「外国語」の「書くこと」の指導 ・「読むこと」「書くこと」の評価について

事後課題

講座内容を基に、各校で使用する検定教科書の「文字に関する事項」および「読むこと」「書くこと」のタスクを1つ取り上げ、その学習到達目標と指導における留意点、評価の観点と方法について、同僚と話し合ってみましょう。

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

ここでは、講座実施後に受講者から寄せられた講座内容に関する質問に対する回答の代表例を記載している。全質問に対する回答は【講座詳細ページ】のQRでご覧ください。

質問 **英語を読めるようにするという教師側の目的で、ジングルを機械的に扱っているなと感じる時があります。ジングルを教える際の児童の”気付きを引き出す”指導法があったら教えてください。ちなみに私は機械的に扱うのがいやなのでジングルにおもしろおかしくメロディがつけられている歌（”fun with phonics”）を、歌として子供たちに聴かせています。子供たちが勝手にまねするようになるのでおもしろいですが、この活動はどうでしょうか。**

回答 ご質問ありがとうございます。歌やチャンツ、ジングルなどは、児童の興味をひきつけますし、何度も聞くことによって「真似して」言えるようになる力にはいつも驚かされます。文字の「音」（sound）を扱うときに最も重要なのは、「個々の音を正確に聞き分けたり、言ったり（発音したり）しているか」だと感じています。すなわち、「/p/ の音を出すときには、喉に指先を当てても震えを感じない」、「/s/ の音のときには指先に震えを感じないけれども、/p/ とは違って伸ばすことができる」、「/m/ の音のときには喉に当てた指先に振動を感じるし、この音は長く伸ばすことができる」のような音の特徴に気付いていることが大切です。日本語を母語とする児童は、特に、「個々の子音を聞いても、その音の後ろに母音の音を伴ってしまう（母音挿入）」現象が起こることは講座内でも触れましたが、せっかくですので、現在ご実践されているような歌を導入される際には、児童が歌いながら出している「音」が、どのようになっているか、しっかり観察し、日本語との音の違いを含めて「気付きを促して」あげてください。母音挿入が起こったままで歌を真似ても、それはフォニックスがうまく行われているとは言えません。
また、「文字を見て、その文字が表す音を知識として覚える」ことができれば語が読める、というのは「文字から音へ」のアプローチです。小学校外国語では、「音から文字へ」の方向性のアプローチを目指していることも大切にしていただきたい点です。すなわち、「語を構成する音を小さな単位（音素の単位）に区切ることができて、その個々の音を表す文字がある」ということに気付かせる方法です。ジングルを通して児童の「音」への気付きを高める方法としては、次の方法を試してみてください。たとえば「/m/, /m/, milk」というジングルであれば、最後のmilkを/m/ と /ilk/ の部分に分割して（オンセット・ライムの区切り）児童に聞かせたり、一緒に言ってみたりすることです。そのうち「/m/ と /ilk/ を合わせるとmilk」、「/m/ と /at/ を合わせるとmat」といった「音の混成」の活動へとつなげることができます。お気付きの通り、この段階では文字を全く扱っていません。耳で聞いた音を混成したり、一部を削除したり、自在に操作できるようになって初めて、「音から文字へ」対応させる段階となります。

第3回講座　令和3年8月2日（月）午前10時50分～正午

【講座詳細ページ】⇒

chantsを活用したALTとのティーム・ティーチングについて

明海大学　多言語コミュニケーションセンター
教授　Patrizia Hayashi
准教授　Tyson Rode
教職課程センター・地域学校教育センター
教授　百瀬 美帆

参加者
拠点校 113名
拠点校外 58名

目標

Target of Rhythm Skills for the ES English Classroom Project
- 学級担任はALTとのTTによりchantsを効果的に指導することができる。
- 学級担任はT1としてchantsを指導することができる。
- HRT can work with an ALT to teach chants in an effective way.
- HRT can take on the role of the T1 to teach chants.

概要

目標表現をchantsにより導入することで、児童が表現をひと固まりのチャンクとして丸ごと覚え、同じような場面に出会った時に表現をそのまま使うことができるようにようにする指導方法を提示します。英語の音声の特徴にも言及し、(1)くっつく音 (2)落ちる音などをchantsで指導する方法を示します。参加者がT1としての役割を体験できるワークショップ方式をとります。

事前課題

事前課題(1)　◆昨年度の講座を収めた動画の34分20秒から始まる「ALTとの打ち合わせ」動画を予めご覧ください。
事前課題(2)　資料をお読みください。　◆効果的なTTに役立つ表現
事前課題(3)　資料をお読みください。　◆ Chantsを使う8つの理由

講座の流れ(略案)

手順		活動 / 内容	教材	備考・Zoom
1	Greetings (5min.)	高野先生の挨拶と内容紹介 Takano sensei introduces today's event.	児童役大学生6名	
2	Teacher and Student Introductions (2min.)	Patrizia, Tyson and Momose will introduce themselves to the audience.	講師3名自己紹介 生徒役6名は百瀬が紹介	
3	Introduction of Today's Goals and Objectives 本時の目的 (百瀬) (4min.)	Momose will explain in Japanese the purpose of today's event.	PPT 1,2,3 ※「指導と評価の一体化」資料提示(手持ち)	
4	Small Talk (5min.) Small Talkのモデル ※日本語の有効な使い方を紹介	Show an English conversation about the topic with natural instruction in English. 説明(百瀬 1分) 実演(百瀬 &Tyson) ポイント: HRTは適時に適切な日本語を与えること。(逐語訳ではない) Only when necessary, HRT gives appropriate instruction in Japanese (it's not a translation). 3rd year students will act the part of students. T1: What did you do this weekend? T2: Not much. I'm new to this town so I don't know where to go. T1: Oh, I know many places in this town… T2: What do you have in your town? T1: We have Meikai University. T2: That's great! We don't have a university in my town in Canada. Ask students.	PPT 4ページ 児童役学生参加 ＊児童同士Small Talk 児童への質問 T1 タイソン先生にこの町にあるものを教えてください。 T2 What do you have in your town? Ss: (We have) a station.	各市にあるものの写真など station, convenience store, library, aquarium, swimming pool, hospital, department store, bookstore, amusement park, park
5	Introduction of Chant Activities (3min.)	Momose, together with Patrizia and Tyson will give the introduction. 教科書で扱われているchantsに言及 Chantsの機能・重要性を説明(百瀬) ポイント:学習指導要領 外国語第2節英語2内容(1)英語の特徴やきまりに関する事項で次に示す基本的な語や句、文について取り扱うこと。 ア 音声 (ｱ)現代の標準的な発音 (ｲ)語と語の連結による音の変化 (ｳ)語や句、文における基本的な強制 (ｴ)文における基本的なイントネーション (ｵ)文における基本的な区切り ※音声指導はALTが得意とするところ。活用する。 ※HRTは児童とともに学ぶ姿を見せることが大切。 ※目標表現を場面とともに丸ごと提示、楽しく練習、丸ごと覚えて、児童が同じ場面に出会ったときに丸ごと使える。	PPT 5	*Don't skip or just press play *Do break them down into "chunks" ※CDプレイヤーのボタンを押すのではなく、教師がひとかたまり(チャンク)に分けて指導する。 *Do look for links *Do a guru guru practice
6	Do's and Don'ts of Teaching Chants (3min.)	Momose, together with Patrizia and Tyson will give a brief overview of the best practices to teach chants. ※本時の3つのポイント 1. Chunk it (ｵ)文における基本的な区切り 教科書のモデル音声をいきなり使用すると速度が速すぎたり、ひとつチャンクが大きすぎる場合がある。 □ 教師が適切なチャンクに砕きます。 2. Link it (ｲ)語と語の連結による音の変化 ・くっつく音(assimilation) となりあった音の影響で、ある音が別の音に変わってしまうことがある。 3. ぐるぐる HRT、ALT、児童の中で活動を回していきましょう。	PPT 5	*Don't skip or just press play *Do break them down into "chunks" ※CDプレイヤーのボタンを押すのではなく、教師がひとかたまり(チャンク)に分けて指導する。 *Do look for links *Do a guru guru practice
7	How to Break Down the Chant into Manageable Chunks (5min.)	Instructors will explain how to break down English sentences into natural and manageable chunks. ※「文における自然な区切り(チャンク)」の区切り方について説明(百瀬)	Need to have the chant accessible Worksheet PPT 6,	*Make connection to JHS curriculum
8	How to Look for Links (5min.)	Instructors will demonstrate how to find links in the sentences. 例:Let's go for it. ・落ちる音(elision) 前後に来る音によってお互いに影響を受けて音が脱落することがある。 例:big game , sit down ・つながった音(liaison) 例:stand up/ an egg	● Need to have the chant accessible ● PPT 7 ● Worksheet 拠点校の先生方はワークシートにchunkとlinksを記入する。 □答え合わせ	*There are always links in English. Even when speaking slowly, we do not say each word. individually. 語と語をバラバラに発音すると英語の自然な音声ではなくなる
9	How to Do ぐるぐるチャンツ (15min.)	Model how to teach chants with an ALT and with T1 leading only. ChantsをALTとのTTで指導する場合と、HRT一人で指導する場合の指導例 ・最初は明海大学学生を児童に見立ててモデルを示す。 ● First time slow, T1 is a learner ● Second time a little faster ● Third time listen to the chant to get feel for the rhythm ● Do it all together to the recorded chant	各拠点校の代表者がT1としてALT(Tyson)に続いてリピートする。 ※学習者として努力している姿を見せる Tyson □ 浦安 Tyson □ 足立 Tyson □ 横手 Tyson □ いわき Tyson □ 妙高1 Tyson □ 妙高2 順番でない拠点校は話さないでください。	*Explain that we listened to all of the chants and found them quick and challenging. (Goal is to be able to reproduce that speed and language, but students need support and scaffolding first.) *Teacher can play the role of the learner
10	講座修了挨拶と連絡 (3分)	質疑応答 The floor is open to participants to ask questions.	活動の順番に声をかける。	
11	Closing (3min.)	All three instructors give closing comments.		

事後課題

事後課題の詳細は、第3回講座の中でご説明します。

事後課題(1) ◆解答例:Effective Use of Chants "I like my town."

事後課題(2) ◆Effective Use of Chants "Do you want to watch baseball?" 解答例付き

事後課題(3) ◆レッスンプラン案 Lesson Plan Template

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

ここでは、講座実施後に受講者から寄せられた講座内容に関する質問に対する回答の代表例を記載している。全質問に対する回答は【講座詳細ページ】のQRでご覧ください。

質問 **英語の文章の長さの違いによって、チャンツのリズムを作るのが難しいと感じたのですが、どのようにリズムを作っていくといいのか、教えていただけるとありがたいです。また、今回のぐるぐるのリズム（児童からALTに返すとき）に違和感を感じたのですが、慣れていくと大丈夫なのでしょうか？**

回答 チャンツは意味のかたまり（チャンク）、音のつながりを切らないように配慮すれば、どのようなリズムに合わせてもよいので、英語の文の長さに合わせやすいリズムの音源や先生の手拍子に合わせて活動してみてください。第3回講座では児童役の学生のリズムの取り方にばらつきがみられました。実際の授業においても同じようなリズムのずれ等が生じるかもしれませんが、必ずしも、全員ぴったりそろわなくてもよろしいと思います。ただし個々の児童が意味のかたまりや音のつながりを意識してチャンツしているかを観察することが大切でしょう。

第４回講座　令和３年８月３日（火）午前９時30分～午前10時40分

【講座詳細ページ】⇒

聞くこと・話すことの指導
Lesson 1

J-SHINE 会長（玉川大学大学院名誉教授）
佐藤 久美子

参加者

拠点校 113名

拠点校外 57名

概要

「話すこと」の基本的な指導法、及び「聞くこと」「話すこと」の評価方法について、具体的なActivityや児童の発表内容に基づきながら理解する内容です。また、参加者から事前にいただいた「児童の発話を増やすための手立て」、「会話を継続させる力をつける活動例」、「児童が英語で対話できるようになるための指導のステップとは」などの質問に、具体例を挙げてお答えします。講座の中で、講師と受講者とのやり取り（Activity）も一部行います（講義＋ワークショップ型）。

事前課題（第４回・第５回講座共通）

事前課題(1)　以下の「外国語の目標」に書かれている言語活動とは、外国語活動・外国語の授業において、具体的にはどんな活動を指しますか？　考えて複数挙げてみましょう。
解答例：歌、チャンツ、絵本の読み聞かせ、など

事前課題(2)　**『イラスト図解　小学校英語の教え方25のルール』（佐藤久美子著、講談社）**
こちらを事前に読んでいただければ幸いです。特に、以下のRuleが本研修に係わる部分です。事前に読んでいただき、考えておいていただけると、より研修がわかりやすいと思います。

Rule16　目標表現は必然的な場面で運用！
「必然的な場面」とはどんな場面ですか？

Rule 17　英語のやり取りには絵本を使う！
絵本はどのように読むのでしょうか？

Rule 18　発表は“Show and Tellで楽しく！”
“Show and Tell”とは、どんな発表形式ですか？

Rule 20「聞くこと」では身近で簡単な話を！
身近で簡単な話とは、どんな話ですか？

Rule 22「話すこと」ではパフォーマンステストを意識！
小学生のパフォーマンステストとは、どんなテストですか？

講座の主な流れ

(1) Lesson１の概要	・聞くことの指導についての質問 ・話すことの指導についての質問	・聞くこと・話すことに共通した質問
(2) 学びのまとまりとしての効果的な単元構成	・授業の流れは一定に Greeting, Warming up, Small Talk, Activity, Presentation, Review	
(3)「聞くこと」「話すこと」の具体的な評価方法	・指導と評価の一体化 ・学習評価の改善 ・学習評価の場面や方法の工夫 ・小学校外国語の内容のまとまり（５領域）	・音声や態度 ・話型 ・必然的な場面での発表 ・中学校でのパフォーマンステスト

事後課題（第４回・第５回講座共通）

今回は講座の中で、皆様からの質問にお答えしました。今度は皆様の番です。講座の中で扱った以下のトピック、できれば具体例を挙げながら答えましょう。

Question 1　目標表現は必然的な場面で運用！
今回の授業では、How many ～？を使った発表をするのがゴールです。児童が、お互いのふでばこの中身を見ながら、How many pencils do you have ？と質問をすることは、「必然的な場面」とは言えません。答えが分かってしまうからです。また、ワクワクする言語活動とも言えません。
◎そこで、児童が自分の考えや思いが伝えられる、How many ～？を使った活動、特に、最後の発表の仕方を考えましょう。

Question 2　英語のやり取りには絵本を使う！
小学校にある、あるいは、ご自分の家にある、あるいはオンラインで見つけても良いので、簡単な絵本を1つ使い、「聞き取り」の指導の仕方、児童と英語で「話す（やり取りする）」指導方法を実践してみましょう。
絵本を読む前に、まずは何をしますか？　児童が聞きやすい指導方法を使います。
次に、本を読み進めます。どのような、質問ややり取りをしますか。
講義の内容を思い出し、さらに自分で工夫をして、読み語りを実践してみましょう。

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

ここでは、講座実施後に受講者から寄せられた講座内容に関する質問に対する回答の代表例を記載している。全質問に対する回答は【講座詳細ページ】のQRでご覧ください。

質問

中学校のライティング評価で、文字数によって評価すると事前に生徒に伝えるというお話がありました。「既習表現を使おう」というテーマだからだとは思いますが、短く簡潔でわかりやすい英文を書いた生徒の評価がBで、長々と書くことで逆にわかりづらい英文になってしまった生徒の評価がAになることもあり得るのではないかという疑問がありました。それが全てではなく「実態に応じて」であれば、事例を知りたいと思いました。とてもわかりやすい講義をありがとうございました。

回答

中学校のライティングの評価は、例えば、文の数で評価していました。

例　A：10文以上　B：7～8文　C：6文以下

この時、もう1つ条件がついていて、全て同じ種類の文を使ってはいけない。Canだけ含む文を使っている、isだけ含む文を使うのではなく、canもisも使ってください、というようなものです。

Ichiro can run very fast. He is a good baseball player. のように。

事前に、生徒たちにこれらの評価基準を与えておくことが大切だと思います。また、他の基準の例では、起承転結を表す文をそれぞれ1文ずつ書きなさい、などもありました。いずれも、中学校1年生の例ですので、それほど長い文は書けませんので、単文の数や、その単文の内容で評価することが多いようです。

第5回講座　令和3年8月3日（火）午前10時50分～正午

【講座詳細ページ】⇒

聞くこと・話すことの指導
Lesson 2

J-SHINE 会長（玉川大学大学院名誉教授）
佐藤 久美子

参加者

拠点校 114名

拠点校外 57名

概要

「聞くこと」の基本的な指導法や「Small Talkを生かした4技能を取り入れた効果的な指導方法」、「1人1台端末の効果的な活用場面」、「相手の話す内容を予測しながら聞く力の育て方」など、事前にいただいたアンケートの質問について、実際に小学校で行われている実例を挙げながらお話します。All Englishで行う、あるいは日本語を減らす指導法などについても、講座の中で、講師と受講者とのやり取りをも一部入れながらやり取り（Activity）も一部行います（講義＋ワークショップ型）。

事前課題（第4回・第5回講座共通）

事前課題(1)　以下の「外国語の目標」に書かれている言語活動とは、外国語活動・外国語の授業において、具体的にはどんな活動を指しますか？　考えて複数挙げてみましょう。

解答例：歌、チャンツ、絵本の読み聞かせ、など

事前課題(2)　『イラスト図解　小学校英語の教え方25のルール』（佐藤久美子著、講談社）

こちらを事前に読んでいただければ幸いです。特に、以下のRuleが本研修に係わる部分です。事前に読んでいただき、考えておいていただけると、より研修がわかりやすいと思います。

Rule16　目標表現は必然的な場面で運用！
「必然的な場面」とはどんな場面ですか？

Rule 17　英語のやり取りには絵本を使う！
絵本はどのように読むのでしょうか？

Rule 18　発表は“Show and Tellで楽しく！”
“Show and Tell”とは、どんな発表形式ですか？

Rule 20「聞くこと」では身近で簡単な話を！
身近で簡単な話とは、どんな話ですか？

Rule 22「話すこと」ではパフォーマンステストを意識！
小学生のパフォーマンステストとは、どんなテストですか？

講座の主な流れ

(1) Lesson 2の概要	・話すことの指導についての質問 ・聞くことの指導についての質問 ・聞くこと・話すことに共通した質問
(2) 事前に出された各区市からの質問に対する答えと解説	・「聞くこと」に関する基礎的な指導法 ・「聞くこと」の具体的な評価方法 ・相手の話す内容を予測しながら聞く力の育て方 ・Classroom Englishにつながる語彙の拡大 ・All English で授業を行うメリット ・母語にない音声、聞いた音を再現する方法 ・教師のSmall Talkやデジタル教材の活用など、聞き取る工夫 ・少しずつ変化をもたせながら繰り返し聞いて表現に慣れる工夫 ・Small Talkを生かした4技能を取り入れた授業の効果的な指導方法の具体例 ・一人1台端末の具体的な活用場面

事後課題（第4回・第5回講座共通）

今回は講座の中で、皆様からの質問にお答えしました。今度は皆様の番です。講座の中で扱った以下のトピック、できれば具体例を挙げながら答えましょう。

Question 1　目標表現は必然的な場面で運用！

今回の授業では、How many ～?を使った発表をするのがゴールです。児童が、お互いのふでばこの中身を見ながら、How many pencils do you have ?と質問をすることは、「必然的な場面」とは言えません。答えが分かってしまうからです。また、ワクワクする言語活動とも言えません。

◎そこで、児童が自分の考えや思いが伝えられる、How many ～?を使った活動、特に、最後の発表の仕方を考えましょう。

Question 2　英語のやり取りには絵本を使う！

小学校にある、あるいは、ご自分の家にある、あるいはオンラインで見つけても良いので、簡単な絵本を1つ使い、「聞き取り」の指導の仕方、児童と英語で「話す（やり取りする）」指導方法を実践してみましょう。

絵本を読む前に、まずは何をしますか？　児童が聞きやすい指導方法を使います。
次に、本を読み進めます。どのような、質問ややり取りをしますか。
講義の内容を思い出し、さらに自分で工夫をして、読み語りを実践してみましょう。

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

ここでは、講座実施後に受講者から寄せられた講座内容に関する質問に対する回答の代表例を記載している。全質問に対する回答は【講座詳細ページ】のQRでご覧ください。

質問　**音声に慣れ親しませる時間が十分に確保できないときの、対処法を教えてください。トップダウンのお話が興味深かったです。Listeningについての考え方が変わりました。お聞きしたいのは、ボトムアップについてです。普段の授業では、スモールトーク後、「What did you hear?」と聞くことが多いのですが、聞き取らせるときにどんな工夫をしたら良いかということです。なかなか聞き取れない子がいます。聞かせる前に聞き取るポイントやクイズ「先生の好きな食べ物が出てくるよ。何かな？」を出しても良いものでしょうか。**

回答　トップダウンの話がお役に立ったようで、嬉しいです。ボトムアップですが、先生がおっしゃっているように、聞かせる前に聞き取るポイントやクイズを出すのも、良いアイディアだと思います。このように、ある程度予想される知識を与えておくと、聞き取りがやや弱い子供も、少し自信を持ってきくことができます。こうした安心感を持ってリスニングに望むことが、何よりも大切です。また、黒板に予想される単語を書いておき、いくつ聞き取れたかな？などと、質問しても良いと思います。子供たちに、聞き取れた単語や内容など、どんどん自由に話させるもの、やる気を起こさせると思います。

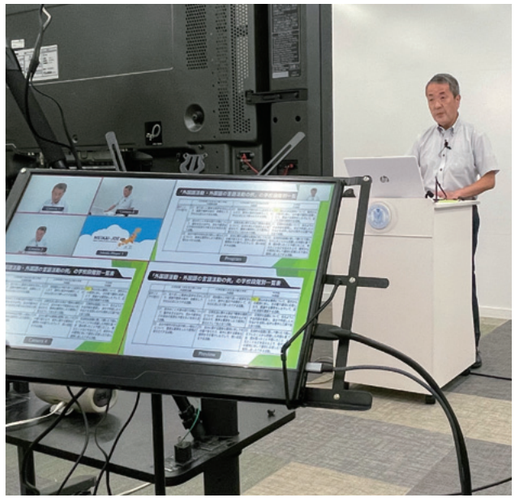
第６回講座　令和３年９月21日（火）午後３時30分～午後４時30分

【講座詳細ページ】⇒

小学校から中学校・高等学校への学びの接続

明海大学　教職課程センター・地域学校教育センター
教授　石鍋 浩
教授　坂本 純一

参加者
拠点校 64名
拠点校外 88名



概要

「学校段階間の接続」が重要と言われています。本講座では、小学校から中学校・高等学校における指導へ円滑に接続できるようにするための指導方法や言語活動等について理解することをねらいとします（講義型）。

事前課題

事前課題(1)　令和２年度のMEIKAI-JOE 第５回講座の中の資料「中学校への接続の期待」を読んでおきましょう。
事前課題(2)　次の資料を読んでおきましょう。
◆「外国語活動・外国語の目標」の学校段階別一覧表
◆「外国語の言語材料」の学校段階別一覧表
◆「外国語活動・外国語の言語活動の例」の学校段階別一覧表
◆「高等学校外国語科の科目構成・現行と今後」

講座の流れ（略案）

時間・展開		参加者の活動	講師の動き		留意点
			【坂本】	【石鍋】	
1	あいさつ・趣旨説明・講師紹介（高野副学長）〈3分〉15：30	高野先生のあいさつ及び趣旨説明を聞き、本講座の趣旨を知る。また講師を知る。			
2	本日の目標（坂本）〈1分〉15：33	本時の目標と展開を知る。			
3	学校段階間の接続（坂本）〈1分〉15：34	学習指導要領における「学校段階間の接続」の重要性を知る。	学習指導要領における「学校段階間の接続」の重要性を説明する。		PPTスライド（表紙～7）
4	小・中の接続（石鍋）〈15分〉15：37	小・中の接続について知る。途中、動画を視聴する。		小・中の接続について説明する。途中動画を活用する。	PPTスライド（8～11） 波多野先生YouTube 0’00’’～8’35’’
5	中・高の接続（坂本）〈15分〉15：52	中・高の接続について知る。途中、動画を視聴する。	中・高の接続について説明する。途中動画を活用する		PPTスライド（12～17） 中鉢先生You Tube 0’00’’～0’05’’ 1’38’’～4’52’’ 14’29’’～17’33’’ 竹内先生You Tube 12’35’’～12’39’’ 20’20’’～24’40’’
6	小・中・高の接続と今後への期待（坂本）〈1～2分〉16：08	小・中・高の接続の意義と今後への期待について知る。	小・中・高の接続の意義と今後への期待について知る。		PPTスライド（18）
7	まとめと質疑応答（坂本・石鍋）〈20分〉16：10	まとめの話合いと質問をする。	質問に応答する。	まとめの指示をする。質問に応答する。	PPTスライド（19）
8	事務連絡と閉会のあいさつ（石鍋）〈1分〉16：30	事務連絡と閉会のあいさつを聞く。		事務連絡と閉会のあいさつをする。	PPTスライド（事務連絡）

事後課題

中学校や高等学校への接続を意識した指導を実践し、指導方法・内容や児童の変容を他の先生方と情報交換しましょう。

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

ここでは、講座実施後に受講者から寄せられた講座内容に関する質問に対する回答の代表例を記載している。全質問に対する回答は【講座詳細ページ】のQRでご覧ください。

質問　**（第6回講座で視聴した文科省のYouTubeでは、）英語で言葉の説明を、高校生にしていました。小学校では、デモンストレーションでやり取りしながら、子供たちが言葉の意味を理解してしまうことがあります。言い換える難しさを感じました。あえて、言い換えようとすると、こちらが、困ってしまうことがあります。笑**

回答　教員によるモデル提示や教員と児童とのやり取りを通して言葉の意味に気付き、理解していくことはとても重要です。小学校においては言い換えることに重点を置くよりも児童の気付きなどを大切にしていってほしいと思います。
ただし、Activityなどの指示を英語でしているときに、児童がわかっていないと気付いたときは、さらにジェスチャーなども使い、より易しい英語で言い換えて指示することも大切です。

第７回講座　令和３年10月25日（月）午後３時30分～午後４時30分

【講座詳細ページ】⇒

授業研究 ①

秋田県横手市（指導主事　鈴木 真弓）

授業者氏名　伊藤 久美
　　清水 知（ティーム・ティーチング）
学　校　名　横手市立横手南小学校
担 当 学 年　第6学年
使用教科書　One World Smiles 6（教育出版）
単　元　名　「Lesson 4 My Summer Vacation」
　　～夏休みの思い出を伝え合おう～
テ　ー　マ　読むこと、書くことの指導
講　　師　池田周（愛知県立大学教授）、明海大学教員他

参加者

拠点校 75名

拠点校外 67名

概要

横手市では、「読むこと・書くこと」の講座を基に、第６学年の授業を提案します。本動画には、単元（全７時間）の第５時「話すこと（発表）」と第６時「書くこと」の学習場面を収めています。「書くこと」の資質能力を、子供たちがどのように身に付けていくのかを捉え、小学校段階での指導の在り方について、考えていきます。たくさんのご意見、ご提案をいただければ幸いです。

事前課題

第７回講座　授業動画（横手市立横手南小学校）の視聴

協議概要

授業動画の視聴後には、小グループに分かれ、次の２点について協議した。参加者から寄せられた主な意見を記す。

(1)参考にしたい点

①「話すこと（発表）」から「書くこと」への効果的な学習プロセス

発表をする時は、日本語でのメモを参考にして、英語表現を考えながら伝えていた。書くときには、発表したことを基に、さらに思考を働かせながら書くことに取り組んでいた。英文を書いて準備（暗記）し発表をするプロセスでは育成することできない力が育成されていた。

②「書くこと」の留意点に気付かせ、共有する方法

「書くこと」の学習活動の前に、教科書のモデル文を用い、文のきまりについて気付かせ、共有していたこと。これは、書くことの活動の後に、自らがセルフチェックをしたり、児童同士が読み合い確認し合ったりする際に有効に機能していた。

③共通して起こる誤りの修正

「話すこと（発表）」において共通して起こった発話の誤りを、クラスで共有していたこと。次に続く「書くこと」の学習活動に効果的につなげていた。

④「書くこと」で用いるシートを３種類準備し、児童自らが選択できるようにしていたこと

①ガイドあり４行版、②ガイドなし４行版、③ガイドなし６行版
選択させることで、書くことへの不安を和らげ、子供たちの学習意欲を高めることにつながっていた。

(2)課題点と改善案

①誤りの修正の仕方について

「It big and beautiful.」と書いた児童に対して、「It was big and beautiful.だよ」と正しい表現をすぐに教える場面があった。正しい表現を複数回聞かせたり、児童とやり取りをしたりしながら、「児童自身に気付かせる」ための一工夫があるとよかった。

②「書くこと」に関する負担の軽減について

本提案授業では、第６時にあたる本時でまとまりのある英文（４文程度）を書いていた。子供たちは大変よく書けていたが、書く分量が多いため児童にとっては負担が大きかったのではないかと感じた。１時間毎に１文程度を書きためて、単元終末までに夏休みの思い出を完成させていくという指導も効果的であると考える。

③「書くことにおけるチェックポイント」の意識化について

掲示物やシート等を工夫することで、「書くこと」のチェックポイントを常に目にし、意識できるような工夫があると効果的だと感じた。

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

ここでは、講座実施後に受講者から寄せられた講座内容に関する質問に対する回答の代表例を記載している。全質問に対する回答は【講座詳細ページ】のQRでご覧ください。

質問 **「書くこと」への子供たちの意欲を高めるために、どんな手立てがなされたか。また、個人差に対応するためにどんな手立てがなされたのかをお聞きしたい。**

回答 書くことへの意欲付けとして、「他のクラスのお友達（6学年3クラス）とも、夏休みの思い出について伝え合おう」という目的を設定した。このことにより、話すこと（発表）に加えて、書くこと、そしてその思い出を読み合うことについても、目的意識を明確にして取り組むことができていた。個人差への対応については、次の3点が挙げられる。(1)絵日記シートを3種類準備し、児童自らが選択できるようにしたこと、(2)本単元のテーマ「夏休みの思い出」で活用することができるように、語彙・表現をまとめた「思い出シート」を準備したこと、(3)必要に応じて語彙や表現を書いて教えることができるように、書いて渡せる「4線シート」を準備したこと。（回答者：授業者）

質問 **外国語の辞書の活用について、子供たちのレベルに合ったものを活用するとしたらどのようなものがふさわしいか。**

回答 LongmanやOxfordなどさまざまな出版社から出ているPicture Dictionaryがお薦めである。単なる絵辞書であるというよりも、対話文が載っていたりして、英語を学ぶための工夫がみられるものである。中学校以降のように文による「語の定義」が必要な段階に入れば、日本語の児童用国語辞典のような、Elementary Dictionaryのシリーズを使い始めると、語の定義もやさしい英語で書かれており、生徒にもわかりやすいので便利である。Picture Dictionaryは、大人が「やさしい英語」を意識して話す時なども活用することができるものとなっている。（回答者：講師）

第8回講座　令和3年11月15日（月）午後3時20分～午後4時30分

【講座詳細ページ】⇒

授業研究 ②

新潟県妙高市（指導主事　丸山 文雄）

授業者氏名　丸山 恵理（HRT）
　　Jenny Coralie（ALT）
学　校　名　妙高市立妙高高原南小学校
担 当 学 年　第5学年
使用教科書　Blue Sky 5（啓林館）
単　元　名　「Unit4 She can sing well.」
テ　ー　マ　聞くこと・話すことの指導
講　　師　佐藤久美子（J-SHINE 会長、玉川大学大学院名誉教授）、明海大学教員他

参加者

拠点校 95名

拠点校外 61名

概要

妙高市では、「聞くこと・話すこと」の講座を基に、第5学年の授業を提案します。本動画には、単元（全7時間）の第4時「相手の答えを予想して、できるかどうか尋ねたり、答えたりする」学習場面を収めました。児童の「話したい」「聞きたい」という思いを引き出すためにSmall Talkを設定し、スモールステップで「Yes/Noクイズ」を行いました。児童の姿を通して、児童が英語で対話できるようになるための指導のステップが適切であったか、「Yes/Noクイズ」が必然性のあるワクワクする言語活動になっていたか、皆さんと一緒に考えていきます。たくさんのご意見、ご提案をいただければ幸いです。

事前課題

第8回講座　授業動画（妙高市立妙高高原南小学校）の視聴

協議概要

参加者に、以下の協議題を踏まえ動画を視聴することと、グループ協議はKPT法で行うことを周知した。

1 指導のステップが適切であったか。

2 必然性のある言語活動になっていたか。

参加者からの意見や感想等は、以下のとおりである。

1 について

- 先生が子供に使わせたい表現の提示の仕方や、その表現に行き着くまでのアプローチの仕方がよい。特に、掲示物を使って動詞を視覚的にわかりやすくしていた。
- チャンツが効果的だった。クラスの雰囲気がよくなった。
- フォニックスは、1文字だけの練習でよかった。
- フィードバックがよい。みんなの前で口頭で伝えることで、本人の自己肯定感、外国語を学ぶ楽しさや喜びが体験できる。
- スモールトークでは、段階を踏むことで子供から参加し、主体性が育っていた。子供が自信をもてる授業だった。フレーズを変えながらやり取りをしていたので、子供が飽きないで楽しみながら活動していた。

2 について

- Are you~? Can you~?を混同していて対応が難しかったと授業者から振り返りがあったが、自然に子供に訂正をしながら違いを説明していて適切であった。
- チャンツ“ぐるぐる”を活用して、上手に子供の思考力を育んでいた。また、動物のクイズも子供の意欲を高め必然性のある言語活動になっていた。

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

ここでは、講座実施後に受講者から寄せられた講座内容に関する質問に対する回答の代表例を記載している。全質問に対する回答は【講座詳細ページ】のQRでご覧ください。

質問 **今回の単元で最後に先生方にインタビューするとあるが、子供にいつ共有し、必然性のある課題にしたのか。（妙高市）今回の必然性のある言語活動とは、誰にとってどんな時の必然性か。**

回答 単元の一番初めに、6時間目に先生にインタビューして、7時間目にそのインタビューを基にクイズ形式にまとめて紹介することを共有した。よって、子供は、単元のゴールに迫る過程で、Can you ～?の表現は、とても大事であることを意識して活動に取り組んでいた。（回答者：授業者）

質問 **フォニックスは、Aから順番にやって、今日はQだったのか。また、フォニックスをやって、実際に子供に変容はあったのか。**

回答 フォニックスは、毎時間1文字ずつやっている。教科書のUnitの最後に「Let's Read and Write」というところがあり、5文字ぐらい出ているため毎時間一つずつ行っている。話をしながら書くこともやっている。（回答者：授業者）

質問 Are you ～? Can you ～?の違いは、どこまでつめればよかったのか。

回答 Are you ～? Can you ～?の表現については、Can you ～?の表現に絞ることや、動詞の動作カードが限られていたので、もう少し増やすことを考えた。間違った表現ではあったが、コミュニケーションは成立していたという意見もあった。間違いを気にせず、意欲的に子供が取り組んでおり、これまでの外国語活動の成果と捉えていいのではないかと思う。(回答者:授業者)

質問 今回は、Can you ～?でplayが付かないものが多かったが、Can you play ～?とかCan you play the ～?ということもあるが、そのような文章は取り上げなくてよかったのか。また、そのような場面では、言語活動で十分なのか。

回答 スポーツの単語を導入するときに、動詞も一緒にチャンツにして教えていただければ助かる。また、スポーツにはtheがつかないで、楽器は付く場合が多いので、こちらも、piano, violinと楽器の単語を導入するときには、play the piano, play the violinというように、フレーズにしてチャンツで練習する。自然と子供たちは言えるようになる。(回答者:講師)

質問 授業の中で、スモールトークやチャンツは毎回行っているか。

回答 毎時間行っている。スモールトークは、その時間に必要な表現を必ず入れているが、既習の表現もできるだけ取り入れるようにしている。本時のように、時には子供をスモールトークに巻き込んだたり、興味ある内容にしたりして、できるだけ日常会話に近い自然な会話になるように工夫している。
(回答者:授業者)

第9回講座　令和3年11月29日(月) 午後3時20分～午後4時30分　【講座詳細ページ】⇒

授業研究 ③

千葉県浦安市(指導主事　山﨑 由美)

参加者
拠点校 77名
拠点校外 62名

授業者氏名　直枝 祐樹(HRT)
　　ラライン・イマムラ(ALT)
学　校　名　浦安市立富岡小学校
担 当 学 年　第4学年
使用教科書　Let's Try2(文部科学省教材)
単　元　名　「Unit4 What time is it?」
テ　ー　マ　聞くこと・話すことの指導
講　　師　佐藤久美子(J-SHINE 会長、玉川大学大学院名誉教授)、明海大学教員他

概要

お気に入りの時刻とその理由を聞いたり、答えたりする活動を通して、コミュニケーションを図ることの楽しさを感じさせることを目標に本単元の授業を実施しました。担任がT1となり、児童たちにとってのロールモデルとなるよう、積極的にクラスルームイングリッシュを使用しています。音声を十分に聞かせて気付きの場面を作ったり、動作や相づちを交えたりしながら、自分事としてのコミュニケーションとなるように意識して授業を行っています。
本時は「話すこと(やり取り)」をねらいとした活動としていますが、授業の流れはこれでよいかについて協議していただきたいと思います。また、浦安市は文部科学省から教育課程の特例を受けて、1年生から外国語活動を実施しています。そのため、早い段階から文字に関心を寄せ始めている児童もいることから、板書やワークシートに文字を使用しています。アルファベットもこれからという段階ではありますが、音声を中心としながらも、文字をどこまで示したらよいかについて特にご助言いただけたらと思います。

事前課題

第9回講座　授業動画(浦安市立富岡小学校)の視聴

協議概要

動画視聴にあたり、以下2点に留意した上で視聴をお願いし、協議を行った。
浦安市は文部科学省の特例を受け、小学校1年生から市独自の外国語活動を行っているため、児童は早くから外国語の音声に慣れ親しんでいる。そのため、文字へ興味関心を持ち始めている児童が多い。学習指導要領の文字指導の内容を踏まえつつも、以下「(2)」を留意事項として挙げた理由はこのとおりである。

動画視聴における留意事項
(1)「話すこと(やり取り)」の授業展開は、動画のとおりでよいか。
(2)文字に興味を持ち始めている児童に対し、文字をどこまで示してよいか。

授業全体をとおしては、「児童のリアクションがよい」「授業のテンポがよい」「児童が楽しそうに授業を行っている」「スモールトークから、やり取りを発展させ、児童がターゲットセンテンスを繰り返し使用できるような工夫がある」といった肯定的な感想が寄せられた。
また、課題としては、「日本語の使用量が多かったため、ALTを活用してやり取りを見せてもよかったのでは」といった声もあった。

(1)について(各市より)
- ALTとJTEのやり取りを見せるのに時間を費やしていたが、もっと児童のやり取りに時間を費やしても良かったのではないかと思う。
- 活動を見ていると、内容をよく理解しないまま活動に臨んでいた児童がいたように感じた。ALT とJTEのデモンストレーションを見せるだけでなく、児童の実情に応じ、活動を止めてポイントを確認する時間を設ければ、児童がもっと主体的に活動ができたと思う。

(2)について(各市より)
- 聞いたことがあり、耳に馴染んでいる文字や語については見せてもよいのではないか。文字に頼らず、音声をとおしてのやり取りができると良い。
- 本時は4時間計画の4時間目だったということもあり、ワークシートや板書の文字を減らし、絵など文字以外の手がかりをとおして児童がやり取りを行えると良い。

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

ここでは、講座実施後に受講者から寄せられた講座内容に関する質問に対する回答の代表例を記載している。全質問に対する回答は【講座詳細ページ】のQRでご覧ください。

質問 **リアクションカードについて、何をどのように活用しているのか。**

回答 リアクションカードは、ALTと一緒に考えて「Nice!」「Good!」「Great!」「Cool!」などの表現をA4サイズに拡大し、黒板に掲示できるようにしている。また、浦安市で使用している教科書(NEW HORIZON ELEMENTARY)の別冊にあるPicture Dictionaryにもリアクションについて掲載されているので、拡大コピーして掲示できるようにしている。自分たちで手作りし、イラストを添えて使用している。(回答者:授業者)

質問 **本単元に限らず、ワークシートは言語活動等の交流を行っているときには必ず用意しているのか。**

回答 言語活動中は極力文字による言語材料の提示をせず、言語の使用場面を意識して提示するようにしている。例えば、「あいさつ」「好きなものを伝える」「友達の回答内容についてリアクションする」「お別れのあいさつ」といったように示し、使用する表現は児童が選択している。ワークシートについては、使用するとき、使用しないとき、どちらもあるが、使用しない時の方が多い。(回答者:授業者)

第10回講座　令和3年12月10日(金) 午後3時20分～午後4時30分

【講座詳細ページ】⇒

授業研究 ④

福島県いわき市(指導主事　磯上 優美)

授業者氏名　若松 彩香(HRT)
Drake Duhaylonsod(ALT)
学　校　名　いわき市立藤原小学校
担 当 学 年　第5学年
使用教科書　NEW HORIZON Elementary English Course 5(東京書籍)
単　元　名　「Unit4 He can bake bread well」
テ　ー　マ　chantsを活用したALTとのティーム・ティーチングについて
講　　師　百瀬美帆(明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授)
Patrizia Hayashi(明海大学多言語コミュニケーションセンター教授)
Tyson Rode(明海大学多言語コミュニケーションセンター准教授)

参加者
拠点校 91名
拠点校外 57名

概要

いわき市では、「chantsを活用したALTとのティーム・ティーチングについて」というテーマで、第5学年の授業を提案します。本動画には、単元(8時間)の第4時の「身近な人について紹介する」という学習場面を収めています。ALTとHRTとのティーム・ティーチングについて、その役割分担やchantsの活用、スモールトークによる導入場面の工夫などを話題にして、協議できればと思います。

事前課題

第10回講座　授業動画(いわき市立藤原小学校)の視聴

協議概要

<成果として考えられる点>

○ チャンツの活動について、音源のスピードが速いと感じた。児童は慣れているためか、用紙を見ながらではあったが、よく活動できていた。
○ T1とT2のsmall Talk について、実物を使いながら二人でやり取りをしていたのでわかりやすかった。また、その活動の様子について、児童に質問をしていたのも良かった。
○ カードを使ったパターンプラクティスについて、T1とT2の役割分担が適切だった。
○ 学級担任の先生が元気で、授業の雰囲気がとても良かった。学級担任が授業をリードし、授業の大部分を英語で進めていたのが良かった。
○ 学校の他の先生方へのインタビュー動画というアイディアがすばらしい。児童の興味・関心を引き出す内容だった。

<改善点や検討が必要と思われる点>

● ビンゴゲームの活動について、児童の具体的な活動の様子が分からなかった。また、Yesと答えるような質問が多かったが、Noと答えるような質問も、もう少しあっても良かったのではないかと思った。
● ビンゴゲーム後の共有場面について、パターンプラクティスとの違いはどこにあったのか。ここでは、児童同士のやり取りを多くしたほうが良かったのではないか。
● 8時間の単元計画の中の、4時間目の内容だったが、児童の発話が少ないと感じた。児童の思考を活性化させるような内容も必要ではないか。

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

ここでは、講座実施後に受講者から寄せられた講座内容に関する質問に対する回答の代表例を記載している。全質問に対する回答は【講座詳細ページ】のQRでご覧ください。

質問 **チャンツのスピードが速いように感じたが、どうか。**

回答 いつも練習してから行っているので、スピードは速いが子供たちは慣れている。(回答者:授業者)

質問 **ビンゴゲームで、Yesと答えるような質問が多かったが、何か意図があるのか。**

回答 ビンゴゲームなので、Yesと答えて○がついたほうが、子供たちの意欲が高まると考え、意図的にYesと答えられるような質問を考えた。(回答者:授業者)

質問 **チャンツの内容は本時の学習内容とは異なっていたが、何か意図があったのか。**

回答 チャンツは復習として扱っている。(回答者:授業者)

特設講座　【講座詳細ページ】⇒

第10回講座後、リアルタイムでの講座配信ではなく、他市からオンデマンドで動画視聴した後に意見をいただいた

授業研究 ⑤

東京都足立区（総括指導主事　三輪 政継）

授業者氏名　濱田 亮（HRT）
　　坂本 真理子（英語教育アドバイザー）
学　校　名　足立区立西新井第二小学校
担 当 学 年　第5学年
使用教科書　NEW HORIZON Elementary English Course 5（東京書籍）
単　元　名　「Unit4 He can bake bread well.」
テ　ー　マ　聞くこと・話すことの指導
講　　師　佐藤久美子（J-SHINE 会長、玉川大学大学院名誉教授）、明海大学教員他

概要

足立区では、「聞くこと・話すこと」の講座を基に、第5学年の授業を提案します。本動画には、単元（全8時間）の第1時「できることやできないことについて聞いて、おおよその内容を理解することができる。」学習場面を収めました。担任と英語教育アドバイザーのSmall Talkから始め、児童とやり取りをすることを通して、本時のめあてを引き出します。児童がペアで話す際は、取組の後に、児童が伝えたかった内容を共有し、再度取り組ませることで、自分の思いや考えを伝え合う言語活動を目指します。たくさんのご意見、ご提案をいただければ幸いです。

事前課題

特設講座　授業動画（足立区立西新井第二小学校）の視聴

意見

- とても魅力的な単元全体のゴールを、1時間目である本時に児童に伝えることで、児童も見通しをもって、必要感を感じながら学習に臨めるように感じた。
- HRTが積極的にクラスルームイングリッシュを使っているのがわかり、自分も見習いたいと感じた。きっと児童たちも、先生を見習って、意欲的に英語を話せていたと感じた。
- 担任と英語担当の先生との役割分担がしっかりされていて、それぞれの役割が子供達の英語理解につながっていると思った。また、お二人のやり取りや、雰囲気が英語の楽しさを引き立てているように感じ、子供達が自然に英語を聞きたくなる、話したくなる授業だった。
- 単元の導入の時間として、スモールトークから聞くことをメインにした言語活動、めあての引き出し、練習、最終活動について知る活動といった授業の流れがとても自然で適切であった。
- 「can」と「can't」の違いが、動画では聞き取りづらかった。児童も十分に聞き取れていないような場面があったので、キーワードをもっと強調したりゆっくり言ったり、ジェスチャーを大げさにしたりといった手立てがあると、さらによいと考えた。
- 中間指導（児童から英語表現を引き出す）の時間を設定することで、児童の安心に繋がっていると感じた。児童が教師の話す英語に分からないことがあったり、自分のことを伝えようとする際、間違えたり分からないことがあったりしても、中間指導などでその表現を知ることができるという環境が、児童の話す意欲と英語力を高めていると考えた。

- お互いの話を真剣に聞いて内容を想起している児童の様子から、高学年は児童の身近な場面で既習事項を用いて話すことが、児童の気付きを引き出すことに有効だと感じた。
- ワークシートがわかりやすい。児童が〇をつけたり一言書いたりするシンプルなものが多いため、戸惑うことなく活動できていたと思う。
- 振り返りカードを書く場面で、本時の学習内容をもう一度復習していた。当たり前のことのようだが、児童の頭の中を整理させることで、振り返りの視点が明確になり、分かったことや難しかったことなどが書きやすくなっていた。また、評価もしやすいと考えた。
- 振り返りシートに何を書かせているのかわかり、参考になりました。自ら学習状況を把握するとともに、次の授業で頑張りたいことを書かせることがモチベーションの向上につながっている。

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

ここでは、講座実施後に受講者から寄せられた講座内容に関する質問に対する回答の代表例を記載している。全質問に対する回答は【講座詳細ページ】のQRでご覧ください。

質問　**指導案の中に「足立区オリジナルの活動」や「指導のためのポイント例」がありました。これは外国語科の授業において、区全体で共通して行う活動ということか。**

回答　「足立区オリジナルの活動」は、単元の目標を達成するための学習活動例として、「指導のためのポイント例」は、本時の目標に照らして指導者が留意する指導上のポイントとして、足立区作成単元指導計画の中で示している。本計画は区全体で共有しているが、学校や児童の実態を踏まえて、先生方がアレンジしながら活用している。（回答者：教育委員会担当者）

質問　**「クイズ Who am I?」の時、英語を得意とする児童にクイズの出題をさせるのもよいのではないか。**

回答　単元の1時間目であり、新出表現の導入段階としては、次期尚早と考えた。英語を得意とする児童の達成感を高めるためにも、新出表現の習熟が進んだ段階で取り入れると効果的だと考える。（回答者：授業者）

質問　**本時の目標「聞いて、おおよその内容を理解することができる」を達成したいのであれば、もう少し、全体での練習をしてから、定型文のやり取りをする方法でも良かったのではないか。今回、ペア交流をしたほうがよいと思った理由があれば教えていただきたい。**

回答　本単元の「聞くこと」に関する記録に残す評価は、主に第6時に行う。本時は第1時であるため、スモールトークや「クイズ Who am I ?」を聞き、新出表現を含むおおよその内容を理解することが目標となる。映像でご覧いただいたように、児童は新出表現に気付くとともに、おおよその内容を理解している。そこで、ペア活動を取り入れることで単元の最終活動を意識させるとともに、伝える内容や表現を教室全体で考えることで、自分の気持ちや考えを伝え合う言語活動が一層充実すると考えて取り入れた。（回答者：授業者）

質問　**児童が言いたいことが言えないときに、日本語で話してしまうことがあると思うが、それに対して、英語でリキャストするのは、どの程度したほうがよいか。**

回答　まず、既習表現で言い換えられないか、考えさせることが大切である。次に、既習表現だけでは伝えられない時に、指導者に尋ねたり、ピクチャーディクショナリーで調べたりさせる。それらの表現を用いて伝え合う際には、他の児童にも意味がわかるように、ジェスチャーをさせるなどの工夫が必要である。その上で、指導者が児童の実態に合わせて必要性を見極めることが大切である。（回答者：教育委員会担当者）

質問　**子供にとって「インタビューしてみたい学校で働く人」の中には、「英語のインタビューなんて困る」という方も想定される。インタビューの相手は指定（限定）するのか。**

回答　事前に学校職員全体に学習活動の趣旨を伝え、協力体制を整えておくことが大切である。児童が興味をもった「学校で働く人」と、実際にインタビューできることが、児童の主体性を高めるとともに、社会性を育むことにもつながる。（回答者：授業者）

III 講座受講による意識の変容

第1回から第6回

それぞれの講座終了後、受講者には次の6項目についてリフレクションシートに回答するよう求めた。
そのうち質問項目4と5についてのみ、リフレクションシートの内容を集約した。

1. 名前
2. 所属
3. 勤務校
4. 講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと
5. 今後の授業において活用したいこと

第1回　学習指導要領と第二言語習得理論の理解に基づいた小学校英語教育の心構え

(1) 受講者が「講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと」(質問4)

言語活動を通じて言語を習得することについて

言語活動が、「教える」という単方向の営みではなく、実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う、といった友達同士のコミュニケーションを通して育成するものだということ。
授業の中心は言語活動であり、子供が自ら英語を使って習得していくということ。そのためには、自分のことを話したい、相手のことを知りたいと思わせるような話題の提供など、教師はファシリテーターの役割を果たす必要があるということを学んだ。
外国語の授業では、英語表現を学ばせることを重視しがちだったが、コミュニケーションをしたいという気持ちを第一に考えて指導に当たることが大切だと改めて気付かされた。

学級担任の役割

教師は英語のモデルである必要はない。ただし英語学習者としてのよいモデルとなることが大切。
教師がファシリテーターであるという視点がなかったので、それを意識して授業づくりをしていきたい。

オールイングリッシュと日本語使用

教師がＡＬＴの英語の通訳をしないということは理解していたが、改めてその重要性に気付いた。
all Englishが理想ではあるが、それを追い求めすぎて子供たちの英語への意欲を低下させてはいけない。必要な指示は日本語で補足しつつも、本時に学習したい表現については英語で話して、子供たちの気付きを待つ。英語がきちんと理解できるをねらっているのではなく、なんとなくわかるというか英語に慣れることをねらっているということ。

(2) 受講者が「今後の授業において活用したいこと」(質問5)

掲示物の活用

今回学んだ内容を今後掲示物という形で活用していきたい。日常的に英語に触れる機会が少ない本校の実態を踏まえて、英語の響きと対象物が潜在的に認識できるようにすること、先生方が気軽にClassroom Englishを使えるようにすること目的として学校の掲示物として取り入れていきたいと思う。

「伝えたい」という動機づけ

言語はツールであるため、いかに子供が「これを英語で伝えたい。」という気持ちを持たせるかを考え、好奇心が持てるような題材を用いるようにする。
授業の中で、児童が他者意識・必然性をもって伝え合うことができる場面設定を行えるようにしたい。

担任は英語学習者のモデルとなること・ファシリテーターとなること

ＡＬＴに臆せず英語で会話することに挑戦したい。
正しい英語を話さなければいけないというプレッシャーがあったが、意思疎通を図ることを目的にして、怖がらずに英語を使っていきたいと思う。
英語を使いながら覚える、ということを子供たちにも伝え、教師自身もそれを見せていくことが大切だと思った。できる限り英語を使おうとするモデルとなる。

第2回　読むこと、書くことの指導

(1) 受講者が「講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと」(質問4)

読むこと・書くことの指導

明示的の文字の形を指導したり、英語の文字をアルファベット順に暗記させたりするのではなく、英語に初めて触れる段階であることから、児童が文字に対して興味・関心を高めるように、まず、身の回りに英語の文字がたくさんあることに気付かせるなど、楽しみながら文字に慣れ親しんでいくように、文字を扱うことが重要であるということを改めて確認した。
「書くこと」における評価(知識・技能)(思考・判断・表現)の仕方がわかりました。具体例がありとてもわかりやすかった。
学習指導要領等で、音声にたくさん慣れ親しんでから文字を書くことにつなげるということを言われているが、今回の講座で授業の実際に場面で「音声→文字」ということがどういう進め方なのか理解を深めることができた。また3・4年生での文字の扱いについてもどのような順序で文字を扱うのか具体的に知ることができた。
英語を指導する上で、「書くこと」はどこまでねらえばよいのか不安があった。今回の講義で大文字、小文字(ローマ字)を活字体で書けるようにさせることであるとわかり、今までやってきたことが間違っていなかったことに安心した。また、「読むこと」では、「推測して読む」ということについても丁寧に講義していただいた。今後の英語学習に生かしていきたい。

板書

表現の板書よりも言語機能の板書をする方が効果的であること。また、英文を板書するのは音声に慣れてから行うこと。

フォニックス

フォニックスは音声言語が発達している子供のために作られたものであると聞いて目から鱗だった。これまでその前提がなくフォニックスを教えれば読めるようになると漠然と思っていたが、何を学ぶにもたっぷり英語の音に慣れさせることが第一なのだという認識を持つことができた。

アルファベット

小学校中学年では、文字の形を指導したり、アルファベット順で暗記をさせたりするのではなく、興味・関心が高まるよう学習を進めていこうと思った。
アルファベットの「名称読み」と「音(音声)」の違いを、教師側が意識することの重要性を学んだ。

(2) 受講者が「今後の授業において活用したいこと」(質問5)

外国語活動と外国語、中学校との連携

小中の連携だけでなく、外国語活動(3・4年)と外国語(5・6年)の連携も大切だと思った。今後は中学年と高学年で何をどこまで学習するのかという共通認識をもって指導に当たりたい。

音と文字の指導

日本語と英語の「文字と音の関係」の違いを自分自身が理解し、音と文字の指導に生かしたい。小さな積み重ねとなるが、中学校への円滑な接続となるよう心がけたい。
アルファベット一つひとつの音を大切にしたジングルの学習や、単語のまとまりを意識した書く活動などを取り入れていきたい。

フォニックスの指導による苦手意識の軽減

目的を説明した上でフォニックスの指導を取り入れていきたい。児童の中には発音が上手にできないから発表したくないという子がいる。そのような児童に対しても、フォニックスの指導を行うことで少しずつ苦手意識を減らすことができるのではないかと感じた。

絵カードの活用

音でのインプットと絵カード掲示の有効なタイミングを実践しながらつかんでいきたい。

第3回　chantsを活用したALTとのティーム・ティーチングについて

(1) 受講者が「講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと」(質問4)

Chants・音のまとまり(Chunk)・つながり(Linking)

実際にチャンツを行ってみて、コミュニケーションをしっかり成立させるためには、発音だけでなく、リズム・ストレス・イントネーションが重要であり、その学習にはチャンツが大変有効であるということがよく分かった。
浦安市では高学年は東京書籍のNew Horizon Elementaryを使用している。どのユニットにもチャンツがあり、児童は大好きな活動で意欲的に取り組んでいる。しかし、そのチャンツを毎回聞き、慣れ親しむことで何となく覚えているという指導しかしていないことに今回気付いた。今回のChunk it、Link it 、Guru Guru のアイデアで教えていただき、チャンツをする前にこれらを指導できればより自然な英語に近づいていけることが分かった。特に6年生は、学んでいく表現がチャンツや歌の中にたくさん入っているので、十分に聞き慣れ親しめば文を書く場合もより表現しやすくなることは間違いないと思う。
外国語に慣れ親しませるため、自然な表現としてchunkingやlinkingを意識した話し方をする必要があったこと。

ティーム・ティーチングにおけるT1の役割・日本語の使用

T1としてSmall TalkやChantsの実演を見て、それらをどのように進めていけば良いのかを知ることができた。
スモールトークでは、T1とT2が自然なやり取りで場面を提示することが大切であるということが、改めてわかりました。また、活動の説明など、適切な支援のためには日本語を使うことも構わないということに励まされた。

言語活動のための練習の必要性

話せるようになるためには、練習も当然大切であるということ。その練習に意味を持たせることが、さらに大切であるということ。
チャンツは言語活動ではなく、音声や親しみやすいリズムによるinputを促し、話せるようになるための練習だということ。

(2) 受講者が「今後の授業において活用したいこと」(質問5)

学級担任の役割

自分の外国語に自信がなかったが、ALTの先生との役割を明確にしながら、自分の役割をしっかり果たせるように、授業を行っていきたいと思う。
まず児童の前でT1の先生がすすんで活動していくことが重要だと感じた。どうしても自信がもてないとALTに任せてしまいたくなる(モデルとして発音したくなくなる)が、少ない単語でも不慣れでもやってみる勇気が必要だなと感じた。

児童の発達段階に合わせた活動

年齢が上がるほど歌やチャンツにはのってこない子供が増えていく傾向があるが、これからは発達段階に合った歌やチャンツを用意できるようしっかり教材研究していこうと思った。
子供の実態に合わせて、関心のもてる題材を探そうと思う。

児童を巻き込む練習形式「ぐるぐる」

ぐるぐるの活動形態はとても参考になった。私自身も、児童と会話文の練習をする際に、どうしても単調になり、児童も飽きてしまうという経験がある。このように体を動かしたり、リズムに乗ったりしながら活動することで、意欲的に活動できると感じた。また、自分の番が再び戻ってくるため、暇な時間を作らないという点でも今後活用してみたいと感じた。

Small Talk

Small Talkについて、HRTとALTが自然なやり取りで場面提示ができるよう実践を積み重ねていきたい。Chunk it、Link it.を意識して授業の展開の仕方を考えていきたいと思う。

第4回　講座　聞くこと、話すことの指導 Lesson 1

(1) 受講者が「講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと」(質問4)

必然性のある言語活動

佐藤先生の講義の内容が全て、わかりやすく、自分自身でやってみたい、と思うことばかりだった。中でも、言語活動を行う上で必然的な場面の設定が大切だと思った。子供たちが英語を使う必然を意識して、活動や学習内容を組んでいきたい
「誕生日を尋ねる活動」を「Special day」を尋ねる活動にすることで、必然性が高まるという話は本当にその通りだと思いました。児童の立場に立って工夫することが大切だということを学んだ。
言語活動に必然性を持たせるために、教科書から少し離れても児童の興味に合わせて課題を設定して良いというお話を聞き自由度が広がった気がした。

評価

児童にこうなったらA評価だよと事前に知らせるということは驚きだった。どの教科でもしたことはない。児童のやる気を起こさせるのなら、そういう方法もありなのかと思った。
A・B評価のモデルを明示していくことで児童の安心感や意欲の喚起につながること、児童によっては自立した学習につながることが分かった。

Small Talk

Small Talkの示し方がとても勉強になった。今日のめあてを示し、Small Talkを聞かせ、どんな場面でどのような表現を使うのか、子供が見通しをもつ道筋がわかりやすかったです。実際の声かけの仕方も提示してくださったのでさらに勉強になった。
Small Talkで小学生が3分間も会話を続けることが可能であるということに驚いた。

発達段階に応じた活動

乳幼児期の言語獲得の話を交えながら小学校外国語の学習と結び付けるという考えがすごくわかりやすく、子供たちの立場や発達段階に合う活動をしてねらいに迫るようにしたいと思った。

(2) 受講者が「今後の授業において活用したいこと」(質問5)

必然性 - 児童の思い・気持ち

子供達の聞きたい、話したいという思いを大切にしながら、内容や指導法を工夫したい。
言語活動につなげるまでの練習部分で、ALTや子供たちとたくさん言葉を交わしながら、「〜について話したい」という意欲づけを図りたい。

評価の工夫

評価の観点を動機付けとして児童に具体的に伝えたり、必然性のある問いなどを上手に取り入れたりしながら授業の展開をしていきたい。
授業準備の段階から意識して授業の様々な場面で評価をしていきたい。

辞書の利用

今後は学級に和英辞典だけでなく英和辞典も準備しておき、子供が英語に触れる機会を確保するしていきたい。
確かに児童は教科書付属のピクチャーディクショナリーをよく使用している。それに英和辞書の機能を関連付けることで、文構造への気付きにもつなげる新しい指導法について研究したいと思った。

Chants・歌・Small Talk・誉め言葉の導入

子供同士のSmall Talkをやらせてみたいと思う。初めは大変だろうが、続けていくうちに抵抗感も減り、慣れていくのではないかと思う。
誉め言葉とともに、「Thank you」も使うようにして、常に児童の努力を評価しながら信頼関係を構築していきたい。そのような自然なやり取りを英語教育アドバイザーから学んで一緒に使っていきたい。

第5回　聞くこと・話すことの指導　Lesson 2

(1) 受講者が「講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと」(質問4)

「聞くこと」top-downとbottom-up, pre-listeningとpost-listening

Pre-listening の大切さに気付いた。経験や知識から推測することと音や言葉から意味を理解しようとすることの2種類の聞き方があり、絵や状況から理解して、言葉や意味を正しく捉えてからリスニングにうつると効果的であることが、よく理解できた。
post-listeningにおける概要を理解する聞く力の指導について学ぶことができた。
推測しながら内容を聞き取る活動をするために、top-downとbottom-upをバランスよく活用する必要があるということ。
聞くことの指導法について学んだが、全て英語で聞かせたり話したりするだけでなく、絵や写真を使うことで自然と会話ややり取りが増えることに気付いた。また、教科書を活用する際に、推測したり予想したりしてから学習活動に入ることで、学びへの必然性が生まれることを知った。
「小学生は生活経験が少なく、背景的知識が乏しく推測困難」という点に気付いた。この春から小学校勤務ですが、一学期間生徒と触れあってみて疑問に思っていたことの理由が少しずつわかってきた。

絵本の利用

児童に適した絵本は、イラストが大きくはっきりしていること、児童にとってなじみのある話題であること、そして一つのページに1行程度の英文量であることを学んだ。

学級担任の英語使用・クラスルームイングリッシュ

教師が外国語を積極的に使うことで、児童が気軽に外国語を話そうとする環境をつくることが大事であることを学んだ。
Small Talkの大切さを学んだ。私たちが見本を見せることで、子供達の英語に対する壁を取りはらうことができるのだと思う。
英語での発話を増やすには、日本語の説明を少なくするということを学んだ。

(2) 受講者が「今後の授業において活用したいこと」(質問5)

少しずつステップアップする授業

デジタル教科書のリスニング教材を活用するときに、教材の音声を聞く前に事前の状況確認・言葉の確認を行いたいと思った。また、単元の中で毎日少しずつステップアップをすることができるよう単元計画を立てて授業を行いたい。
子供たちが進んでステップアップしたいと思えるような授業作りに活かしていきたい。
大事な表現方法を身に着けさせるために、場面を工夫してスモール・ステップで指導していきたい。

辞書・タブレットの利用

和英辞典・英和辞典の活用で3倍の語彙力になると聞いたので、本校の来年度予算で購入できたらと思う。またタブレット機能(フラッシュカードの選択から、どこを押せば音声が出るのか)の使い方も指導していけば、辞典と同じような使い方もできそうなので試してみたい。
足立区でも一人一台タブレットが配備された。自分が慣れ親しんだ英語表現をタブレットにて書き写したり、書き溜めていき、説明するために必要な絵や写真と合わせてShow and Tellを行わせてみたい。

学級担任の英語使用

これから授業の中でできるだけ英語を使っていきたいと思った。使っていく中で、自分も英語を使うことに慣れてくると思う。担任がALTと四苦八苦しながらでも英語でコミュニケーションを取ろうとする姿を、まずは見せていきたい。

第6回　小学校から中学校・高等学校への学びの接続

(1) 受講者が「講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと」(質問4)

他校種(中学校・高校)の授業から学んだこと・気付いたこと

中学校・高校の授業を見させていただく機会がほとんど無かったので、実際の中学校・高校の授業ではどのような活動をしているのか、イメージを持つことができました。そのうえで、小学校ではどのようなことができるのか、近くにいた先生と一緒に考えることができた。
小学校でのスモールトークが中学・高校でつながり、自分の英語力となっていることが理解できた。特に、授業の様子を見る機会がなかったので、授業の様子を見ることがとても印象に残りました。
高校でも、小学校で学習した英語を使ったコミュニケーション活動が途切れることなく、発展的に行われていることが分かった。自分の考えを示した後に理由を述べたり、即興のスモールトークをしたりすることは、小学校で教えていることとつながりが深いと感じた。
学びの連続が、はっきりと見えた。私は小学校なので、小さいことから慣れ親しむことがbetterなことは理解しつつも、それが、この先の学びの中でどういかされているのかは、分からないし不安だったが、自分たちが受けた英語の授業とは違い(と言いきっては失礼なのですが。。。)会話的部分を多く含んだ中高の英語の実践は、まさに生きた英語に近付いていると感じた。小学校では、文型やwritingも大切だが、何よりも「外国語への垣根をさげること」が重要なのではないかと感じた。
高校の授業が英語のみで進められていて、それに向けて小学校、中学校での下準備が必要だと感じた。
英語の授業では、小中だけでなく、高校も「言語活動を通して」行うことが求められていることが分かった。
学校段階間の接続の重要性について学びました。中学校と高校のスモールトークの実態を知ることができた。
中学校や高校の授業を映像で見て、こんなにも英語での会話が飛び交っていることに驚いた。友達同士で聞き合うことで語彙も増えたり、話す楽しさを味わったり、良い活動だと思った。

(2) 受講者が「今後の授業において活用したいこと」(質問5)

発表からやり取りへ

発表だけの授業にならないよう、児童同士で会話のやり取りができるように指導をしていきたい。また、その場で適切に応答できる即興性も身に付けていきたい。
小学校段階では、HRTとALTのスモールトークを聞かせる場面を多く設定していたが、今度は児童同士の簡単なスモールトークも取り入れて実施していきたいと思う。

児童が満足する授業・達成感を味わえる授業へ

こどもたちには、完璧じゃなくていいから、どんどん話してみようと伝えたり、自分がモデルとなって示したりしたい。
中高のプレゼンテーションにつながる活動で、教科書に出てくる話をふくらませる表現にチャレンジさせたり、聞いた児童が感想を伝えられるように短い表現を使えるようにさせたりしていきたいと思った。コミュニケーションが図れて達成感を味わえる授業を進めていきたいと思った。
「子供達が満足する授業とは」の指導。多少間違っていても伝わったという経験が満足に繋がるということが分かった。学級の友達に通じたという経験はもちろん、ALTの先生に通じた！など少し特別感があるとよりいっそう強化されると考えた。

第7回から第10回

それぞれの講座終了後、受講者には次の6項目についてリフレクションシートに回答するよう求めた。
そのうち質問項目4、5及び6についてのみ集約した。

1. 名前
2. 所属
3. 勤務校
4. 授業実践発表を見て新しく学んだことや気付いたことは何ですか?
5. 振り返り協議後に新しく気付いたことは何ですか?
6. 講師の指導助言から学んだことや気付いたことは何ですか?

第７回　授業研究①

(1) 受講者が「講座を通して新しく学んだことと気付いたこと」（質問４）

個々の児童への支援・ヒントカード

辞典や教師からのヒントカードを通して、ライティングをする時に語彙を豊かにし、安心して自分の表現したいことが表現できる支援がよいと思った。
ヒントカードの大きさ、児童への渡し方が参考になった。
書く活動で、わからない単語を短い紙に書いて渡しているのが真似したい。

話してから書く

話す活動や伝える活動では、書いてから話すのではなく話してから書くこと。

ICTの活用

自分の発表したいことをタブレット等で作ることで見やすく発表できていた。
ICTを効果的に使用した、発表の仕方や、一人一人が学習調整できる選択制の課題の出し方は大変参考になった。

日本語の使用

「書く」指導の時には、指導者が日本語を使ってもいいのだと分かった。

書くときのルールを明示

書く活動を丁寧に積み重ねることで、児童の力が付いていると感じた。書くときのルールを明確に示したことや、個人差に対応したシートの工夫も参考になった。

話してから書く

話すこと（発表）で十分に慣れ親しんだ英文を、絵日記に書くこと（読み手を意識して）につなげていくという単元計画の工夫がいいと思った。ただ、発表の際のメモの書かせ方がどうあればよいか考えさせられた。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」（質問５）

エラーコレクション

発表の時間には、話す側も聞く側にも目標を示すことで意識して聞き合うことができるという意見が参考になった。児童の誤答をすぐ教えるのでなく、やり取りをしながら気付かせるということも実践していけたらと思った。

個に応じた配慮

子供の実態に合わせてワークシートの種類を選べるようにすること、わからない単語は先生が紙で示してあげるなど、細やかな配慮が工夫されているなと思った。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」（質問６）

絵を利用した読む活動

絵日記を読む活動の意図は、英語の文だけを読まなくても理解ができるよう、絵を見て英語で書いてあることを考え、絵を見て文を再生するのだと、教えていただき、納得できた。
伝えたいことが頭の中にあり、英語の表現が出てくるようにするため、「What can you see?」の質問をし、イラスト（視覚情報）から、子供たちの知識の中にある語を引き出した後、文の再現を音声で行う方法が、大変参考になった。

Read & Look up

Read & Look upという考えが、とても参考になった。暗記できなくても、顔を上げて話す約束が徹底できればいいことがわかった。

文法用語を使わず場面で示すこと

過去形という言葉を使わないで、行った場所、食べたもの、見たもの、楽しかったことなどを表す表現というのがとてもわかりやすいと思った。

第8回　授業研究②

(1) 受講者が「講座を通して新しく学んだことと気付いたこと」（質問４）

授業の構成

授業づくりにおいて、ねらいを明確にもち身に付けさせる資質・能力に対して児童が活動する中で変容が見られたとき、その場で価値づけてあげる（評価）してあげることの大切さを学んだ。
MEIKAI－JOEプラス小学校外国語講座で学んだ「チャンツ」や「グルグル」を実際に授業で活用している様子を見て、大変有効な手立てであると感じた。また、ALTとHRTのスモールトークに少しずつ児童を巻き込んでいく形態が、子供達が安心感をもって発表することができる効果的な手立てであると感じた。また、クイズ形式で行う言語活動が、子供たちのもっと「知りたい」を引き出しており、外国語活動の目指す児童の姿を表していた。そういった、相手について「知りたい」や「伝えたい」という思いを小学校段階で育んでいくことが今後の児童の学ぼうとする意欲につながると気付かせてくれた。

フォニックス

phonicsを帯活動で行うのはよいアイディアだと思った。
フォニックスを導入されていて、子供も慣れているように感じて、すごいと思った。

児童を巻き込む活動

スモールトークの中に児童を巻き込む方法があることを知り、児童の主体的な姿がたくさん見られてとてもよい活動だと感じた。
一人ひとりが間違いを繰り返しながら、どんどん表現していくことで力をつけて行くこと
チャンツの活用の仕方について、以前講座にもありましたが「ぐるぐる」方式でHRT・ALT・S・SSでどんどんバージョンアップしながら、繰り返し活動していたこと。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」（質問５）

リキャスト

文法の間違いを「正しく」直すよりもリキャストにより気付かせたり、間違っても何度もリトライさせていくほうが効果的というのはクラッシェンの理論とも合致していてよいと思った。

ゴールを明示

単元のゴールを明確にし、児童としっかり共有することで、より意欲的に活動に向かうことができると改めて感じた。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」（質問６）

フォニックスとスペリング

Phonicsは単語のスペルも出して指導するというのはジム　トレリースも提唱しているように大変重要な要素だと思う。佐藤教授の指摘と指導は大変的確であったと思った。

リキャスト

Recastとは間違いをさりげなく正しい表現に言い直し、子供達が英語を使おうという気持ちを育てること。

間違えても大丈夫な雰囲気づくり・間違いの訂正

「間違っても大丈夫」「楽しむことが大切」という学級の雰囲気・クラスの雰囲気がとても大切だと改めて思った。
子供たちが進んで英語を話すことが大事。そのために、間違えても平気な環境づくりが必要なのだと思った。
児童の英語の発話の間違いを指摘することで、英語によるコミュニケーションに自信をなくしてしまうのではないかという不安があったが、間違っている部分については、しっかりと指導していくことが大切であることを学んだ。また、その指導の仕方には、コツがあり、教師の英語の発話の中で、正しい表現を聞かせ、児童に正しい表現を気が付かせることで修正していくとよいことを学んだ。

第9回　授業研究③

(1) 受講者が「講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと」(質問4)

外国語活動

4年生でも聞き取る力が非常についていて驚いた。学習の最中にめあてを振り返らせる場面がしっかりとあったので、子供たちの活動がブレずにできたと思う。
外国語活動の時からリアクションを意識させることで、高学年の外国語科学習での相手意識をもった活動につながると思った。

児童を巻き込むSmall Talk

具体的なスモールトークから導入を行うことが大切だということを学んだ。また、大きな仕草でわかりやすくすることで、話をちゃんと聞いていたように感じた。さらに、子供たちにリアクションを指導しているところも素敵なスモールトークに繋がっていたと思った。
スモールトークに児童を巻きこむことで、英語を日常生活に結び付けて会話を楽しむ意欲をもたせていくことが大切だと感じた。そして、教師自らがチャンツで明瞭に発音したり、楽しむことで活発な英語活動になると思った。

学級担任がモデル

学級担任の声、表情のよさが、子供たちの学びに反映されていた。よいモデルとなることが大切であると改めて感じた。
教師の気持ちはダイレクトに児童に伝わるということ。教師が楽しめば、児童も楽しむということ。4年生でも丁寧にステップを踏めば、スモールトークができるということ。
教師のリアクションが大きく、子供にも会話の中でリアクションをとることの大切さを伝えていることがよかったです。これまで自分はリアクションの大切さをあまり伝えられていなかったので、今後は見習いたいと思った。

文字導入の工夫

文字を導入するための板書やワークシートの工夫。
文字(英単語)を授業の流れの中でさりげなく板書して児童の目に触れるようにすること。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

気付きの重要性

協議会を経て、やはり授業は発展していくことが大切だなと感じた。3時間目、4時間目の差をつけなければと改めて感じた。コミュニケーションの根幹である他者理解を促す授業をすることで、外国語でコミュニケーションをとり、新しいことに気付くことができると感じた。この気付きが外国語の楽しさだと思った。

絵や板書の活用

イラストや絵の活用によって、教師の説明を減らしていく工夫もできること。 文字(板書)は児童の目に触れる程度で親しみが持てるように、板書における比重にも注意しながら授業を行う必要があること。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

児童とのやり取りにおけるタイミング

講師の指導からチャンツの大事さを改めて感じた。チャンツであっても教師が大きな声で言うことで児童たちも大きな声になっていくと思った。また、児童への返答は早く、児童への質問はゆっくり待つことで安心して話せるようになると学んだ。
10個の提案をいただいて、応答タイミングを早くすることや、児童に答える時間を与えることが大切であることを知った。自分は待てないことが多く気をつけたいと感じた。
児童からの問いかけには時間を置かずに反応し、自分から児童への問いかけは、時間を使って待ってあげると良いということ。児童だけでなくALTの間違いも時には直して良いことを学んだ。私の方が英語力が未熟なので、問いかけにすぐ答えたり間違いをすぐ直したりできるか自信がないが、今後の自分の授業でも生かしていきたいと思った。

第10回　授業研究④

(1) 受講者が「講座を受講して、新しく学んだことや気付いたこと」(質問4)

学級担任(T1)としての役割・他の先生方の協力(動画の利用)

学級担任だからこそ子供の個性や特技に即した指名を行うことができる。また、一人一人が答えることができたことによって、子供たちが自信を持つことができていた。身近な先生方に協力をお願いして動画を準備することによって、子供たちの興味関心を引くことができた。また授業後に動画に登場した先生との英語での言語活動が期待できること。
担任の元気さや明るさのよさや何でも声に出せる雰囲気のよさ、子供の声をその都度拾い返してあげる大切さ(swimming→swim)等。おそらくパターン化している授業の繰り返しも、子供達が安心して学べる環境につながっていると考られる。楽しい雰囲気は先生達が話す言葉を理解したいと思わせる意欲を喚起しそうだ。
HRT、ALTによるSmall Talkの他に、身近な人(動画による他の教師)が関わることにより児童の学習意欲を高めることができるということ。
動画を活用した授業方法について知ることができた。また教員がリードをして授業していくことやはっきりと自信をもって発音することの大切さを学んだ。
(学級担任の)先生がリードして、英語を積極的に使おうとしている雰囲気があった。

Chants

チャンツを帯活動として取り入れることで、楽しい雰囲気で学習を始められると感じた。近くの席の先生から、デジタル教科書ではチャンツの速さや、英文の目隠しができることを教えていただいた。自分の学級の実態に合わせて活用していきたい。
チャンツやパターンプラクティスなど、手法を変えて同じことでも何度も繰り返して学習することで、浸透させたり、広げたりすることができることを学んだ。
チャンツでは、HRTとALT、児童が歌う部分を分けるという工夫を知ることができた。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

HRTとALT

HRTとALTとのデモンストレーションの仕方の工夫の仕方が分かった。

板書やカード提示の工夫

カードを使ったパターンプラクティスで、自然に児童の目に入るように英文が板書されていることや、カードの部分だけを取り替えていく作業により、Can you~?の英文自体には変わりがないことがつかみやすい提示のよさ。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

HRT:ラーナー　ALT:ユーザー

ALTはユーザーモデルであり、HRTはラーナーのモデルであることを踏まえた活動を組むこと。また児童の表現については、ALTと表現の自然さについて確認したほうがいいこと。

ALTの活用

何気ないやり取りを自然な会話に変えるALTの活用が大変参考になった。
児童が間違えてしまった時、担任がさりげなく直すだけでなく、ALTを効果的に巻き込んで学ばせることの大切さを学んだ。
ALTの役割についてたくさんご指導いただいた。妙高市では、ALTも毎回研修に参加していたのでとてもいいご指導であったと感じた。我々が言えない自然なやり取りや、正しい表現への訂正をして積極的にフォローしてもらえると質の高い授業になる。
HRTとALTの役割について、今までよりも具体的なイメージをもつことができた。HRTと児童のやり取りだけではなく、そこにALTの先生の一言があるとより学びが深まることを知った。また、「Can you ～?」は「〇〇できる能力がある。」という意味。つまり、当たり前のことを聞くのでは使い方が不自然。その点についても、ALTと事前に打ち合わせをするなど連絡を密にする必要があることが分かった。

IV 講座内容に対する評価

各講座終了後に受講者に対して講座内容に関する評価アンケートを実施した。受講者には講座終了後3日以内に回答をしてもらった。ここからは、第1回から第10回までの各講座の評価アンケートの結果と分析を記す。

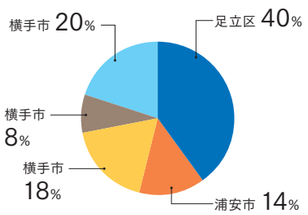
講座は第1回から第6回までが講義形式で、第7回から第10回までは授業研究形式の2種類の形式であった。そのため、アンケートの質問も講座の形式によって少し変更した。どちらの形式でも、最初に受講者の属性を知るための4つの質問を設けた。その後に講義形式では14個の質問を、授業研究形式では9個の質問を設けた。

全10回講座共通の属性に関する質問の結果分析

最初に、受講者の属性に関するアンケート結果を分析する。各講座終了後に評価アンケートに協力してくれた受講者は全10回合わせて延べ1385人であった。

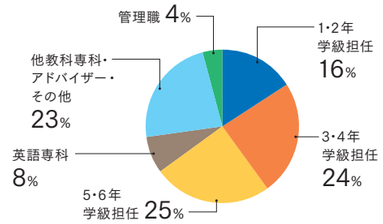
［属性①］所属地区

全回答者1385人中最大の40%が足立区からの受講者であった。その次に、妙高市が20%、横手市18%、浦安市14%、そしていわき市8%という結果であった。



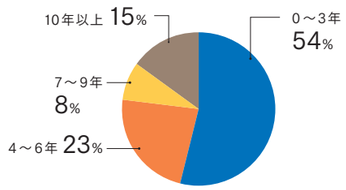
［属性②］立場

「5・6年学級担任」が全体の25%で最大であった。次に、わずかな差で「3・4年学級担任」が24%で続き、さらに「他教科専科・アドバイザー・その他」が1%差の23%、「1・2年学級担任」が16%、「英語専科」が8%、最後に「管理職」4%となった。小学校で「外国語科」を担当する「5・6年学級担任」と「外国語活動」を担当する「3・4年学級担任」がほぼ全体の半分を占める割合になるほど受講していたことが分かった。この結果は、今回の講座を今まさに必要とする現場の教員が受講していたことを示している。



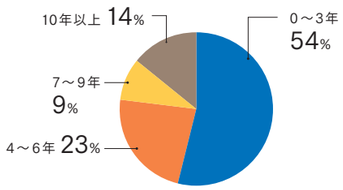
［属性③］外国語（活動）指導経験年数

「0～3年」が最大の54%を占めた。次に、「4～6年」が23%、10年以上が15%、「7～9年」が8%と続いた。
この結果から、経験の浅い受講者が大半であり、7年以上の経験のある受講者も比較的多く受講していたと言える。



［属性④］外国語(活動)TT経験年数(日本人とのTTも含む)

属性④の結果は、属性③のそれとほとんど同じであった。この結果から、学校での外国語（活動）指導では、TT指導も同時に取り入れていると言えるようである。

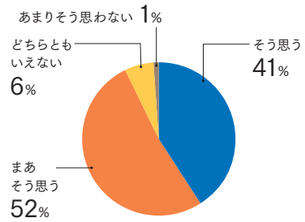


ここからは、第1回から第6回講座までの講義形式の各講座に対する評価アンケートの結果と分析を記す。

第1回講座　評価アンケート　結果分析

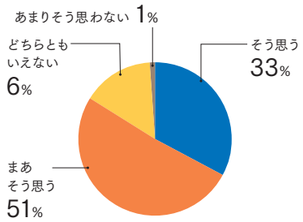
［質問①］講座の内容は理解できましたか。

「そう思う」(41%)と「まあそう思う」(52%)を合わせて肯定的意見が93%を占めた。



［質問②］講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」(33%)と「まあそう思う」(51%)を合わせて84%であった。

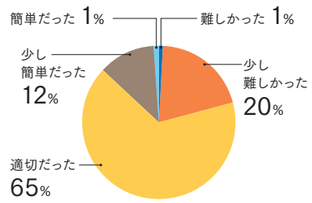


［質問③］質問②で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 小学校の現場で抱えている最も大きな問題は「英語が話せない教員が英語を半ば無理矢理教えないといけない」ということと、「教科書が言語習得の段階を踏まえて作られていない」ということの2点だと思います。よって、教育現場で教師が求めているのは具体的な教授法、教師の英語習得法、そして言語学の理論に基づいた具体的なインストラクショナルデザインに関する講義でなければ教師の指導力、ひいては児童の英語力の定着（慣れ親しみ）は必要最低限以下になってしまいます。

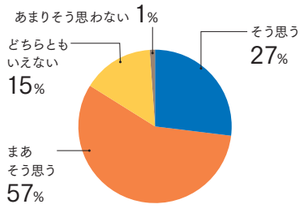
［質問④］講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答がちょうど3分の2あった。残りの3分の1を「難しかった」と「簡単だった」が半分くらいずつ占めた。



［質問⑤］講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が84%を占めた。

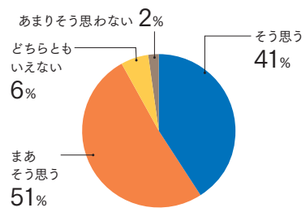


［質問⑥］質問⑤で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 現場・授業に即した資料だとより良い。
- 質問③で答えたとおりです。

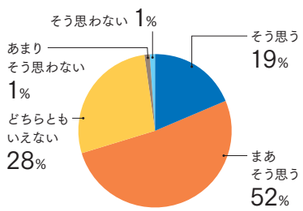
［質問⑦］講師の説明はわかりやすかったですか。

「そう思う」が41%で、「まあそう思う」が51%となり、肯定的回答は合わせて92%となった。



［質問⑧］講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答（71%）が多かった。「どちらともいえない」も28%と比較的多かった。

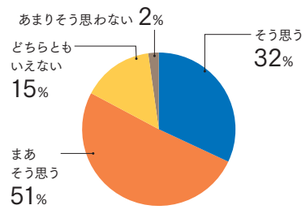


［質問⑨］質問⑧で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- YouTubeの動画が長かった。

［質問⑩］講座中のタスクは役に立ちましたか。

「そう思う」が32%で、「まあそう思う」が51%となり、肯定的回答は合わせて83%となった。



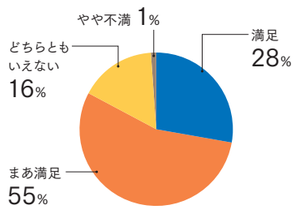
［質問⑪］質問⑩で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 会場に出向いていない場合、時間を持て余すため。*
- 心構えよりも具体的な教授法をエビデンスを添えて教えていただきたいです。

＊拠点校（会場）受講と拠点校に出向かずに勤務校での受講を可能としていたので、この回答をした受講者はオンライン受講中での他の受講者とのグループワークに参加できなかったためこのような意見を出したと考えられる。

［質問⑫］総合的にこの講座に満足できましたか。

83%が肯定的回答をした。「どちらともいえない」は16%占めた。否定的回答は1%だった。

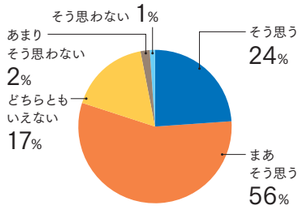


［質問⑬］質問⑫で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 内容がわかりにくかった。
- 具体例が乏しいと感じました。

［質問⑭］このような機会がまたあれば、受講したいですか。

80％の受講者が肯定的に回答した。「どちらともいえない」は17％占めた。否定的な回答は3％だった。



自由コメント

＊代表的なコメントのみ掲載

- 音楽や体育の実技教科と同じように指導にあたればいいのだという考え方を授業を作っていく上で念頭に置くことが大切だと感じました。また、教師が英語を話せるではなく、子供達の好奇心を大切に子供が話せる授業を目指していきたいと思いました。
- 他県の先生方とコミュニケーションできるといいなと思いました。
- 拠点校の先生が現場で感じていることを質問していたことは私も感じていることでした。（緊急事態宣言中におけるコミュニケーション等）
- 他地区の先生方のお話を聞く機会も設けていただきありがたかったです。
- 第1回目ということで話題が広く、話しにくいと感じる場面もありましたが、他の地区の受講者の質問とその回答で納得することがあったり、周囲との会話の中でお互いに感じている課題などを共有したりすることができました。昨年まで中学校教員をしておりましたが、年々、生徒の英語への親しみや、ペアワーク・コミュニケーション活動の「慣れ」、イントネーションの自然さ（まねがうまい、抵抗が少ない）などを感じていました。小学校の先生方には感謝の気持ちでいっぱいですし、自信をもって今後も外国語活動に取り組んでいただきたいと思っております（違う立場でのコメントで申し訳ありません）。講座中に大学生の話があったので、中学生の話を周囲にはしました）。次回の受講を楽しみにしております。
- 他の学校の先生方と交流することで、抱えている悩みなどが分かってとても参考になりました。
- 英語の授業に対して不安が大きかったのですが、今日の講義を受けたことで前向きな気持ちで授業をしたいと思えるようになりました。
- 英語で話す、児童の聞きたいという思いがあれば聞き取り、参加していけるということでしたが、それにはやはり学級経営が大切だと感じました。
- 言語活動の意味や今後の指導のなかでの言語活動の持ち方などについて考えを深めることができました。

ここからはより詳細な分析を記す。受講者による講座の総合的な満足度はどのような観点で判断されているのかをより深く究明するために「質問⑫：総合的にこの講座に満足できましたか。」と他の3つの質問（質問①：講座内容は理解できましたか。質問②：講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。質問⑦：講師の説明はわかりやすかったですか。）とをクロス分析した。

まず始めに、質問⑫と質問①とのクロス集計表を作成した（表1）。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したところ、有意な関係を確認した。さらに残差分析でどこにどのような特徴があるかを分析した。

表1 「①講座の内容は理解できましたか。」と「⑫総合的にこの講座に満足できましたか。」のクロス表

			総合的にこの講座に満足できましたか。				合計
			満足	まあ満足	どちらとも言えない	やや不満	
講座の内容は理解できましたか。	そう思う	度数	32	26	2	0	60
		調整済み残差	5.7	-2.2	-3.5	-1.2	
	まあそう思う	度数	8	52	16	0	76
		調整済み残差	-4.9	3.5	1.6	-1.5	
	どちらとも言えない	度数	1	2	5	1	9
		調整済み残差	-1.2	-2.0	3.3	2.6	
	あまりそう思わない	度数	0	0	0	1	1
		調整済み残差	-0.6	-1.1	-0.4	8.5	
	そう思わない	度数	0	0	1	0	1
		調整済み残差	-0.6	-1.1	2.3	-0.1	
合計			41	80	24	2	147

特に特徴的な点を2つ挙げる。最初の点であるが、質問①に対して「そう思う」と回答した場合、総合的に「満足」と回答する傾向が特に強いことがわかる。これは調査済み残差が＋5.7であるからである（5％水準であれば、調整済み残差は±1.96以上が特徴的な個所）。2つ目の点であるが、質問①に「まあそう思う」と回答した場合、調査済み残差が＋3.5であることから総合的に「まあ満足」と回答する強い傾向があることもわかる。つまり、受講者が講座内容を理解できたと判断する程度に応じて満足度も変化しており、受講者が講座を理解できたかどうかは講座の総合的満足度に強く影響を与えていることを示唆している。

次に、質問⑫と質問②とのクロス集計表を作成した（表2）。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したところ、有意な関係を確認した。さらに残差分析でどこにどのような特徴があるかを分析した。

表2 「②講座の内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」と「⑫総合的にこの講座に満足できましたか。」のクロス表

			総合的にこの講座に満足できましたか。				合計
			満足	まあ満足	どちらとも言えない	やや不満	
講座の内容は学校現場のニーズに合っていましたか。	そう思う	度数	35	13	0	0	48
		調整済み残差	8.5	-4.6	-3.7	-1.0	
	まあそう思う	度数	6	60	9	0	75
		調整済み残差	-5.5	6.4	-1.4	-1.5	
	どちらとも言えない	度数	0	7	15	1	23
		調整済み残差	-3.2	-2.5	6.9	1.3	
	そう思わない	度数	0	0	0	1	1
		調整済み残差	-0.6	-1.1	-0.4	8.5	
合計			41	80	24	2	147

表2の特徴的な点を2つ取り上げる。最初に、質問②に対して「そう思う」と回答した場合、調査済み残差が＋8.5であることから総合的に「満足」と回答する傾向が強いことがわかる。2つ目の点であるが、質問②に「まあそう思う」と回答した場合、調査済み残差が＋6.4であることから総合的に「まあ満足」と回答する強い傾向があることもわかる。つまり、講座内容が学校現場のニーズに合っていると受講者が判断したかどうかは講座の総合的満足度に強く影響を与えていることを示唆している。

最後に、質問⑫と質問⑦とのクロス集計表を作成した（表3）。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したところ、有意な関係を確認した。さらに残差分析でどこにどのような特徴があるかを分析した。

表3 「⑦講師の説明はわかりやすかったですか。」と「⑫総合的にこの講座に満足できましたか。」のクロス表

			総合的にこの講座に満足できましたか。				合計
			満足	まあ満足	どちらとも言えない	やや不満	
講師の説明はわかりやすかったですか。	そう思う	度数	34	23	3	0	60
		調整済み残差	6.5	-3.3	-3.1	-1.2	
	まあそう思う	度数	7	55	13	0	75
		調整済み残差	-5.1	4.7	0.3	-1.5	
	どちらとも言えない	度数	0	2	7	0	9
		調整済み残差	-1.9	-2.0	5.1	-0.4	
	あまりそう思わない	度数	0	0	1	2	3
		調整済み残差	-1.1	-1.9	0.8	9.9	
合計			41	80	24	2	147

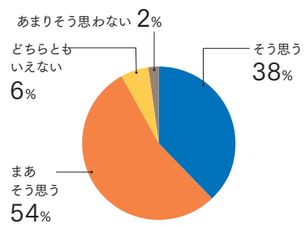
表3の特徴的な点を2つ取り上げる。最初に、質問⑦に対して「そう思う」と回答した場合、調査済み残差が＋6.5であることから総合的に「満足」と回答する傾向が強いことがわかる。2つ目の点であるが、質問⑦に「まあそう思う」と回答した場合、調査済み残差が＋4.7であることから総合的に「まあ満足」と回答する強い傾向があることもわかる。つまり、受講者が講師の説明がわかりやすいと判断したかどうかは講座の総合的満足度に強く影響を与えていることを示唆している。

第2回講座から第6回講座においても同様のクロス分析を行った。その結果、全ての講座で第1回講座と同じ結果を確認した。

第2回講座　評価アンケート　結果分析

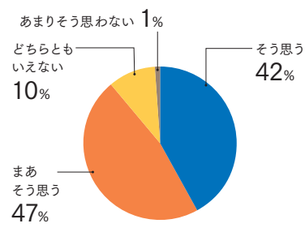
［質問①］講座の内容は理解できましたか。

「そう思う」（38％）と「まあそう思う」（54％）を合わせて肯定的意見が92％を占めた。



［質問②］講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」（42％）と「まあそう思う」（47％）を合わせて89％であった。

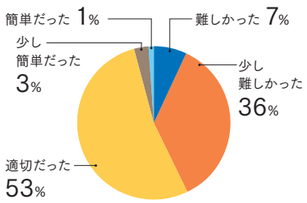


［質問③］質問②で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 自分が低学年の外国語活動しかしていないため、わからない部分があった。
- 第3回の講座が機材の充電切れでよく見られなかったため。
- 英語習得の初歩段階でスキルビルディングはあまり効率的とは言えないと思う。

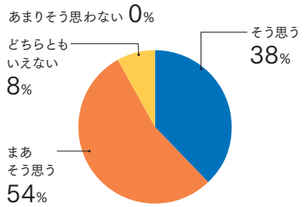
［質問④］講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答が53％であった。「少し難しかった」は36％で、「難しかった」は7％だった。



［質問⑤］講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が92％を占めた。

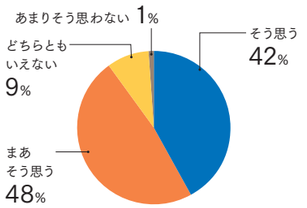


［質問⑥］質問⑤で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- シラブルを扱ったほうがよいと思った。

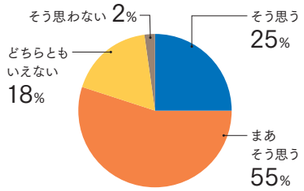
［質問⑦］講師の説明はわかりやすかったですか。

「とてもそう思う」が42％で、「まあそう思う」が48％となり、肯定的回答は合わせて90％となった。



［質問⑧］講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答（80％）が多かった。「どちらともいえない」も18％であった。

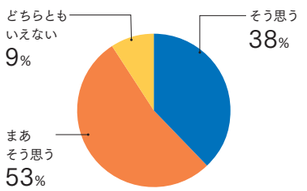


［質問⑨］質問⑧で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 時間に余裕があって読むことができれば活用できるのかもしれないが、現実的に普段の業務に加えて講座前のタスクを確認する作業はとてもではないが、時間をかけて行うことはできない。
- 働き方改革が叫ばれている中、このような時間のかかる事前タスクは実施しにくい。

［質問⑩］講座中のタスクは役に立ちましたか。

91％は肯定的に回答した。

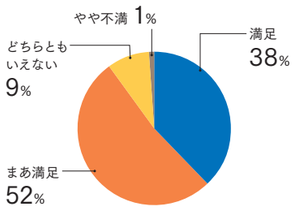


［質問⑪］質問⑩で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- コメントなし。

［質問⑫］総合的にこの講座に満足できましたか。

第2回講座の総合的満足度だが、90％が肯定的回答をした。「どちらともいえない」は9％で、否定的回答は1％だった。

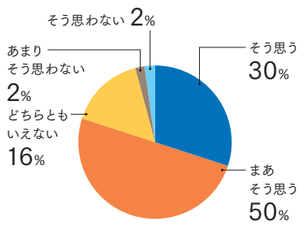


［質問⑬］質問⑫で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 自分のレベルに不適応だった。
- 他1名からコメントあり。

［質問⑭］このような機会がまたあれば、受講したいですか。

80％の受講者が肯定的に回答した。「どちらともいえない」は16％占めた。否定的な回答は全部で4％だった。



自由コメント

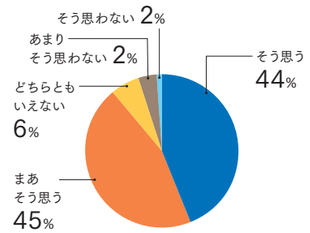
＊代表的なコメントのみ掲載

- ゴールを意識してコミュニケーションの場面を設定し、何度も繰り返すことで語を習得していくことができるということがわかりました。
- 大変勉強になりました。大学の卒論で小学生の英語の読みについて研究したので、池田先生の論文に興味があります。ぜひ読んでみようと思いました。
- お話しされている講師を画面に映すのではなく、提示されている資料を画面に映した状態で講師のお話が聴けるとありがたいです。
- とてもわかりやすくて、授業のイメージができました。
- 講師の先生のお話がとてもわかりやすかったです。ただし、70分に詰め込んだ内容が多かったため、全て理解できたとは言えませんでした。2回に分けてやってもよいほど、魅力的な内容だったと思います。
- 外国語活動において「聞くこと」を丁寧に扱うことが重要であることを改めて理解することができました。貴重なご講話をありがとうございました。
- 「読む」「書く」については指導要領の通りです。「十分慣れ親しんだ」の度合いや読むや書くにおいてどの程度できるべきかを明確にしたかったので、今日の講座はとても役に立ちました。
- 講義終盤いわき市の方の質問を受けた池田先生の返答がとてもわかりやすく今後の参考にしたいと思いました。
- 授業の中での効果的な日本語の使い方が大変参考になりました。「読むこと」「書くこと」の指導において、押さえなければならないポイントを整理できました。
- 大変学ぶことが多くありがたかったです。できればもう少し時間をかけて勉強したい内容だなと思いました。
- これからは、学んだことを活かし、音声に十分慣れ親しむ時間を確保してから、板書をしたり、発話させたりしていきます。
- 具体的な場面を想定した指導方法を明示してくださったことが、大変参考になりました。
- 「読むこと」「書くこと」における指導について具体的な指導のポイントを教えていただきありがとうございました。
- 音と文字の関係について、詳しく知ることができました。
- 「読むこと、書くことの指導」についてやチャンツについて、知識を深めることができました。

第3回講座　評価アンケート　結果分析

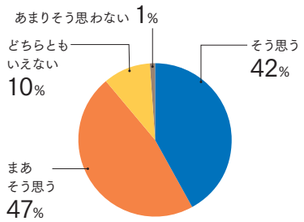
［質問①］講座の内容は理解できましたか。

「そう思う」（44％）と「まあそう思う」（45％）を合わせて肯定的意見が89％を占めた。



［質問②］講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」（42％）と「まあそう思う」（47％）を合わせて89％であった。

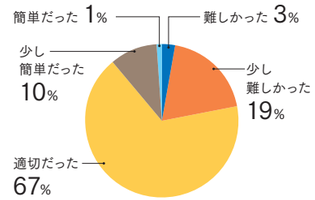


［質問③］質問②で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 音声が聞き取り辛く、映像も途中で固まってしまったので…すみません。
- 映像や音声が乱れ、30分程度視聴することができなかった。
- ネットがつながらず、観ることができなかったからです。

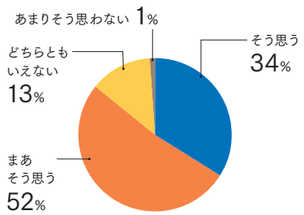
［質問④］講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答が67％であった。「少し難しかった」は19％で、「難しかった」は3％だった。「少し簡単だった」と「簡単だった」を合わせて11％であった。



［質問⑤］講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が86％を占めた。

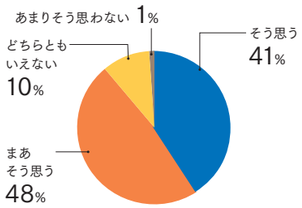


［質問⑥］質問⑤で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 現場に則していない。

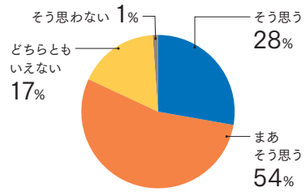
［質問⑦］講師の説明はわかりやすかったですか。

「とてもそう思う」が41%で、「まあそう思う」が48%となり、肯定的回答は合わせて89%となった。



［質問⑧］講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答（82%）が多かった。「どちらともいえない」という回答は17%あった。

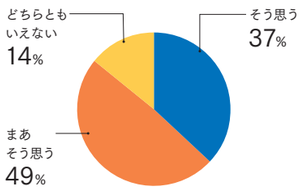


［質問⑨］質問⑧で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑩］講座中のタスクは役に立ちましたか。

86%は肯定的に回答した。「どちらともいえない」は14%あった。

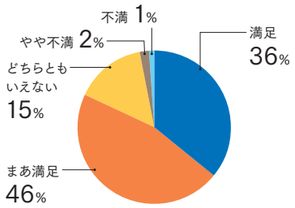


［質問⑪］質問⑩で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑫］総合的にこの講座に満足できましたか。

第3回講座の総合的満足度だが、82%が肯定的回答をした。「どちらともいえない」は15%で、否定的回答は3%だった。

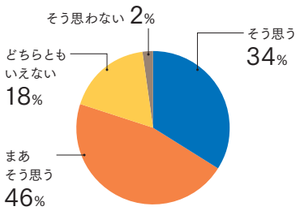


［質問⑬］質問⑫で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・講師紹介の時間を減らし、実際の授業場面をもっと取り上げてほしかった。
・機材の充電切れの影響でしっかりと受講することができず残念でした。
・ネット回線の不具合。

［質問⑭］このような機会がまたあれば、受講したいですか。

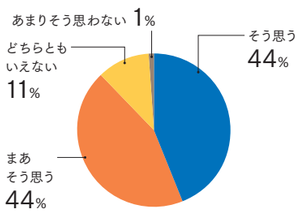
80%の受講者は肯定的に回答した。「どちらともいえない」は18%を占めた。否定的な回答は全部で2%だった。



これ以降の3つの質問⑮・⑯・⑰はこの第3回講座固有の質問である。

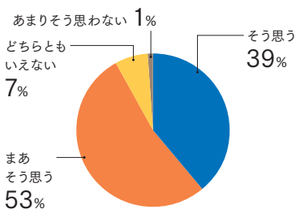
［質問⑮］この講座で学んだ指導法を自分の授業で使ってみたいですか。

肯定的回答は88%あった。「どちらともいえない」が11%あり、否定的回答は1%だった。



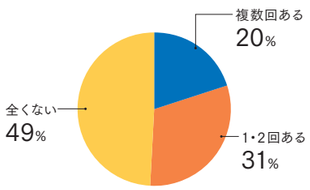
［質問⑯］英語の音声における強勢（ストレス）、リズム、イントネーションをこれからもっと学んでみたいですか。

肯定的回答は92%あった。否定的回答は1%だった。



［質問⑰］以前、英語のチャンクや音のつながりに関する講習等を学んだことがありますか。

「複数回ある」という回答は20%で、「1,2回ある」は31%で合わせて51%が講習等で学んだ経験があることが分かった。



自由コメント

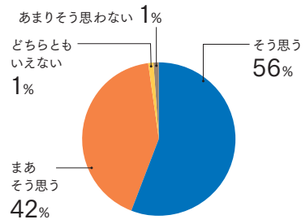
＊代表的なコメントのみ掲載

・ぐるぐるが面白かったです。よいお手本にはならないかもしれませんが、日直を間に挟むのも面白いと思いました。盛り上がりそうです。
・学生が実際にいてくださり、わかりやすかったです。
・たいへん楽しい研修で、しかもすぐに授業につかえそうなのでよかったと思います。
・実演を踏まえていただいたので、チャンツのやり方はよくわかりました。自身のこれまでの経験だと、チャンツでは、教師の後に続いて英語を話せるが、言語活動になると、なかなかチャンツで身につけた英語を使いこなせない様子がしばしば見られます。講座でもお話に挙がっていたように、チャンツで身につけた英語が使える英語なるようにするための方法や理論など、もう少し詳しく教えていただきたかったと感じました。
・現場に直ぐに生かせるように、「ぐるぐる」を教えていただきました。「ひとかたまり」については、私自身が気を付けていきたいと思います。
・すぐに実践できることができるので、夏休み明けにすぐにやってみようと思います。
・今回の講座を受け、HRTがChantsやSmall Talk で楽しそうに英語を使うことで，子供たちも慣れ親しむことができるのだと思いました。苦手意識はまだありますが会話を楽しんでみようと思います。
・学んだことのないものばかりでした。ただフラッシュカードだけではなく，スモールトークやチャンクを取り入れてまずは教師が楽しみながら児童と学習していくように心がけていきます。

第4回講座　評価アンケート　結果分析

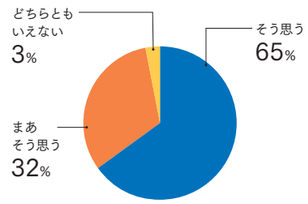
［質問①］講座の内容は理解できましたか。

「そう思う」（56%）と「まあそう思う」（42%）を合わせて肯定的意見が98%を占めた。



［質問②］講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」（65%）と「まあそう思う」（32%）を合わせて97%であった。

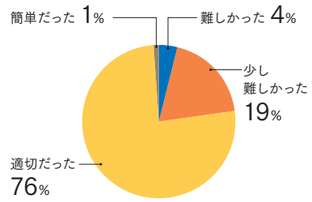


［質問③］質問②で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

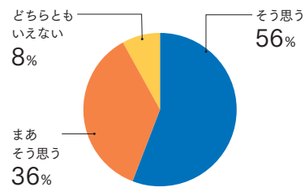
［質問④］講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答が76%であった。「少し難しかった」は19%で、「難しかった」は4%だった。「簡単だった」が1%あった。



［質問⑤］講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が92%を占めた。

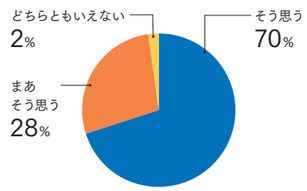


［質問⑥］質問⑤で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

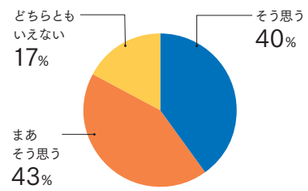
［質問⑦］講師の説明はわかりやすかったですか。

「とてもそう思う」が70%で、「まあそう思う」が28%となり、肯定的回答は合わせて98%となった。



［質問⑧］講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答（83%）が多かった。「どちらともいえない」という回答は17%あった。

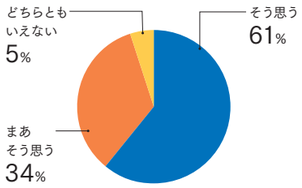


［質問⑨］質問⑧で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑩］講座中のタスクは役に立ちましたか。

95％は肯定的に回答した。「どちらともいえない」が5％あった。

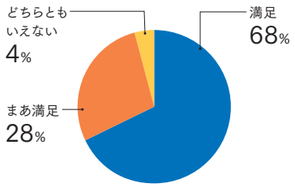


［質問⑪］質問⑩で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑫］総合的にこの講座に満足できましたか。

第4回講座の総合的満足度だが、96％が肯定的回答をした。「どちらともいえない」は4％で、否定的回答は0％だった。

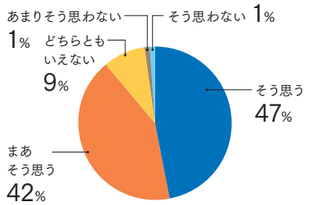


［質問⑬］質問⑫で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑭］このような機会がまたあれば、受講したいですか。

89％の受講者が肯定的に回答した。「どちらともいえない」は9％占めた。否定的な回答は全部で2％だった。



自由コメント

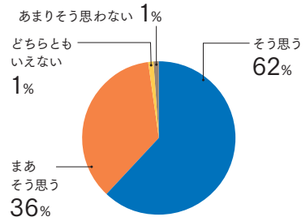
＊代表的なコメントのみ掲載

- Small Talkやchantsを行う際の教師側の意識することについて学ぶことができました。また、ALTとHRTとのやり取りの仕方を見ることができたのも大変勉強になりました。
- とてもわかりやすい内容でした。特に必然性という視点で授業をふり返ると、「え？何この例文。。。」という違和感を感じることがたくさんありました。必然性を高めるために質問を変えていいことを知って、次回の授業から取り入れていきたいと思います。
- エイゴビート2のテーマソング私も好きです。あと、かまきりおもしろかったし、かまきりの英語の言い方を知ることができてよかったです。
- 絵本の紹介をしていただいたので、1年生ですが、取り入れていきたいです。ALTと協力して、よりよい外国語活動にしていきたいです。
- 基本的な文を応用して、自分の言いたいことを伝える態度を育てていきたいと感じました。
- 授業構成を一定に、というお話があり、それぞれの活動について詳しくお話いただいたのがよかったです。やってみようという気持ちになりました。
- 具体的な場面を提示して、どのように改善を図ればよいのかをわかりやすく教えていただき,大変勉強になりました。
- 「聞くこと」「話すこと」の指導についても、まず教師が楽しく教えることが大切だと思いました。
- 単元の組立て方や具体的に授業に生かせるアイデアを教えていただき、大変ありがたいと思いました。ぜひ、実際の授業で活用したいです。
- 言語活動をどのような場面でどのように行うのか、よくわかりました。
- 聞き取る力を育てるためには、Small Talkや授業中のやり取りを生かして子供たちの英語を聞こうとする心の準備を整えていきたいと思います。
- 「指導と評価の一体化」の評価が、先生のお話でよくわかりました。成長の段階に応じた（理解された）指導の方法や活動を紹介していただきありがとうございました。夏休み明けの授業で少しずつ挑戦してみたいと思いました。
- 他教科では「必然性」という言葉を意識していましたが、外国語活動では考えたことがありませんでした。今後意識して学習に取り組んでいきたいと思います。
- こちらの質問を中心に講義を展開してくださったのでとても実のあるものになりました。
- 感想になるのですが、教科書に書かれている基本的な文で終わらずに、発展性・応用性をもたせるための指導の工夫について、とても理解しやすく勉強になりました。子供たちに＋α、ここまでできたら◎だよ。という視点を与える動機付けを2学期に行なってみたいと思います。授業の流れも大変参考になりました。

第5回講座　評価アンケート　結果分析

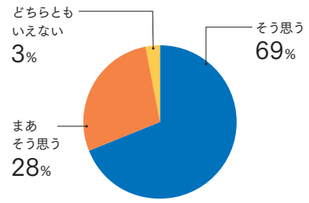
［質問①］講座の内容は理解できましたか。

「そう思う」（62％）と「まあそう思う」（36％）を合わせて肯定的意見が98％を占めた。



［質問②］講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」（69％）と「まあそう思う」（28％）を合わせて97％であった。

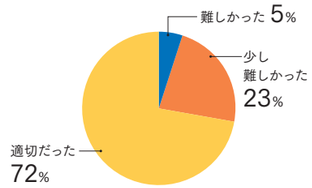


［質問③］質問②で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

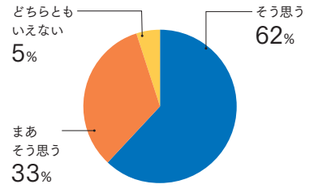
［質問④］講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答が72％であった。「少し難しかった」は23％で、「難しかった」は5％だった。「簡単だった」という回答は0％であった。



［質問⑤］講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が95％を占めた。

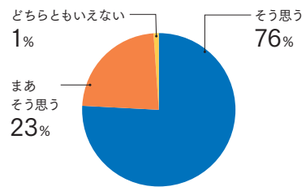


［質問⑥］質問⑤で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

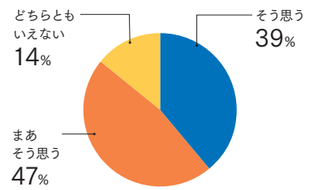
［質問⑦］講師の説明はわかりやすかったですか。

「とてもそう思う」が76％で、「まあそう思う」が23％となり、肯定的回答は合わせて99％となった。



［質問⑧］講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答（86％）が多かった。「どちらともいえない」が14％あった。

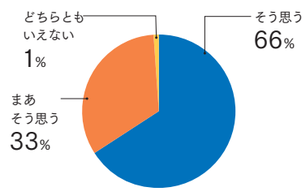


［質問⑨］質問⑧で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑩］講座中のタスクは役に立ちましたか。

99％は肯定的に回答した。「どちらともいえない」が1％あった。

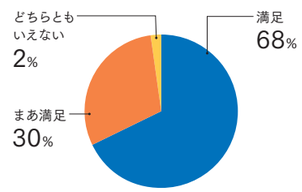


［質問⑪］質問⑩で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑫］総合的にこの講座に満足できましたか。

第5回講座の総合的満足度だが、98％が肯定的回答をした。「どちらともいえない」は2％で、否定的回答は0％だった。

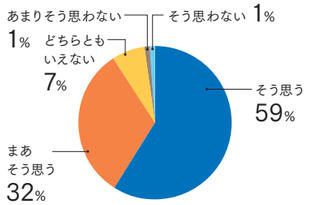


［質問⑬］質問⑫で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑭］このような機会がまたあれば、受講したいですか。

91％の受講者が肯定的に回答した。「どちらともいえない」は7％占めた。否定的な回答は全部で2％だった。



自由コメント

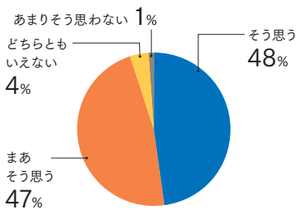
＊代表的なコメントのみ掲載

・先生のお話は、小学校現場に直ぐにでも活用できる事柄が多く、大変参考になりました。英語辞典は早速購入してもらえるようにお願いしました。
・listeningのお話で「自由になんとなくわかる」が大切、という言葉に力をいただきました。「聞くこと」に関する基礎的指導でもありましたが、自分の経験から推測しながら内容を聞き取り、理解するということが今回の講義で一番うれしく思ったことです。完璧に聞き取れるように、言えるようにしなくては、というこれまでの自分の概念を少し変えていかなくてはと思いました。
・高学年を指導する際には、今回のことを生かして頑張りたいです。
・聞くこと、話すことの指導のポイントがわかりました。
・中学年担当ですが、高学年へのつながりも教えていただきまして、感謝しています。
・各地区からの質問に対し丁寧に説明していただきわかりやすかったです。
・事前課題に示された本、ネットで購入し、読みました。とても勉強になりました。
・丁度5年生の授業構成を考えていたところでした。大変役立つ視点をたくさんいただきありがとうございました。
・子供たちの反応の良さを認めて褒めながら、聞き取り理解する力をさらに伸ばしていけるように指導していきたいと思います。
・リスニングの話が大変参考になりました。トップダウンとボトムアップの違い。リスニングの種類など大変参考になりました。
・とにかく楽しい時間で、早く英語で授業をしたくなってしまいました！
・日本語の言語習得過程と英語の習得過程の話をもっと聞きたいです。「言葉を聞いて反復できるということは理解しているということ」はなるほどなと思いました。非常に興味深かったです。
・概要を理解する聞く力が大切ということを私も感じていました。国語の読解ととてもよく繋がります。この力がついてくると、聞くだけではなく、話す、書く力も育つと思います。
・各校の質問に対する回答を適宜入れながらの内容でしたので、我々受講者のニーズに合っていて大変勉強になりました。
・今まで「リスニング＝細かい部分まで正確に聞き取ること」と思っていましたが、間違っていたことを教えていただくことができてよかったです。繰り返しが大切だということがよくわかりました。
・推測しながら聞き、理解する課題が少し難しく感じました。みんなで話し合いながら、先生に励ましていただきながら答えることで理解できてきました。こういった経験を子供たちにも味合わせていきたいと思いました。
・これからSmall Talkを継続して行っていきたいと思います。

第6回講座　評価アンケート　結果分析

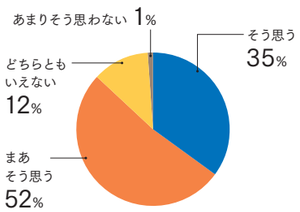
［質問①］講座の内容は理解できましたか。

「そう思う」(48%)と「まあそう思う」(47%)を合わせて肯定的意見が95%を占めた。「どちらともいえない」が4％で、「あまりそう思わない」は1％であった。



［質問②］講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」(35%)と「まあそう思う」(52%)を合わせて87%であった。「どちらともいえない」が12％で、「あまりそう思わない」は1％であった。

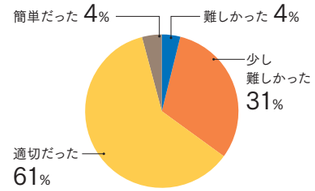


［質問③］質問②で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・小学校では小学校教師の多くがスモールトーク等ができる程度の英語を使うことができず、無理にスモールトークをすることを目的とすると教師側が間違った英文法、発音等を使いかえって児童を混乱させかねない。
・高校の内容が多かったが、小学校ならまずは中学校への接続ではないかと思ったため。

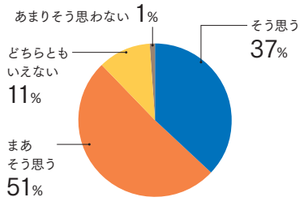
［質問④］講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答が61%を占めた。「難しかった」と「少し難しかった」を合わせて35%となった。一方、「少し簡単だった」がわずかだが4％あった。全体的に、講座内容は適切であったと言えるが、少し難しかったという意見も多めであった。



［質問⑤］講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が88%を占めた。「どちらともいえない」が11%で、「あまりそう思わない」がわずかだが1％あった。

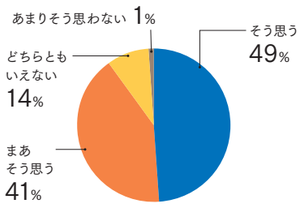


［質問⑥］質問⑤で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・言語学者のスティーブンクラッシェンによると英語にかかわらず全ての言語は習得の順序は聴くこと、読むこと、話すことの順で発達していくというのが常識となっているのに話すことを念頭に置いた指導を中心に据えることは効率的であるかと問われると疑問が残る。

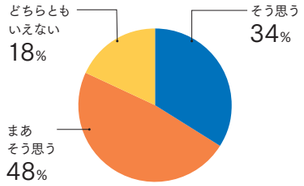
［質問⑦］講師の説明はわかりやすかったですか。

「そう思う」が49%で、「まあそう思う」が41%となり、肯定的回答は合わせて90%となった。「どちらともいえない」が9％で、「あまりそう思わない」は1％であった。



［質問⑧］講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答（82%）が多かった。「どちらともいえない」も18％と比較的多かった。

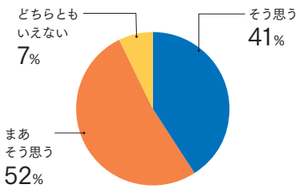


［質問⑨］質問⑧で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑩］講座中のタスクは役に立ちましたか。

93％が肯定的に回答した。「どちらともいえない」が7％であった。

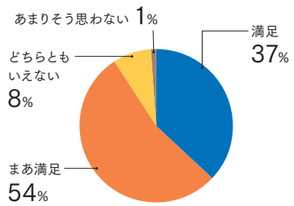


［質問⑪］質問⑩で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑫］総合的にこの講座に満足できましたか。

第6回講座の総合的満足度だが、91%が肯定的回答をした。「どちらともいえない」は8％で、否定的回答は1％だった。

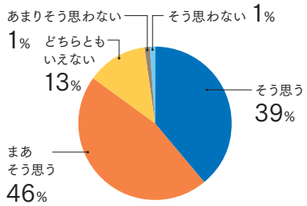


［質問⑬］質問⑫で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑭］このような機会がまたあれば、受講したいですか。

85％の受講者が肯定的に回答した。「どちらともいえない」は13％占めた。否定的な回答は全部で2％だった。



自由コメント

＊代表的なコメントのみ掲載

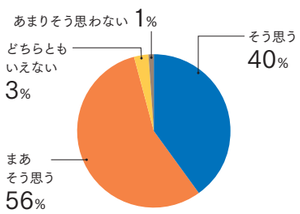
- 中学校との接続についてはこれまでも考えてきましたが、高等学校とのつながりを見据えてという点での指導を考えていかなければならないということが今日の動画や講義で実感することができました。
- スモールトークのビデオがとてもためになりました。
- 小学校の授業でも、自己の考えを理由を添えて言わせる場面を作れると思うのでやってみたい。
- 中学校・高校での様子を見ることができてよい機会となった。小学校での活動が生かされていることが小学校の職員としてはやりがいになりました。
- 横手市は小中連携については外国語を含め、多くの教科領域、生徒指導等で連携が取られている。今回の動画で高等学校の英語が現在どの様になっているかを知ることができ、大変有意義だった。以前は小中の9年間で、現在は幼小中の12年間で児童生徒を育てる意識で行っている。今回の講義で少しでも小中高の12年間（外国語・英語の場合は10年間）を意識できればと思った。
- 中学、高校の授業を見ることができて、勉強になりました。
- スモールトークの事例がとても参考になりました。
- 連携の重要性を感じました。
- 小・中学校間での連携の在り方がとても大切であると改めて実感しました。現状況では中々難しさがありますが、他校種の授業を見ること、またつながりを意識することがとても大切であると思いました。
- 小-中-高の連携範囲が広くなくそれぞれ1校ずつ程度の規模の地域にとっては、授業研究会にお互い行き来することはさほど難しくないように感じます。そして、「地域の子供をこう育てる」というビジョンが打ち出しやすく、有効であるとも思います。ただ、範囲の広い地域の方が、集まることは難しい一方で多角的な見方ができ研修が充実する様にも思います。中学校の英語科の先生方は比較的小学校と高校について研修しているように感じますし、小学校では中学校に行ったら…、という視点がある印象です。高校までは見据えていないと感じたので、今教えていることがつながっていくのだと念頭に置きながら指導していきたいと思いました。

ここからは、第7回から第10回の講座評価アンケートの結果と分析を記す。第7回から第10回は授業研究形式であったため、第1回から第6回とは異なる質問を設定した。

第7回講座　評価アンケート　結果分析

［質問①］授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(40%)と「まあそう思う」(56%)を合わせて肯定的意見が96%を占めた。「どちらともいえない」が3%で、「あまりそう思わない」は1%であった。

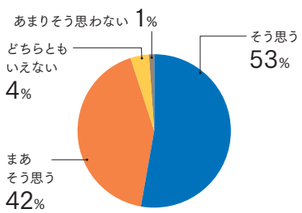


［質問②］質問①で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 英語のライティングに対して細かいところまで矯正しすぎるのは逆効果だと思う。

［質問③］動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が53%で、「まあそう思う」が42%で、肯定的回答は合わせて95%とかなり高かった。「どちらともいえない」は4%で、「あまりそう思わない」は1%であった。

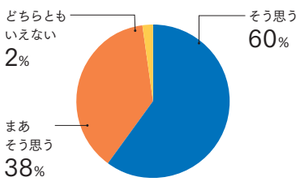


［質問④］質問③で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 研修の中心が「どうやって教科書を教えるか」になっていて、「どうやって英語が話せる子供が育つか」になっていない。

［質問⑤］講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が60%を占めた。「まあそう思う」が38%で肯定的回答は合わせて98%であった。「どちらともいえない」はわずかに1%で、否定的回答は0%であった。

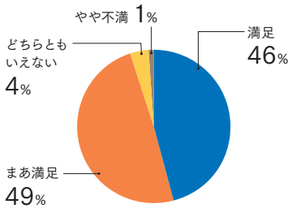


［質問⑥］質問⑤で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

［質問⑦］総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が46%で、「まあ満足」が49%となり、肯定的回答は合わせて95%であった。一方、「どちらともいえない」は4%で、否定的回答はわずかに1%であった。

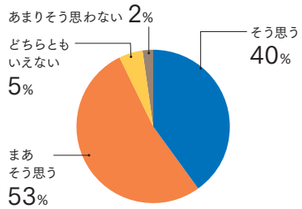


［質問⑧］質問⑦で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 英語指導法の観点からの研究や研究者の引用が一つもなかった。
- 「○○教授の研究によると」、「○○大学の研究によると。」という引用がもっとほしい。

［質問⑨］このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて93%と高った。一方、「どちらともいえない」は5%で、否定的回答はわずかに2%であった。



自由コメント

＊代表的なコメントのみ掲載

- 児童への対応としてスペルを書いて渡す方法だったり、指導案の書き方（メモを読むことはいいが、伝えるときは見ない）などが、すぐに実践できると学んだ。
- 他校の先生方の協議内容や講師の先生の助言を聞くことで，視野が広がり勉強になりました。
- ジェスチャーがどの子もできていてよかったです。
- 低学年担任ですが、勉強になる事柄がたくさんありました。
- 外国語の授業研究を実際に見ることはあまりなかったので良い機会になりました。
- 児童が話したい書きたいことを英語で表現させるための手立てを今後の授業に取り入れていきたいと思います。
- 教科書が違うので、言語材料も少しちがっていたが、6年生の段階で今回の発表は少し簡単な気がした。どこまで目指すかで単元の構成も変わってくるので、改めて今後単元末の目標から実態を踏まえて考えていこうと思った。
- 実際に授業を参観することで、これまでの講義内容がどのように生かされているか参考になります。
- 子供たちの相手を意識して話す力、話し手に注目して聞き反応を返す子供たちの活動に感心しました。普段からのコミュニケーション手段としての英語の指導が蓄積された姿だと感じました。授業者の先生、公開してくださった学級担任の先生に感謝いたします。
- ライティングの指導の仕方について、大変勉強になりました。

ここからはより詳細な分析を記す。受講者による講座の総合的な満足度はどのような観点で判断されているのかをより深く究明するために「質問⑦：総合的にこの講座に満足できましたか。」と他の3つの質問（質問①：授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。質問③:動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。質問⑤:講師の指導・助言は役に立ちましたか。）とをクロス分析した。

まず始めに、質問⑦と質問①とのクロス集計表を作成した（表4）。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したところ、有意な関係を確認した。さらに残差分析でどこにどのような特徴があるかを分析した。

表4「①授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。」と「⑦総合的にこの講座に満足できましたか。」のクロス表

			総合的にこの講座に満足できましたか。				合計
			満足	まあ満足	どちらとも言えない	やや満足	
授業動画の中で授業者が行った言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。	そう思う	度数	36	10	0	0	46
		調整済み残差	5.8	-4.8	-1.9	-0.8	
	まあそう思う	度数	16	44	4	0	64
		調整済み残差	-5.0	4.7	1.1	-1.1	
	どちらとも言えない	度数	0	2	1	0	3
		調整済み残差	-1.6	0.6	2.5	-0.2	
	あまりそう思わない	度数	0	0	0	1	1
		調整済み残差	-0.9	-1.0	-0.2	10.7	
合計			52	56	5	1	114

特に特徴的な点を2つ挙げる。最初の点であるが、質問①に対して「そう思う」と回答した場合、総合的に「満足」と回答する傾向が特に強いことがわかる。これは調査済み残差が＋5.8であるからである(5%水準であれば、調整済み残差は±1.96以上が特徴的な個所)。2つ目の点であるが、質問①に「まあそう思う」と回答した場合、調査済み残差が＋4.7であることから総合的に「まあ満足」と回答する強い傾向があることもわかる。つまり、質問①「授業動画の中で授業者が行った言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか」という問いに肯定的に回答する程度に応じて満足度も変化しており、質問①への回答は講座の総合的満足度に強く影響を与えていることを示唆している。

次に、質問⑦と質問③とのクロス集計表を作成した（表5）。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したところ、有意な関

係を確認した。さらに残差分析でどこにどのような特徴があるかを分析した。

表5 「③動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。」と「⑦総合的にこの講座に満足できましたか。」のクロス表

			総合的にこの講座に満足できましたか。				合計
			満足	まあ満足	どちらとも言えない	やや満足	
動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。	そう思う	度数	42	18	0	0	60
		調整済み残差	5.5	-4.3	-2.4	-1.1	
	まあそう思う	度数	10	35	3	0	48
		調整済み残差	-4.5	4.3	0.8	-0.9	
	どちらとも言えない	度数	0	0	0	1	1
		調整済み残差	-0.9	-1.0	-0.2	10.7	
	あまりそう思わない	度数	0	3	2	0	5
		調整済み残差	-2.1	-0.5	4.0	-0.2	
合計			52	56	5	1	114

表5 の特徴的な点を2つ取り上げる。最初に、質問③に対して「そう思う」と回答した場合、調査済み残差が＋5.5であることから総合的に「満足」と回答する傾向が強いことがわかる。2つ目の点であるが、質問③に「まあそう思う」と回答した場合、調査済み残差が＋4.3であることから総合的に「まあ満足」と回答する強い傾向があることもわかる。つまり、「動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。」という問いに受講者が肯定的に回答する程度が講座の総合的満足度に強く影響を与えていることを示唆している。

最後に、質問⑦と質問⑤とのクロス集計表を作成した（**表6**）。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したところ、有意な関係を確認した。さらに残差分析でどこにどのような特徴があるかを分析した。

表6 「⑤講師の指導・助言は役に立ちましたか。」と「⑦総合的にこの講座に満足できましたか。」のクロス表

			総合的にこの講座に満足できましたか。				合計
			満足	まあ満足	どちらとも言えない	やや満足	
講師の指導・助言は役に立ちましたか。	そう思う	度数	49	18	0	0	68
		調整済み残差	6.9	-5.9	-1.8	-1.2	
	まあそう思う	度数	3	38	3	0	44
		調整済み残差	-6.6	6.3	1.0	-0.8	
	どちらとも言えない	度数	0	0	1	1	2
		調整済み残差	-1.3	-1.4	3.2	7.5	
合計			52	56	5	1	114

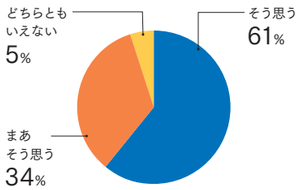
表6 の特徴的な点を2つ取り上げる。最初に、質問⑤に対して「そう思う」と回答した場合、調査済み残差が＋6.9であることから総合的に「満足」と回答する傾向が強いことがわかる。2つ目の点であるが、質問⑤に「まあそう思う」と回答した場合、調査済み残差が＋6.3であることから総合的に「まあ満足」と回答する強い傾向があることもわかる。つまり、「講師の指導・助言は役に立ちましたか。」という問いへの受講者の回答は講座の総合的満足度に強く影響を与えていることを示唆している。

第8回講座から第10回講座においても上述したクロス分析を行った。その結果、全ての講座で第7回講座と同じ結果を確認した。

第8回講座　評価アンケート　結果分析

［質問①］授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(61%)と「まあそう思う」(34%)を合わせて肯定的意見が95%を占めた。「どちらともいえない」が5%で、否定的回答は0%であった。

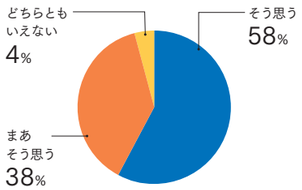


［質問②］質問①で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問③］動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が58%で、「まあそう思う」が38%で、肯定的回答は合わせて96%とかなり高かった。一方、否定的回答は0%であった。

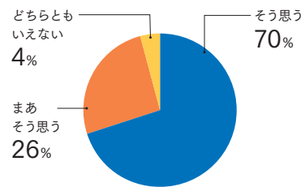


［質問④］質問③で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑤］講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が70%を占めた。「まあそう思う」が26%で肯定的回答が96%であった。「どちらともいえない」はわずかに4%で、否定的回答は0%であった。

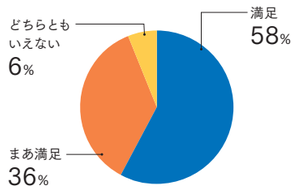


［質問⑥］質問⑤で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑦］総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が58%で、「まあ満足」が36%となり、肯定的回答は合わせて94%であった。一方、「どちらともいえない」は6%で、否定的回答はわずかに1%であった。

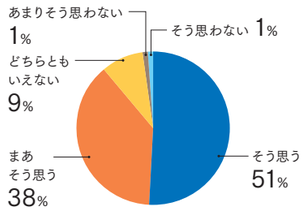


［質問⑧］質問⑦で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑨］このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて89%と高った。一方、「どちらともいえない」は9%で、否定的回答はわずかに2%であった。



自由コメント

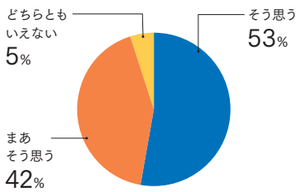
＊代表的なコメントのみ掲載

- 今回視聴させていただいた授業では、Small Talkが充実していて、すばらしい取組と感じました。子供たちが生き生きとコミュニケーションしているところからすると、とても有効な活動だと感じました。ぐるぐるやYES/NOクイズも参考にさせていただきます。
- 前回までの研修で得た技法「ぐるぐる」を使用していて、研修の成果が出ているなと感じました。
- 自分の授業では、最近わかる人やできる人が挙手をして答えることが多くなっていた気がするので、全員を参加させて表現に慣れ親しめるような活動をしていかなくてはいけないなと再確認することができました。
- 気付かない視点がたくさんあった。例えば、単語に冠詞をつけるようにするとか、間違うことで気付きを促すとか、言語教育のありように気付かされた。
- 授業の中でHRTの英語での発話量が多く、普段から英語に慣れている子供達ですばらしいなと感じました。
- 児童にとって必然性がある言語活動であるかを意識しながら、活動計画をたてることが大切だと思いました。今回、丸山先生の授業を視聴させていただき、英語のフレーズがもつテンポやリズムを意識して授業をされていて大変勉強になりました。また、「失敗も気付きにつながる」ということも佐藤先生よりご教授いただき、外国語の指導を（現在は外国語を担当していませんが）をやってみたいという意欲をもちました。
- 話す・聞くことの指導について、実際に授業を見させていただき、大変参考になりました。
- 児童の意欲を維持しながら修正していく指導の仕方が大変勉強になりました。
- 授業では児童を積極的に巻き込んでおり、スモールトークもチャンツもとてもいいなと思いました。
- 児童を巻き込んでのスモールトークがとても参考になりました。
- ALTとHRTのSmall Talkのやり取りに価値づけしていただき、当たり前の様にしていたことの大切さを実感するとともに、今度はこうしようという次につながる意欲が高まりました。
- 本時の表現につながるように練習が設定されていて非常にスムーズに授業が展開され、児童の理解につながっていたと思います。
- すばらしい授業を見せていただき、ありがたかったです。更に、指導者の先生からのご指導もすばらしく、納得のいくものでした。授業者にとっても意味づけをしてもらえてよかったのではないでしょうか。大変わかりやすかったです。
- 外国語は中学生になってもあるので、子供たちが苦手意識を持たないように楽しみながらできる活動を増やしていきたい。
- 「ぐるぐる」はすぐに実践しようと思いました。

第9回講座　評価アンケート　結果分析

［質問①］授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(53%)と「まあそう思う」(42%)を合わせて肯定的意見が95%を占めた。「どちらともいえない」が5%で、否定的回答は0%であった。

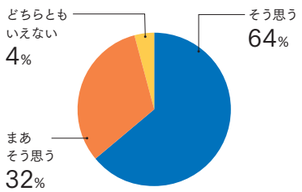


［質問②］質問①で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問③］動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が64%で、「まあそう思う」が32%で、肯定的回答は合わせて96%とかなり高かった。一方、否定的回答は0%であった。

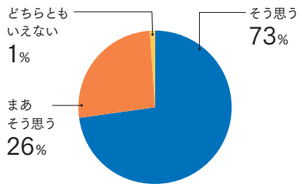


［質問④］質問③で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑤］講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が73%を占めた。「まあそう思う」が26%で肯定的回答が99%であった。「どちらともいえない」はわずかに1%で、否定的回答は0%であった。

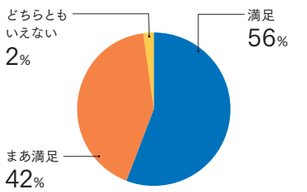


［質問⑥］質問⑤で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑦］総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が56%で、「まあ満足」が42%となり、肯定的回答は合わせて98%であった。一方、「どちらともいえない」は2%で、否定的回答は0%であった。

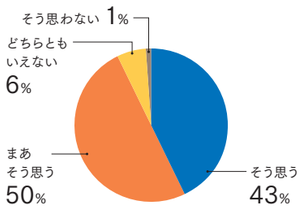


［質問⑧］質問⑦で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑨］このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて93%と高った。一方、「どちらともいえない」は6%で、否定的回答はわずかに1%であった。



自由コメント

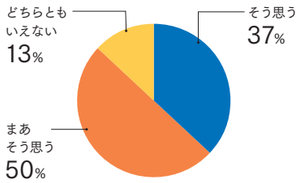
＊代表的なコメントのみ掲載

- まだ3年生なのでスモールトークを取り入れていないのですが、年明けぐらいから取り入れてみたいです。
- 子供たちが楽しそうに活動していてとても良いと思いました。まずはやってみる、子供を巻き込んでやってみる、そう言ったアドバイスにとても安心させられます。
- 授業提示，それに対するご指導とも，大変勉強になりました。
- 元気に明るくテンポよく授業が展開され、子供たちも生き生きと活動していました。たいへん勉強になりました。
- 先生が楽しそうに授業を進めていて，テンポよく進んで活気があってよかったと思います。Chantのやり方は特に参考になりました。
- 応答タイミングを早くすることが児童への発話力に繋がると聞いて、とても勉強になりました。英語だけではなく音楽の授業に活かされることもあり、とても勉強になりました。
- 実際の授業動画がとても参考になりました。教師からの積極的な英語の発話によって、子供たちも楽しく生き生きと活動できることがよくわかりました。Greeting~Small Talkまでの、英語の対話を見ると、日々の学習の積み重ねがよくわかります。また、講師の先生のお話もどれも勉強になることばかりで、時間がもう少しあるといいなと感じるほどでした。今後の外国語活動に生かしていきたいです。

第10回講座　評価アンケート　結果分析

［質問①］授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(37%)と「まあそう思う」(50%)を合わせて肯定的意見が87%を占めた。「どちらともいえない」が13%で、否定的回答は0%であった。

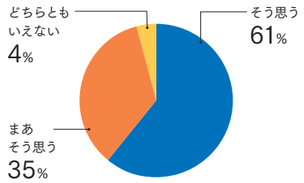


［質問②］質問①で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問③］動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が61%で、「まあそう思う」が35%で、肯定的回答は合わせて96%とかなり高かった。一方、「どちらともいえない」が4%あったが、否定的回答は0%であった。

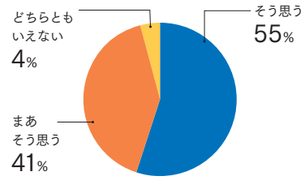


［質問④］質問③で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑤］講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が55%を占めた。「まあそう思う」が41%で肯定的回答が96%であった。「どちらともいえない」はわずかに4%で、否定的回答は0%であった。

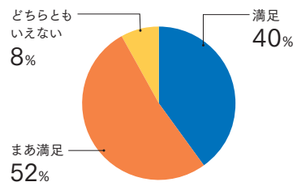


［質問⑥］質問⑤で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑦］総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が40%で、「まあ満足」が52%となり、肯定的回答は合わせて92%であった。一方、「どちらともいえない」は8%で、否定的回答は0%であった。

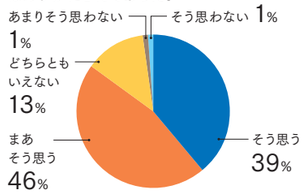


［質問⑧］質問⑦で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

［質問⑨］このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて85%と高った。一方、「どちらともいえない」は13%で、否定的回答はわずかに1%であった。



自由コメント

＊代表的なコメントのみ掲載

- 授業者が子供たちのことをしっかりと把握していて、楽しい雰囲気で進んでいったのがとても良かったと思いました。
- いい雰囲気でテンポよく授業が進んでいて、いいなと思いました。Small Talkで実演したり他の先生が動画で出演したり工夫があって子供達も楽しかっただろうなと思いました。
- 教科書だけでなく児童の実態に合わせた教材を考え、楽しい授業を展開していくことが大切だと感じました。
- 何といっても授業場面の映像が参考になります。学校によって、児童の実態によって授業が違うということに気付かされます。同時に、繰り返し話す・聞く活動の設定や自然なコミュニケーションになるような工夫、配慮が重要であることはどの授業でも共通だなと感じました。日々の授業改善に生かしていきたいです。
- 授業を実際にやってみることが一番の研修であると、改めて実感しました。
- コロナ禍でなかなか他の先生方の実践（特に外国語）が見られない中、とても貴重な機会をいただいたことに感謝しております。
- 提案例を実演で見せていただけて、とてもわかりやすかったです。自然な会話になるようなフレーズがとても大切だと感じました。
- 授業者の先生、すばらしい授業提供、ありがとうございました。また、この講座もとても勉強になりました。
- 授業動画について、指導についての研修なので、授業者の先生の声を主に拾うのは当然ですが、できれば、活動中の児童の様子（発言や表情）がもっと見たかったと思いました。
- 授業提供ありがとうございました。授業やチャンツのスピードも毎回同じように進めていく中で、子供たちも慣れ親しんでいけることがわかり、とても楽しく授業に取り組んでいるのが伝わってきました。
- 大学の講師の先生のモデルが大変参考になりました。より自然なコミュニケーションを外国語活動で目指して参りたいと思います。
- このような貴重な授業実践の場をいただけて、本当にありがとうございました。3学期も、ご指導いただいたことを胸に、外国語活動、外国語科の指導になお一層力を入れていきたいと思います。
- T1とT2のやり取りを見せてから、児童の活動に入ることで、イメージをもって活動しやすくなると感じました。

V 講座運営に対する評価

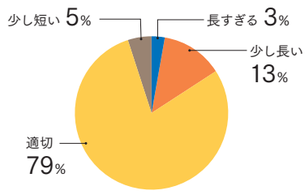
講座全体の運営に関する側面に対して、受講者から意見や感想をもらうために全講座終了後に全講座総合評価アンケートを実施した。受講者には第10回講座終了後の2週間以内に回答をしてもらった。このアンケートは、最初に属性に関する質問4つ、次に講座時間の長さや実施時期、実施時間帯、そして講座の実施形態、最後に講座内容の要望に関する質問17つで構成された。アンケートに回答してくれた受講者数は合計138人であった。以下に、その詳細を記す。

全講座総合評価アンケート　結果分析

受講者の属性に関しては、「Ⅳ.講座内容に対する評価」の中で全10回の講座に参加しアンケートに回答してくれた受講者の回答結果を既に報告している。この全講座総合評価アンケートに回答してくれた受講者も共通の回答者であるため、ここでは受講者の属性に関する質問の回答結果は割愛する。

［質問①］講座の長さ（60分～70分）は適切でしたか。

「適切」の回答が79%と多かった。「長すぎる」と「少し長い」を合わせて16%となった。一方、「少し短い」が5%あった。大部分の回答者にとって、講座の長さは適切であったと言える。しかし、「長い」と感じた受講者や逆に「短い」と感じた受講者も一定数いることが分かった。これらの理由は、以下の質問2の回答から見えてくる。以下の回答によれば、事前タスクや特設講座、評価アンケート、リフレクションシートなどの講座以外にも取り組むことがあり、そのことが講座全体の長さを否定的に捉えている要因の一つと考えられる。また、業務の多い時期の講座受講は負担になり、そのため「長い」と感じたようだ。一方、「短い」と感じた受講者は、授業研究形式の講座では、授業ビデオを短く編集しており、それをもっと長く見たかったり、それについてもっと協議をしたかったりと感じたようだ。



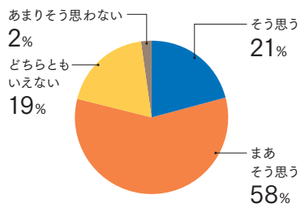
［質問②］質問①で「適切」以外を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

＊代表的なコメントのみ掲載

- 60分間という設定時間を過ぎてしまっているところがあった。
- 一回の講座の長さは、ちょうど良かったです。1度に長く研修があるよりも、継続して何回かあり、良かったです。
- 夏休み期間に他の研修と重なり、参加が難しかったです。学校行事と重なると参加が難しかったです。
- 業務に余裕のある時には参加するのに苦でない長さでしたが、成績処理など忙しい時期には、できるだけ内容が厳選され、45分程度で終わるとありがたいと感じました。
- 講義の開始が6校時途中からでした。そこから、子供たちに自習を指示したり学習タイム（独自の時間割で6校時終了後に15分程度のミニ学習タイムがあります）を補充の先生にお願いしていました。できれば、子供が下校してからの時間（勤務時間内に終了）だとありがたかったです。
- 講座が1時間程度でも、事前に動画を見たり、事後アンケートの提出があったり、結局かなりの時間をこの研修のために費やした。授業や他の仕事に影響がある。
- 講座回数が多く、事前タスクや特設講座もあり、受講するのがとても大変でした。
- 授業が短く編集されているところがたくさんあり、見たいと思うとこれがなかったことがあり、授業研究の時はもう少し長くてもいいかなと思うことがあった。
- 授業研究・協議は時間が足りなかった。
- 内容はとても勉強になるのですが、もう少し短くても良いと思いました。

［質問③］講座の実施時期は適切でしたか。

「そう思う」と「まあそう思う」を合わせて79%であった。大部分が講座の実施時期を「適切」であると感じていたことが分かった。しかし、「どちらともいえない」が19%あった。これは質問4の回答から見えてくるが、今回全10回の講座が7月から12月と長期間であったこともあり、受講者によっては適切であった時期とそうではなかった時期が両方含まれていたことが肯定的な回答につながらなかった要因の一つのようである。



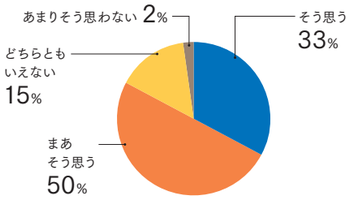
［質問④］質問③で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

＊代表的なコメントのみ掲載

- 長期休業中に研修があった方がありがたかったです。実施回数も多くて大変でした。
- 連続した週があったので、連続しない方がよい。 また、感染状況により今年度は12月に学校行事が集中したこともあり、この出張を優先できないことが少なくなかった。

［質問⑤］講座の実施時間帯は適切でしたか。

肯定的回答が合わせて83%あった。概ね適切な時間帯であったようだ。「どちらともいえない」は15%あり、「あまりそう思わない」は2%あった。否定的回答はあまりないが、質問6の回答から肯定とも否定とも言い切れない理由が散見された。

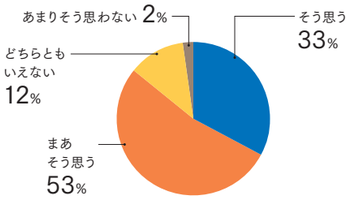


［質問⑥］質問⑤で「あまりそう思わない」か「全くそう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 休憩の時間にかかる学校もあるため。
- 子供たちがまだいる時間帯の開講だったので、間に合わないことがありました。
- 時間が遅かったことは参加しやすい反面、勤務時間を超えることにもつながる。
- 放課後に、となればこの時間にならざるを得ないと思います。

［質問⑦］拠点校で講座を受講された方にお聞きします。講座の受講は適切でしたか。

肯定的回答が合わせて86%あった。拠点校での受講は概ね適切であったようだ。「どちらともいえない」は12%あり、「あまりそう思わない」は2%あった。

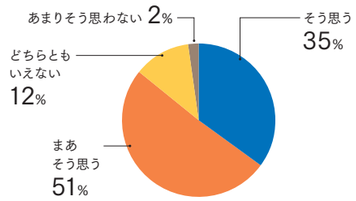


［質問⑧］質問⑦で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 拠点校の参加に関しての負担は大きかった。
- 昨年度と同じ内容が多かったので。

［質問⑨］拠点校以外（ご自分のPCやスマホなどを使って）で講座を受講された方にお聞きします。講座の受講は適切でしたか。

肯定的回答は合わせて86%であった。拠点校以外での受講についても概ね適切であったようだ。「どちらともいえない」は12%あり、「あまりそう思わない」は2%あった。ただ、質問10への回答にあるように、拠点校以外からの受講者は他の受講者とのディスカッションや講師に質問したりできないため、受講が受け身になってしまうことは否めない。

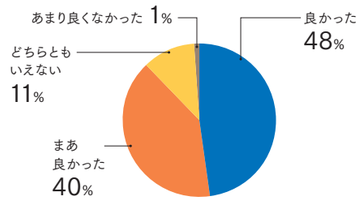


［質問⑩］質問⑨で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- どうしても受け身になってしまった。意見を掲示板にのせるなどするといいのかもしれない。

［質問⑪］Zoomの映像はいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて88%となった。「どちらともいえない」は11%あり、「あまりそう思わない」は1%あった。
Zoomの映像は概ね適切であったようだ。しかし、質問12の回答からわかるように、若干の映像トラブルがあったことは否めない。

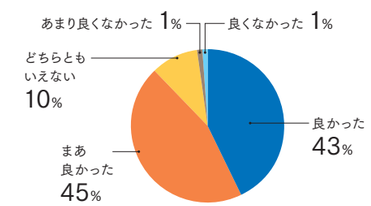


［質問⑫］質問⑪で「あまり良くなかった」か「良くなかった」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 途中で固まった。
- 途中で止まってしまうことがあり見られない箇所があった。

［質問⑬］Zoomの音声はいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて88%であった。「どちらともいえない」は10%あり、否定的回答は2%あった。Zoomの音声に関しても概ね適切であったと言える。しかし、質問14への回答から若干の音声トラブルがあったようだ。ただ否定的回答数の少なさから判断して、これは全て会場に当てはまるというよりも、特定の会場でのトラブルと推察される。つまり、各会場のインターネット回線の環境に左右されたことを除外できない。

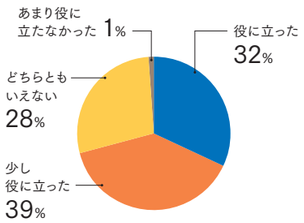


［質問⑭］質問⑬で「あまり良くなかった」か「良くなかった」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 音量が小さい。
- 聞き取りにくい時があった

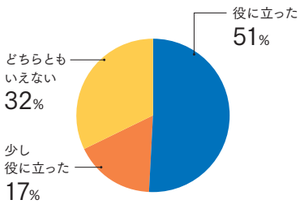
［質問⑮］
本事業で作成したWebページはいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて71%であった。「どちらともいえない」が28%とこれまでの回答の中ではかなり大きな値となった。しかし、否定的回答はわずかに1%に過ぎなかった。これは、多くの受講者はWebページを活用し、それについてある程度満足したが、一定数の受講者はあまり活用しなかったのではないか。そのため、判断しかねるという回答が多かったのではないかと推察できる。



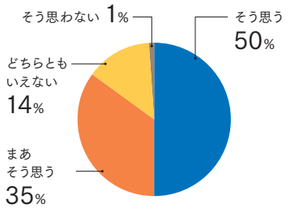
［質問⑯］
拠点校で講座を受講された方にお聞きします。本学からお貸しした機器（テレビ会議システム、iPad、ICレコーダー）はいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて68%であった。「どちらともいえない」が32%とこれまでの回答の中では最大値となった。これに関しては、受講者全員が本学からの貸与機材を一様に使用したわけではなく、そのために判断できなかったと推察できる。



［質問⑰］
全10回の講座の中に「授業研究」の講座（第7回～第10回）を入れたことは適切でしたか。

肯定的回答は合わせて85%となった。「どちらともいえない」が14%あったが、否定的回答はわずかに1%であった。以下の自由コメントにもあるように、実際の授業をビデオに収めた授業研究が実りの多いものであったようだ。



自由コメント　＊代表的なコメントのみ掲載

肯定的回答

- 大変すばらしい講座を受講させていただき、ありがとうございました。学んだことを生かし、子供たちが意欲的に学習に取り組むことができるよう、努めてまいりたいと思います。
- 明海大学さんの工夫がたくさん込められた研修で本当に良かったかと思います。感謝いたします。
- 事前課題や事後課題も含めて、この講座を受ける時間を毎回楽しみにしておりました。
- 学ばせていただいたことを授業に生かしていくと、子供たちが楽しそうにしているのを見てさらに授業研究に励まなければと感じました。
- お忙しい中、他県の取組を実際に視聴しながら講習して頂き感謝します。今回の講義を本校の研修に生かしていきたいと思います。
- 講座内容について情報を共有して、今後の外国語活動に役立てていきたいと思います。
- 外国語の授業で、オールイングリッシュを目指せるように自分も勉強して行かないといけないと思いました。他県の先生方の取組を知ることができてよかったです。
- 講座を受ける前は、外国語の授業の仕方に不安を感じていました。今回の講座を受けて、授業の進め方や内容、授業を行う上での心構え、姿勢など、たくさんのことを学ぶことができ、以前よりも安心して授業を行うことができるようになりました。
- 「外国語」が教科になったときから低学年の担任をすることが多く，今年度の外国語の授業が不安でした。授業は外国語専科の先生がいらっしゃるので心強いですが，自身の力不足を感じる日々でした。勤務しながら外国語の研修に行く機会はほとんどないので今回の研修は大変ありがたかったです。子供たちと一緒に「外国語を楽しもう」という気持ちをもつことが大切だという講師の先生の言葉に励まされている毎日です。
- 昨年度も本講座を受講しました。専科として複数校兼務していて、ある程度授業を牽引する立場にいるものの、あまり自信はなく、もっと他の先生方から学びたいと常々感じています。でもなかなか他校の取組を拝見する機会が無く、今年度本講座に授業研究の内容があったこと、とてもありがたかったです。
- 自校の行事や研修の関係で、前半のみの参加となってしまったが、外国語（活動）の指導について基礎的な所から丁寧にお話ししていただきありがたかった。
- 自身の区市町だけでなく、他県の外国語の実施状況もわかり、大変参考になりました。今年度学んだことを来年度外国語活動に携わる学年になった時には、大いに活用していきたいです。また、あまり携わらない学年だった場合は、支援や助言ができるようにしていきたいです。
- 他校の授業を見ることができ、また更なる提案を実演していただいたのが、とてもわかりやすかったです。
- 大変勉強になる講座ばかりで授業の改善に役立たせることができました。これからも学んだ事を生かして楽しい授業づくりをしていきたいと思います。
- 様々なことを学べた有意義な時間となりました。学んだことを随時取り入れ，よりよい授業作りに務めていきます。貴重な学びの機会をありがとうございました。

改善を求める回答

- 後半の授業研究は、講師の先生方からの助言をたくさんいただくために、時間を十分に確保する必要があったかなと思います。研修時間（勤務時間）を超えることが多かったのは残念でした。
- 講座外での課題（今回では、特別講座など）がなるべく少なくなる、もしくは希望者のみ（質問等ある方のみ）になると、より多くの方が参加されるのではないかと思いました。
- 授業を動画にすること、その切り取り方、難しいと感じた。参観の視点があっても見るところは多様だからである。一方、焦点化しているからこそ、見えてくるものがあった。

VI 講座全体の総括

これまで、各講座評価アンケートと全講座総合評価アンケートの結果と分析を提示した。これらを踏まえて、以下に、今年度、明海大学が受託して実施したMEIKAI-JOEプラス小学校外国語科等講座の全体総括をまとめる。

1　参加者属性

①足立区からの参加者が40%を占め、最大であった。その次に、妙高市が20%、横手市18%、浦安市14%、そしていわき市8%という結果であった。

②「5・6年学級担任」が全体の25%で最大であった。次に、わずかな差で「3・4年学級担任」が24%で続き、さらに「他教科専科・アドバイザー・その他」が1%差の23%、「1・2年学級担任」が16%、「英語専科」が8%、最後に「管理職」4%となった。小学校で「外国語科」や「外国語活動」を指導する立場の「5・6年学級担任」と「3・4年学級担任」がほぼ全体の半分を占める割合になるほど受講していたことが分かった。この結果は、今回の講座を今まさに必要とする現場の教員が受講していたことを示している。

③外国語（活動）指導経験年数「0～3年」が最大の54%を占めた。次に、「4～6年」が23%、10年以上が15%、「7～9年」が8%と続いた。この結果から、経験の浅い受講者が大半を占めたことが分かった。この事業のそもそもの目的は、比較的外国語の指導の経験が浅く、自信を持てない教員に講座を通して指導の理念と基本的な指導技術を身に着けてもらい、外国語の指導に対して自信を持ってもらうことであった。そのため、今回の受講者は主催者側が望んでいた受講対象者であったと言える。

④TT指導経験は上記とほとんど同じであった。

2　第1回から第6回講座（講義形式）評価アンケートから（以下、括弧内は肯定的評価の数値である）

①講座の内容を理解できたかに関して、第1回(93%)、第2回(92%)、第3回(89%)、第4回(98%)、第5回(98%)、第6回(95%)とどれも高い数値となった。

②講座の内容が現場のニーズに合っていたかに関して、第1回(84%)、第2回(89%)、第3回(89%)、第4回(97%)、第5回(97%)、第6回(87%)が肯定的であった。特に第4回と第5回が特に高い数値となった。第4回と第5回は両方とも「聞くこと・話すことの指導」に関する講座であった。このテーマは外国語と外国語活動の両方の授業に関わるものであるため、小学校の教員にとって最も関心のあるテーマであることがアンケートの結果からも容易に推察できる。

③講座内容が適切であったかに関して、第1回(66%)、第2回(53%)、第3回(67%)、第4回(76%)、第5回(72%)、第6回(61%)であった。第2回が若干低い。

④講座で提供された資料が今後活用できるかに関しては、第1回(84%)、第2回(92%)、第3回(86%)、第4回(92%)、第5回(95%)、第6回(88%)とどの回も評価が高い。特に第2回と第4回、第5回は高い。

⑤講師の説明のわかりやすさに関しては、第1回(92%)、第2回(90%)、第3回(89%)、第4回(98%)、第5回(99%)、第6回(90%)であり、どの回も高評価であった。特に第4回と第5回はかなり高値であった。

⑥講座前タスクに関しては、第1回(71%)、第2回(80%)、第3回(82%)、第4回(83%)、第5回(86%)、第6回(82%)であった。どの回も高値であるが、第1回が若干低いのは、事前タスクの90分のビデオ視聴が長いと感じた受講者がある程度いたからと考えられる。

⑦講座中タスクは、第1回(83%)、第2回(91%)、第3回(86%)、第4回(95%)、第5回(99%)、第6回(93%)となり、どの回も講座前タスクよりも高値であり、タスクベースの講座が評価されたと考えられる。特に、第2回と第4回、第5回、第6回はかなり高値である。

⑧総合的満足度は、第1回(83%)、第2回(90%)、第3回(82%)、第4回(96%)、第5回(98%)、第6回(91%)とどの回も評価は高かったと言える。特に、第4回と第5回が高評価だった。

⑨次回も同じような講座を受けたいかに関しては、第1回(89%)、第2回(83%)、第3回(92%)、第4回(85%)、第5回(75%)であり、どの回ももっと学びたいという意見が大部分を占めた。

⑩クロス分析の結果から、「内容理解度」や「内容のニーズ適応度」、そして「講師の説明」は「総合的な満足度」に大きく影響していることが示唆された。

3　第7回から第10回講座(授業研究)評価アンケートから（以下、括弧内は肯定的評価の数値である）

①「授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。」に関しては、第7回（96%)、第8回(96%)、第9回(95%)、第10回(87%)となり、どの回も高値であった。

②「動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。」に関しては、第7回(95%)、第8回(96%)、第9回(96%)、第10回(96%)となり、どの回も高値であった。

③「講師の指導・助言は役に立ちましたか。」に関しては、第7回(98%)、第8回(96%)、第9回(99%)、第10回(96%)となり、どの回も高値であった。

④講座の総合的な満足度に関しては、第7回(95%)、第8回(94%)、第9回(98%)、第10回(92%)となり、どの回も高値であった。

⑤クロス分析の結果から、「授業ビデオの言語活動」や「他の受講者からのコメント」、そして「講師からの指導・助言」は講座の「総合的な満足度」に大きく影響を与えていることが示唆された。

4　その他(自由意見の記述から)

①事前タスクと事後タスクの分量についての記述があった。特に、事前タスクについては、適切な分量とすることが必要であると考える。

②事後タスクについても負担感があるとした記述があった。事後タスクのリフレクションシートは、受講者本人の講座の振り返りのために不可欠であり、項目も属性を除けば2、3項目である。また、事後タスクの講座評価に関するアンケートについては、8問程度のものをGoogle Formで回答するものであり、講座運営には必要な項目であると考える。

5　全講座総合評価アンケート

①講座の長さ

令和2年度の事業では90分としたが、昨年度の受講者のご意見を取り入れ、令和3年度の本事業では30分短縮して60分とした。この結果、「適切」が79%であり、「長い」との回答が16%であった。一定程度、講座を充実したものとするため、講義中心ではなく協議の時間や講師との質疑応答の時間を確保するためには、60分は適切であったと考える。

②講座の実施時期

肯定的回答が79%であった。3学期は学校にとっては学年末、学年始めの準備等で避けることを考えた。また、本事業委託決定から全10回の実施を実施することとなると、多くの月で2回講座を実施することを避ける必要があった。このため、夏季休業中に、連続する2日間で一日2講座を設けることとした。このことに関する肯定的意見もあった。ただ、学期中に実施する講座と講座の間隔については、あまり短くならないように配慮する必要がある。

③講座の実施時間帯

肯定的回答が83%であった。小学校における授業に支障があってはならないとの判断で、放課後の15:30からの講座開始としたことに理解が得られたと考える。多くの学校では勤務時間が16:30までとしている実態を勘案すると適切であった。ただし、個々の学校における休憩・休息の時間に係る調整は困難といえよう。

④拠点校での講座の受講

肯定的回答が86%であった。この形態は令和2年度の事業で導入した。受講者同士のディスカッション、グループワーク等を実施するためには、拠点校に集まり講座を受講する形態は望ましいものと考える。

⑤拠点校以外での講座の受講

肯定的回答が86%であった。この形態も令和2年度の事業と同様に取り入れたが、やはり、移動時間等時間的な制約があり拠点校に集まれない受講者のためにはこの形態も必要であると考える。ただし、この形態による参加の場合は、本講座の配信がZoomWebinarのため、視聴するだけの講座参加となることから課題もある。

⑥Zoomの映像・音声

肯定的回答がそれぞれ88%であった。特に課題はなく実施できたと考える。ただし、全10回の講座回の中では、ある拠点校では画像が固まったり、音声が途中で途切れることもあったことは事実である。拠点校における機器の操作上の課題があったかは詳細を検討する必要があるかもしれない。

⑦本事業のWebページ

「役にたった」と肯定的回答は71%であった。ただし、作成したWebページについて28%の受講者が評価について「どちらともいえない」と回答している。このことは、多くの受講者は積極的に利用して講座前・講座中・講座後の資料を活用していると考えられ一方、「どちらともいえない」と回答した受講者の多くは、あまり活用していなかったのではないかと推察できるかもしれない。

⑧全講座10回の中に「授業研究の講座」を入れたこと

肯定的回答が85%であり、高い評価であった。他県の取組を実際に視聴して講習に参加することを評価する自由記述が多数あり、今後もこうした講座を取り入ることを受講者が求めていることが分かった。

6　全体総括

令和3年度に実施したMEIKAI-JOEプラス小学校外国語科等講座については、令和2年度に実施した講座に関する連携教育委員会及び講座受講者からのご意見を踏まえて、その構成や内容について改善を行った。

具体的には、令和2年度の講座受講者の多くが、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと(やり取り)」、「話すこと(発表)」、「書くこと」の各領域の具体的な活動事例の研修や、実際の授業映像を活用した講座（実際の授業実演に対する協議・指導・講評）による研修を望んでいることが分かった。こうしたことから、令和3年度の事業では上述の5領域における活動事例を学ぶ講座回を設定した。その上で、各領域においてどのような活動事例を取り扱ってほしいのかなど細部にわたり、連携教育委員会に対してアンケート調査を行い、その調査結果を踏まえて各講師が講座の構成や内容を定めて講座を実施した。このことにより受講者が「明日の授業」にすぐに生かせる、いわゆるhands-on研修としての位置付けで講座を受講できるようにした。

また、講義、協議、ワークショップや講師からの指導助言を中心とした講座回の他、実際の授業映像を活用した講座として授業研究の講座回を設定した。ここでは、各区市の代表1名の教員が夏季休業後、それまでの講座で学んだ研修内容を踏まえて行った授業に基づく授業研究の講座回とした。具体的には、受講者全員が授業映像を見て、区市の垣根を超えて協議する形式とした。授業終了後から勤務時間内で講座を実施する必要があることから、45分間の全授業動画視聴ではなく、15分に圧縮した動画視聴とした。この授業動画については、事前に各区市の全受講者が、Webページ上で視聴することも可能にした。実際の講座回では、担当指導主事の司会の下、受講者は改めて15分の動画を視聴し、授業者の自評を聞き、動画に納められ授業について、事前に提供されている指導案を踏まえて協議を行い、最後は講師からの講評を聞く構成とした。

この授業研究の講座回については、受講者からの満足度は予想通り極めて高く95%の方から肯定的評価を得るものとなった。自由意見では、「他校（他地区）の先生方の協議内容を聞くことで視野が広がった」、「授業を実際にやってみることが一番の研修となることを改めて実感した」、「コロナ禍の中でなかなか他の先生方の実践が見られない中、とても貴重な機会をいただいたことに感謝する」、「外国語の授業研究を実際に見ることはあまりなかったので良い機会となった」、「実際に授業を参観することで、これまでの講義内容がどのように生かされている

か参考となった」、「聞くこと、話すことの指導について、実際に授業を見せていただき大変参考となった」、「実際の授業動画がとても参考となった。教師からの積極的な英語の発話によって、子供たちも生き生きと活動できることがよくわかりました」などの感想が寄せられており、満足感の高いことが証左として示されている。やはり教師は授業で勝負するためにも、自分の学校にいる他の教師、他の学校の教師、他地区の教師の授業をより多く参観し、こうした授業研究を通して、自己の授業に関して磨きをかけることを大事にしていかなければならないと考える。

なお、各講座の資料についてであるが、本事業で開設した「MEIKAI-JOEプラス Webページ」上に全てアップロードするようにした。各回とも、事前タスク（PPTや映像資料など）については講座開始1週間前には提示し、受講者が事前に学ぶことができるようにした。しかしながら、事前課題の量については、受講者の中では多すぎたという指摘もあり、このことは真摯に受け止めたい。講座中に使用した PPTや映像資料及び事後タスクについては講座実施後少なくとも10日以内にWebページ上にアップロードして、受講者が振り返りを行うことができるようにした。

いずれにしても、本事業の目的として示した、「多くの学級担任が抱えている小学校外国語科・外国語活動の指導に対する不安感を払しょくし、授業に積極的に取り組む意欲を向上させるとともに、円滑に指導できる指導力及び英語力を養成する」ことに効果があったものと信じる。

Ⅶ 教育委員会・受講者等の総括

1. 東京都足立区教育委員会総括

足立区教育委員会学力定着推進課（以下、区教委と表記）では、英語教育の推進を施策の重点項目の一つとして、「英語大好き小学生の育成」を掲げ、7年間を見通した足立区の英語教育モデルを推進している。今年度も年間3回の小学校外国語活動・外国語科研修を柱とし、映像指導資料「領域別目標の実現を目指した指導と児童の学習状況」を作成するとともに、「読むこと」及び「書くこと」の指導と評価の一体化、外国語科における小中連携のポイントについて、オンライン及びオンデマンド形式で取り組んだ。

また、英語が堪能な日本人である小学校英語教育アドバイザー（以下、アドバイザーと表記）を全69校の小学校に配置するとともに、今年度より希望する小学校にはALTを派遣することで、学級担任だけでなく英語専科教員による外国語活動・外国語科の授業づくりを支援している。このような状況の中で取り組んだ本講座について、足立区の実践を踏まえて総括する。

【成果】

(1) 充実した講座内容と成果の還元

本講座には拠点校として1校、拠点校外でのZoomによる参加校として20校の合計21校から、延べ617人が参加した。参加した学校数は昨年度より4校多く、本区においても本講座に対する需要の高さが伺えた。本講座では、学習指導要領で示される領域ごとの指導と評価のポイントについて、体験的に理解できる充実した内容であったことが受講者アンケートから伺えた。

次に、昨年度本区が課題とした「研修成果の還元」について述べる。拠点校では質疑応答の時間が設定されていたため、代表者が感想を述べたり疑問点を質問したりすることで、受講者全員が研修内容を深く理解することができた。また、拠点校外でのZoomによる参加校については、明海大学から区教委に送付される区内受講者のリフレクションシートから受講者の状況を把握した。リフレクションシートから課題を整理し、アドバイザーによる学校訪問時の支援に反映させることで成果を還元することができた。

(2) 理論と一体化した授業研究

今回の講座は、英語教育に関する理論編が6回、理論を踏まえた授業研究が4回で構成された。授業研究は理論編を踏まえて行い、研究協議は理論編を担当した講師が指導・講評を行うことで、理論と実践が結びつき、一層理解を深めることができた。本区の実践は「聞くこと・話すこと」でご講義いただいた佐藤教授の講座を踏まえたものである。本区では、児童が伝え合う表現を広げたり、内容を深めたりすることで、より一層充実した言語活動を行うことを目指している。そのために、児童がペアで交流する際、「伝えたいけれど言い方が分からない」ことについて学級全体で共有し、既習事項を用いて言い換えたり自分で調べたり、指導者に尋ねたりして解決させ、もう一度交流活動を行うことで「自分の伝えたいことを伝える」言語活動に取り組んでおり、本区の研究授業にも取り入れた。佐藤教授からは、「児童の実態を踏まえた魅力的な指導計画であり、大変チャレンジングな取組である」と評価をいただいた。さらに、「新出の語句や表現を全体で共有してから言語活動に取り組むことで、より多くの児童が自信をもって聞いたり話したりすることができる」と具体的なご指導をいただいた。このように、学んだ理論と実践が一体となる授業研究と研究協議の形式は、受講者にとって明快であり実践的かつ深い研修となった。

【課題】

課題としては、拠点校外でのZoom参加校における研究協議が十分に確保できなかったことが挙げられる。拠点校では限られた時間ではあったが、研究協議の視点に基づき、各自が考えた内容をグループで交流し、最後は全体で共有するという形式で研究協議を進めた。受講者は活発な研究協議を通して自身の疑問を解決したり、様々な意見を聞いて考えを整理したり、深めたりすることができた。一方、拠点校外でのZoom参加校では、校内で複数の教員が参加していない限り、そのような機会を設定できなかった。研究協議については、本区のオンラインシステムを活用してオブザーバーとして拠点校の研究協議に参加したり、状況によっては意見や感想を言ったり、質問をしたりすることもシステム上は可能であった。今後の研修等については、研修の目的やその時の状況に応じて様々な方法を適宜検討し、受講者にとって最適な研修方法を構築していく。

2. 東京都足立区受講者感想

今年度、本校からは1~6年の各学級担任、専科教員、特別支援学級担当教員等、校内で約20名の職員が参加させていただいた。Zoomによる参加で、接続など不安な部分もあったが、回を重ねるごとに拠点校のメリットを感じることができた。

前半では、講師の方々から外国語活動・外国語科の指導にあたってのポイントを明確にしていただき、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「書くこと」の指導と評価の事例を他県の先生方と共に学ぶことで、「明日の授業」で生かせる学びができた。また、受講者同士でのアクティビティや協議を行うことで、校内では見えなかった疑問点や改善点を見いだすことができた。

後半では、各区市で実践された授業を観た上での研究協議を他県の先生方とも行い、同時に講師の方から専門的なご指導を受けることで、考えを整理し深めることができた。

今回の研修を通して学んだ知識を実際の授業に生かしながら、子供たちの「できる」「わかる」体験を大切にし、さらに伸ばしていきたいと考えている。貴重な機会をいただいた明海大学及び講師の方々に、改めて感謝申し上げる。

足立区立西新井第二小学校　副校長　富岡 将人

3. 千葉県浦安市教育委員会総括

本市は、浦安市教育振興基本計画（浦安市教育ビジョン）が掲げる基本理念「学び　育み　認め合い『未来を創造する』人づくり」のもと、設定された4つの目指す子供像の実現に向け、小中学校の教育を推進している。目指す子供像のひとつ「豊かなかかわり(参画・交流・郷土愛・多文化共生)」では、適切に表現する力を身に付け、人や社会に積極的に関わるとともに、我が国やふるさと浦安に誇りを持ち、多様な文化を大切にする態度・能力を高める教育の充実を進め、国際理解教育や英語教育を推進している。

小学校1・2年生においては、特別の教育課程を編成し、外国語活動を実施している。「浦安市外国語活動学習活動プログラム」を活用しながら、児童の発達段階に応じた外国語による様々な活動を充実させ、外国語に慣れ親しむだけでなく、3年生からの外国語活動への滑らかな接続を目指している。

また、市立全小中学校に、外国語指導助手（ALT）を派遣し、担任、授業者、ALT の指導力向上に努めるだけでなく、児童生徒の多文化理解及び英語によるコミュニケーション能力の育成を図っている。

【成果】

昨年度の課題を踏まえ、今年度の参加者については、可能な限り外国語科主任や英語専科以外の教員が、市立全小学校から1名以上参加する形をとった。また、第2～5回講座については、市主催の「夏季教育実践講座」を兼ね、本講座の参加者に加え、外国語科主任や中学校教員が参加できるようにした。これらにより、より多くの教員が研修の機会を設け、研修内容を全小学校及び中学校教員に広めることができたと考える。

講座全体では、学習指導要領の趣旨と、5領域の細かな目標、内容について研修することができた。中でも、第7回～第11回講座では、それまでの研修内容を踏まえて、先生方が授業を実践し、学校や自治体の枠を超えて協議できたことは大変有意義であった。

協議の場面では、各校の授業の様子や困り感を共有しながら、視聴した授業について意見を交換し合うことができた。また、各自治体の先生方と意見交換したり、講師の先生方から御指導をいただいたりする事で、授業に対する不安感の解消や、授業を行う上での自信に繋げることができたのではないかと思う。

今年度、外国語担当指導主事が外国語活動・外国語科の授業を参観する機会において、講座での学びを踏まえた授業を展開している例がいくつか見られた。授業者の視点として大きく変わったと感じることは、言語を使用する「目的」「場面」「状況」を意識した授業が増えていることである。ALTとのSmall Talkでターゲットとなる表現を児童に十分聞かせることで、言語の使用場面を児童に意識させようとする授業者が増えたことは、本研修の大きな成果であると考える。

【課題】

今後の課題は、研修での学びを学習評価へとつなげていくことであると考える。昨年度と今年度の研修をとおして、学習指導要領の趣旨についての理解は深まりつつあるので、指導と評価を一体化できるような評価計画、評価規準を設定できるようにしていく必要があると考える。

具体的には、①学年の目標の設定、②5領域の評価規準の設定、③単元の目標・評価規準の設定について再確認し、それらを踏まえて、評価の場面を意識した④単元の指導計画の作成である。見通しをもち、児童の学習改善につながり、かつ教師の指導改善に繋がる学習評価にしていけるようにすることが今後の課題である。

4. 千葉県浦安市受講者感想

講座では、実際にT1、ALT、児童のやり取りの方法を見ることで、授業のイメージが膨らみ、すぐに自身の授業につなげられました。学んだ中から、特に次のことを実践していきたいと思っています。

1つ目は「ぐるぐるChant」です。音声と映像で十分慣れ親しんだ後は、T1だけが発音するところALTだけが発音するところ、児童だけが発音するところを変化させながら、興味関心を持続させ、単元の中で何度も繰り返し慣れ親しむ活動を行っていきたいと思います。

2つ目は、児童を巻き込んでいくSmall Talkです。やり取りの中にどんどん児童を巻き込んでいき、会話に十分に慣れ親しむことで、課題活動の理解を深め、多くの児童が英語を使ったやり取りができるようにしたいと思います。

浦安市立東野小学校　西村 隼多

講師の先生のご指導がとてもわかりやすかったです。どうすれば児童が英語を話すことに自信をつけられるのかというポイントを具体的に話していただき、とても参考になりました。特に心に残っていることは、子供の間違いに対して、何気なく直すことです。これまで、児童が間違ったときに、児童の回答を否定すれば児童が自信を失くしてしまうだろうし、肯定すれば正しい表現を伝えることができなくなってしまうため、葛藤がありました。そして、児童に自信をつけさせることを優先し、細かい間違いは許容していました。しかし、例えば、I like egg.と言ったら、Oh, you like eggs! のように、自然と言い直していけばよいことがわかり、実践しています。

浦安市立日の出南小学校　小西 了太

今年度この講座を受講して、講師の先生からの興味深いお話を聞くことができたり、実際に先生方の授業を見させていただいたりしたことがとても良かったです。

授業を見て特に勉強になったのは、チャンツのいろいろなやり方を知ることができたことです。また、ジェスチャー

をつけることにより、内容がより児童に伝わりやすくなるということもわかりました。どの先生方も、何度もくり返して単語や言葉の練習をしているのを見て、くり返しの大切さを感じました。

毎回、次の授業からすぐにでも取り入れようと思うことが多くありましたが、まだ実践できていないこともあるので、これまでの資料を振り返りながら、よりわかりやすく、楽しく外国語活動ができるようになりたいと思います。

浦安市立美浜南小学校　髙木 絢子

5. 秋田県横手市教育委員会総括

本市では、横手市立朝倉小学校を拠点校とし本研修を実施した。参加者は、拠点校の教職員18名、市内小学校教員13名、専科教員2名、教育専門監1名、朝倉小で指導する中学校教員1名の計35名である。そのうち、外国語活動・外国語の指導経験が5年未満である小学校教員の割合は88%であり、理論から実践までを系統的に学ぶことのできる本研修の効果は大きかったといえる。拠点校である朝倉小学校は、今年度の研究重点教科等を「外国語活動・外国語」に設定し、全教職員で一丸となって研修を深めた。また、昨年度と同様に、市内各小学校から参加者を募ることで、本研修の成果を横手市全体で享受し各校における外国語教育のさらなる充実を目指した。

本市では、各講座の実施日や研修内容・形態に応じて、3通りの方法で研修を実施した。1つ目は、参加者が各勤務校で受講する〔自校型〕である。市教委と参加校間で、事前接続テストを行うことで、当日は不具合なく実施することができた。2つ目は、参加者全員が拠点校で受講する〔集合型〕である。参加者全員が顔を合わせ、研修の趣旨や目的を共有し、一体となって受講した。充実した集合型研修の実施により、以降の講座では受講場所が異なっても、参加者が同じ目標・熱量をもって意欲的に研修を進めていくことを可能にした。3つ目は、拠点校での集合型を基本としつつ、拠点校への移動に時間がかかるなど配慮が必要となる参加者には自校で受講することを可能にする〔組合せ型〕である。

集合型で受講した参加者からは、「他の参加者と共に協議をし、意見交換することで多くの学びがあった。毎回の研修がとても楽しみになっていた。」という感想が寄せられた。また、自校型で受講した参加者からは、「集合し協働して学ぶことに勝るものはないが、拠点校から遠いからと諦めずに受講することができて大変ありがたかった。自校型での研修効果も十分にあり、今後の研修参加への期待が高まった。」との感想が寄せられた。今回の試みは、多様な研修形態の担保により、希望する研修をより受講しやすいものに構築できる可能性と、そのことによる参加機会の広がりという価値ある認識につながった。

講　座	実施日	研修形態	実施方法
第1回・第6回	授業日	講義型	自校型
第2-5回	夏季休業中	ワークショップ型	拠点校での集合型
第7-10回	授業日	協議型	組合せ型（拠点校での集合型＋自校型）

【成果】

今年度の講座は、第1回から第6回の指導理論を中心とした内容と、第7回から第10回の授業研究に大別される。本市におけるそれら講座の成果について簡潔に記す。

⑴第1回から第6回講座（指導理論）

本市の研究と照らし合わせて、特に研修効果の高かったものとして、「読むこと・書くことについての指導の在り方」と「小・中・高等学校における指導の接続」が挙げられる。現学習指導要領により5・6年生の内容に加わったこの2領域においては、「何を」「どこまで」「どのように」指導するかについて、喫緊の研修課題となっていた。今回は学習指導要領で求められている指導内容を理解し、よりよい指導の在り方について学ぶ貴重な機会となった。今後も、指導と評価の一体化の実現、小・中・高のさらなる連携を目指し、本市全体での授業研究と研修の充実を図っていく。

⑵第7回から第10回講座（授業研究）

本市においては、「読むこと・書くこと」の講座を基に、第6学年の授業を提案した。特に書くことの資質・能力を子供たちがどのように身に付けていくのかを捉え、小学校段階での指導の在り方について参加者と共に考えていくために提案をした。「何を」「どのように」に関して、子供たちの姿から学び考えることができ、本市の参加者にとっても大変学びの大きいものとなった。講師の先生や他地区の先生方からも多角的な視点でご意見をいただくことができ、横手市全体の授業改善につながるものとなった。

約5ヶ月をかけて全10回の講座を受講してきた成果は、第7回から第10回講座（授業研究）における協議内容の質の高まりという形で表れた。本研修で学んできた小学校外国語教育における望ましい指導の在り方を基に、適切な視点でより自信をもって的確な協議がなされた。今後も、小学校教員の確かな指導力と高い協働性を生かし、温かく創造的な外国語教育の充実に向けて本市の施策を推進していきたい。

6. 秋田県横手市受講者感想

本研修では、「目標表現を繰り返して、児童に話している内容を推測させること」、「ジェスチャーの効果」、「スモールトークやチャンツの進め方」、「HRTとALTの役割分担やALTの活かし方」など、授業に活用できる実践的な指導方法を学ぶことができた。また、実際の授業動画から、授業の構成の仕方やALTとの関わり方、児童を巻き込んだ活動のあり方など、具体的な学習方法を参観できたことも大変参考になった。他県の授業を参観して協議したり指導助言をいただいたりという貴重な機会を与えていただいたことに感謝したい。これからも「外国語も他者理解のために使うツールの一つである」ことを忘れず、「伝えたい・知りたい」から始まるコミュニケーションを教師自らが楽しみながら、子供達に気付きや学びを与えられる指導を目指していきたい。

（横手市立山内小学校　佐々木 涼子）

本校は、横手市の拠点校として校長、教頭をはじめ全教員が参加させていただいた。昨年度も外国語活動・外国語科を重点教科の一つとし授業改善を進めてきたが、週に1回ないし2回の授業であり、実際に授業を行う教員とそれ以外の教員とでは、研究に対する温度差が否めなかった。しかし、今年度は10回の講座を全教員が受講し、たいへん有意義なものとなった。その内容が「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせた授業はどのように行うのか」等の講義型から、4技能のワークショップ型の講義、そして授業研究というより実践的なものまで多岐にわたったことも大きな要因である。受講を重ねるたびに、研究協議会や研修会の質も上がり、全員が共有できた。正に同じ土俵に乗り、同じベクトルで共同研究を推進できたと言える。さらに、他県の先生方の授業を参観することも刺激になった。場所や子供の実態は違えども、子供たちに力を付けようという志は皆等しく、熱のこもった先生方の授業から、また子供たちの「いい顔」から勇気をいただいた。このような貴重な研修の機会をいただいたことに心から感謝したい。

（横手市立朝倉小学校　西村 育子）

7. 福島県いわき市教育委員会総括

いわき市教育委員会として、小学校教員の外国語の指導力向上を目的とした教職員研修を実施しているところではあるが、全ての小学校教員が受講を終えるには数年必要となる。そのような中で、今回、本事業に参加させていただく機会を得ることができ、大学教授等による専門的な指導に加え、授業研究を通した他地域での取組についての情報交換を通して、外国語の指導力向上の一助とすることができた。また、今後の小学校外国語に係る研修の在り方についても、示唆を得ることとなり、大変、有意義な時間とすることができた。

【成果】

本事業の研修内容や実施方法において、成果と考えられる点は次のとおりである。

① 毎回の講座が1時間で設定されており、また、講座の時間帯も放課後の時間に設定されているため、参加しやすい設定となっている。

② 講座の内容が、前半はテーマをもとにした講義を中心とし、後半は授業研究をもとにした協議を中心としており、知識・技能と実践上の課題等に対する知見を習得することができ、研修者自身の今後の授業づくりに役立つ講座内容となっていた。

③ 大学教授等の講義では、日頃悩んでいる課題について具体的に指導助言をいただくことができ、授業づくり及び授業改善に向けた視点や留意点を学ぶことができた。

④ 授業研究を通した研修では、他地域の先生方も同じ苦労や悩みを抱えながら、果敢に授業に挑戦している姿を拝見することができ、授業づくりへの意欲を高めることができた。

⑤ オンラインによる研修のため移動時間がないことに加え、拠点校（市総合教育センター）に集合して研修できない場合でも所属校で参加できるため、計画通りに研修を行うことができた。

⑥ いわき市については、拠点校以外（所属校）をサテライト校と位置づけ、拠点校に集合できない場合の研修として実施した。視聴のみとなってしまう一方で、所属校で複数の教員による研修も可能となるなどの利点も見られた。

⑦ 拠点校をいわき市総合教育センターとしたことで、講座に参加する学校にオンライン研修の準備等の事務負担をかけることなく実施することができた。

⑧ 拠点校（市総合教育センター）に集合しての研修として市内63校に参加案内をし、市内12校からの参加を得ることができた。本講座で研修を積んだ教員が、自校に戻って成果を還元するなど、研修の広がりが見られた。

【課題】

本事業そのものについては有意義な研修であることを前提に、さらに効果を上げるための視点から考えられる改善点は次のとおりである。

① 月によっては、行事等のため講座への参加が難しい場合もある。講座の実施月と回数については吟味が必要と感じた。

② 授業研究をとおした研修については、協議の時間が短く、深まりの点で課題が残ると感じた。また、視聴する授業も編集された内容のため、前後のつながりや全体像が把握できなかったこともあり、これも深まりの点での課題の要因の1つと考えられる。やはり、45分間を通して授業を視聴し協議を行う方が、研修の効果があると感じた。そのためには、授業動画を事前課題として視聴しておき、それをもとに協議するという方法もあると考える。

③ 事前課題を全て行えずに参加した研修者もいたので事前課題については必要最小限とし、時間は最大でも1時間程度で終了できるくらいの内容にしてはどうかと考える。

8. 福島県いわき市受講者感想

外国語学習の心構えから授業実践まで幅広く取り上げており、大変、勉強になった。「言葉を使いながら覚えていく」、講座を通して、まさにその通りだと実感できた。「興味があれば難しくても覚えてしまう」からこそ目的・場面・状況などの課題設定が大事になると、講座を通して考え、その後の学習計画に生かすことができた。

外国語の授業を行うにあたり、不安に思うことや疑問に思うことを他の先生方と話し合う機会があまりないので、今後もこのような講座を開いて学ぶ機会を設けていただけるとありがたい。授業を5時間目まで行ってから参加できる研修は参加しやすい。

（いわき市立小名浜第一小学校　平樂 裕美）

授業実践の機会をいただけたことは、本当にありがたかった。外国語科で2学期の間に様々なアイデアを出し合い、授業についてたくさん検討することができ、大変貴重な機会となった。これからもこのような研修があれば、進んで参加したいと思う。いただいた講義資料は大切にし、今後に生かしていきたいと思う。

講座の中で丁寧にご指導いただいたことを、日々の実践ですぐに取り入れることができた。例として実際に行っていただいた場面を見られると、すぐに授業の中での生かし方のイメージをつかむことができ、大変ありがたかった。また、他地区の授業実践を見る機会もいただけて、大変貴重な学びの場となった。

講座の研修時間も適切だったと思う。また、3学期の外国語活動・外国語科への授業に大いに生かしていけるので、時期も良かったと思う。

（いわき市立藤原小学校　若松 彩香）

「読むこと」「話すこと」「聞くこと」「書くこと」の領域ごとに、講師の先生方から評価の在り方や具体的な指導方法を講義していただいた上で、それらを生かした授業の取組を参観・共有させていただくことができた。日頃の生活に結びつく内容で、自分自身の授業実践と照らし合わせながら、授業改善・向上を図ることができた。よりよい板書、授業内での評価の実際について、さらに深めたいと感じている。次年度以降、講座があれば、また、学んでいきたい。

他地域の先生方と意見交流ができることで、新しい取組や視点に触れることができた有意義な講座だった。校内から参加できたことで参加しやすく、参加したくなる理由の1つだった。

（いわき市立永崎小学校　渡部 冴也加）

9. 新潟県妙高市教育委員会総括

当市では、社会を生き抜く基盤となる資質・能力として重要な「外国語を使って何ができるようになるか」を子供と共に考え、実生活に役立つ「使える英語力」を身に付けることを目指している。そのために、保育園やこども園・小学校・中学校を一貫した「連続性のある英語教育」に取り組み、今年度8名の外国語指導助手を11校の小・中学校に配置することで、常に生きた外国語に触れ、外国語によるコミュニケーション能力の向上を図る人的環境の整備を行っている。また、3年に1回GTECを実施し、子供の実態把握や指導改善に生かしている。今回は、小学校教員の外国語指導力の向上に資するため、本講座に参加を希望した60名の教員（3名のALTを含む）が受講した。

【成果】

⑴ 参加教員のニーズに合った実施方法

本講座は、Zoomウェビナーを用いたオンラインで実施された。コロナ禍に対応した取組であると同時に、中央の見識のある講師から理論に基づいた実践的な指導を受けたり、他区市の参加者と交流しながら学んだりできたことは、大変貴重な機会であった。当市内の8校の小学校は広域に所在しているため、拠点校を2会場にすることで、ゆとりをもって参加しやすい環境を整えることができた。拠点校での参加は、他の参加者との意見交換や協議を通して、新たな気付きや学びを得ることができた。また、講座を実施後にホームページでアーカイブとして利用できるようにするなど、参加できなかった教員へのフォローや、再度視聴し学び直しを行いたい教員のニーズに応えていた。

⑵ 理論と実践を結び付ける授業研究の実施

今回は、第1~6講座を受け、区市ごとに授業研究を実施した。当市では、年度当初から計画されていた妙高高原南小学校の校内研修の授業公開を第8講座の授業研究と兼ねて実施した。授業動画の編集に当たっては、市教委だけではなく、授業者や管理職を含めた職員の意向を確認することを通して、授業に対する教員の思いや同僚性を発揮しながら授業研究を行っている姿を実感した。第8講座での協議では、講師や他区市の参加者から貴重な示唆を受けるとともに、授業の価値付けをしていただいたことで、外国語指導に対する

自信や今後の実践への意欲を高めることができた。以下に、授業実践の考察を記す。

◆スモールトークの設定

本時の課題に向かうために必要な表現が入ったスモールトークを聞かせるだけでなく、途中で子供を巻き込むスモールトークに挑戦した。クイズというわかりやすい設定であったため、It's quiz time!と言った瞬間に「やってみたい」という子供の反応があった。子供を巻き込むことで、より主体的に聞こうとする姿につながったため、小学校段階から積極的に取り入れていくことが有効だと考える。

◆ Practiceの工夫

今回は、チャンツ“ぐるぐる”に挑戦した。パターンを少しずつ変え、テンポよく行うように努めた。①ALT→HRT→子供、②HRT→子供（ボランティア）→子供、③ALT（Can you~?）→HRT（Yes,I can./No,I can't.）→子供（Yes,I can./No,I can't.）の3パターンで実施したことで、飽きずに練習でき、子供は意欲的に活動に取り組むことができた。③は、自分の立場でYes/Noで表現する場になっており、子供が外国語で対話できるようになるための指導のステップとしては適切であったと考える。

◆外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる目的や場面、状況等の設定

Yes/Noクイズをするためには、Can you~?の質問だけでは不十分だと考えた子供が、機転を利かせAre you~?の質問をした場面は、教師にとっても予期せぬ場面だった。正確には、Are you red?と尋ねるところだが言いたいことが十分に伝わる内容だったため、子供の発想を大切して正しい言い方をその場で指導し、全体としても尋ね方のバリエーションを増やすことができた。このように、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、その場で適切な言語材料等について自ら考え、判断し、表現したことは、子供が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせた場面に他ならない。

【課題】

本講座の内容は、外国語教育の喫緊の課題を大変わかりやすく取り扱ったもので、本講座参加者以外の教員にも必要に応じてアーカイブを活用して共有したい。来年度からは、全ての小学校で英語のデジタル教科書の活用が開始される。GIGAスクール構想の推進に伴い、1人1台端末とデジタル教科書の効果的な利活用について、今後一層の研修を深めていきたい。

10. 新潟県妙高市受講者感想

本講座では、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の指導について、例を挙げて具体的に説明していただいたり活動の再現を拝見したりして大変参考になった。授業を見ての協議では、たくさんの先生方と話をする中で、自分にはなかった考えを知ることができ視野が広がった。私自身は、教科化されてから外国語の指導をしたことはないのだが、講座を通して子供達への指導のイメージがより確かになったと感じる。また、ALTの先生との連携も大切だと改めて感じた。打合せの際、子供へどんな働きかけをしてほしいのか確認したり、提示する文に違和感がないか確認したりしたいと考えた。

（妙高市立新井小学校　教諭　大野 真依子）

講座の前半では、何をどのように指導して評価するのかを学年ごとにわかりやすく教えていただいた。
特に、chantsを利用したALTとのティーム・ティーチングについては、実践してみるととても有効な指導方法であった。後半の各県による授業研究では、指導者の先生から授業の要点や子供の困り感が出てくる箇所を教えてもらったおかげで、日々の授業で参考になるところが多かった。そして、授業者の先生方が毎回、生き生きと子供の前に立っている姿を見て、外国語が苦手な自分も恐れずに子供と楽しんで取り組む勇気をもらうことができた。

（妙高市立新井北小学校　教諭　宮﨑 太一朗）

本講座を受講することで、これまでの自分の授業を振り返るよい機会となった。自分の授業で今後活用したいと思う様々な活動があった。また、授業の組み立て方、T1,T2,子供の適切な関わり方について学ぶことができた。特に心に残っている活動は、Small Talkだ。本時の活動に沿った内容のSmall Talkによって、子供がその時間で学習するワードやフレーズに触れ、興味関心を高めていく活動だった。授業の実践動画では、さまざまなSmall Talkの活用に触れることができ、実際の様子をイメージすることができた。本講座で学んだことを生かし、これからも子供が「楽しんで」学ぶことのできる外国語の実践を積み重ねていきたい。

（妙高市立妙高小学校　教諭　岩崎 未佳）

11. 講師総括

1　藤田 保

昨年度に続いて本年度実施された本事業では、参加地域が増え、講座回数も増えて、さらに、座学に加えて実践的な研修を加えることができ、より一層充実した研修となったのではないだろうか。その第1回講座で、私自身の担当部分については意図的に「講義をしない講座」を実践させて頂いたため、若干戸惑われた先生方もいらしたかも知れない。講座の形態が、事前課題として昨年度に私が学習指導要領の考え方について講義した講座の録画を視聴してもらって基本的な知識を得た上で、各自が抱いた疑問点やその講義内容との関連における日常的な授業の実践での悩みなどをぶつけてもらい、それに対して講師役である私や参加している各地の先生方で意見を出し合う、という進め方を狙ったものだったからだ。MEIKAI-JOEプラスにおける研修は、一義的には外国語・外国語活動の授業改善を目指すものであるが、本当に目指すべきは教科の枠にとらわれず全ての授業に共通する「新しい学力観」の実現なのではないかと私は考えている。すなわち、知識・技能に偏ることなく、思考力・判断力・表現力を伸ばし、何よりも授業を受ける立場の者が積極的に学びに向かう力をつけ、主体的・対話的で深い学びを実現することであるが、そのためには座学であっても単に聞くだけではない授業を実践する必要がある。とは言え、従来型とは異なる授業形態や新しい教授法の実施となると、決まって「そんな授業を受けたことがないからどうしていいのか分からない」といった声が聞こえてくる。それは10年ほど前に小学校に英語を導入しようとした際に「自分は小学校で英語を学んだ経験がないから分からない」とよく言われていたのと似ている。そこで、先生方にご自身で体験してもらうのが何よりも大切であろうと考えたのが上記のような「反転授業」形式の講座を実施した最大の目的である。生徒の立場として参加した際に、質問等を投げられた方も、戸惑ってしまい何も発言できなかった方もいられるだろう。特に後者の場合、何をどう改善すればより発言がしやすくなったと思われるであろうか？もっと知識が必要なのか、話し合いの練習が必要なのか、あるいは事前準備が必要なのか……等を改めて考えて頂くことによって、自分がそのような授業を実践するに当たってのヒントが見えてくるのではないだろうか。最後に、流れを受講者に委ねることは、事前準備が必要なく楽だと思われるかも知れないが、何が出てくるか予測ができない分、全方位な準備が必要になる。だからこそ、継続的な自己研鑽が不可欠になるのであり、今回のような研修講座が必要になるのであろう。

2　金子 義隆

私が藤田先生と共同で担当した第1回講座では、小学校で外国語の指導する前に理解しておく必要のある学習指導要領と第二言語習得の基本的な考え方を扱った。講座では、できるだけ講義一辺倒にならないように受講者の皆さんとインタラクションを持ちながら、質問に回答する時間を多く設けた。アンケート結果によると、「講座内容の理解度」は93%であった。インタラクティブな講座にした効果があったと思われる。「講座内容と学校現場のニーズの適応度」であるが、84%が肯定的に回答してくれた。大部分の受講者は今回の講義内容の必要性を認識していた。また、講座で提供した資料に関しても84%が肯定的に回答してくれた。今回の講義資料は「言語活動中心の指導展開」についてできるだけ簡潔に作成したものだった。講師の説明に対して、92%が肯定的に回答してくれた。総合的な満足度では、83%が肯定的に回答してくれた。「具体例が乏しい」というご意見もいただいたので、次回このような機会があれば、より具体例も盛り込んでいきたい。

3　池田 周

第2回講座では、中学年「外国語活動」の「聞くこと」の領域で扱う文字に関する学習内容を踏まえ、高学年「外国語」の「読むこと」、「書くこと」の2領域で育成を目指す資質・能力を確認し、指導のあり方を理解することを目的とした。小学校段階の外国語教育では「まず音声で十分に慣れ親しむ」ことを大切にする。児童の中には文字を頼りに学ぶ子供もいるし、最初から文字に意識を向ける指導では抵抗を示す子供もいる。また文字に頼る指導から始めると、細かな英語特有の音に意識が向きにくくなったり、聞こえた英語の音の流れを保持して意味を捉えようとしなくなったりすることがある。重要なのは、最初に音のみで親しませる段階を取り入れ、「音声を十分に聞いたり言ったりした語句や表現」について文字と照らし合わせていく流れである。

アルファベットの指導でも、最初から大文字や小文字の名称と形を対応させた知識として機械的に覚えさせるのではない。名称の発音を聞いて、それが表す文字を識別できるようになってから、文字を見て名称を発音する練習へと移る流れをまず実践する。また小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編では、「読むこと」の目標のうち「イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味がわかるようにする」について、語を見て意味がわかるためにはその語の発音がわかること、すなわち音読できることが必要とし、そのための文字の表す音の扱いが示唆されている。これについても、まず語はより小さな音が混成したものであることを認識し、例えば語のはじめの音を取り出せるようになってから、その音が特定の文字で表されるという気付きを促すなど、日本語よりも小さな音素単位の音に慣れ親しんでから文字を提示する。

さらに「書くこと」についても、小学校段階では語句や表現などを自分で綴りを思い浮かべて書くことは求めず、書き写す活動に留める。その際も、書き写そうとする語句や表現、文などの発音に児童が既に慣れ親しんでいることが重要である。そのため写し終えた直後であれば、その文を見ながら発音する（＝音読する）ことも可能であり、ここまで活動を発展させることで児童の読み書きの達成感を高めることにもつながる。

語を見て意味がわかるようになるための活動、さらに語順への気付きを促し、文字間や語間を意識しながら書く活動の充実については、まだ学習指導要領によって方向性が明確に示されていない部分もある。それゆえ試行錯誤の指導となっても、「音から文字へ」の流れを心がけていくことが大切である。

4　百瀬 美帆　パトリツィア・ハヤシ　タイソン・ロード

第3回講座では「chantsを活用したALTとのティーム・ティーチングについて」講師3人が模擬授業を交えながら講義させていただいた。Chantsの指導をALTと学級担任の肉声で行うことにより段階的な指導が可能になること、学級担任のみで指導に当たる場合に児童を巻き込みながらChantsを指導する方法などを示した。講座評価アンケート質問15の「英語の音声で学んだ指導法を自分の授業で使ってみたいですか」には88%の方が「そう思う」「まあそう思う」と肯定的な回答をしていた。また質問16「英語の音声における強勢（ストレス）、リズム、イントネーションをこれからもっと学んでみたいですか」に対しては92%が肯定的回答をしており、小学校の先生方がこうした英語の音声上の特徴について学ぶ機会を欲しており、指導法が提示されれば自分で使ってみたいと考えていることがわかった。

第10回講座ではいわき市若松先生の授業を拝見した。学級担任とALTとの役割分担に悩む学級担任にとって、明確に学級担任がT1の役割を果たすべきであることを示していただいた。児童の特性を十分理解した担任ならではの指名の方法や、自信がもてない児童への励ましや、誤答に接した時の訂正方法等は外国語科の授業やティームティーチングにおいてだけでなく、日ごろの全科目の授業を通して形成された円満な人間関係の上に成立するものであることを受講者全員が共有することができたと思う。

講座後の評価アンケートの自由記述部分に「何といっても授業場面の映像が参考になります」とのコメントがあるが、講義で得た知識や指導法を実践した結果を異なる地域の先生方が共有して協議できたことはオンラインならではの成果であったと考える。

5　佐藤 久美子

通常小学校に伺い対面で研修を行う時は、①授業を拝見する、②協議会を行う、③講師からの指導助言を行う、という手順で行われるが、今回の『授業研究』はまさしくこの手順で行われた。第8回、9回を通じて、①に係わる「授業動画の中で授業者が行った言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか」という質問には、「そう思う」「まあそう思う」合わせて95%gという肯定的な回答が寄せられ、②に係わる「動画視聴後の協議会で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか」という質問には、共に96%の肯定的な回答が得られた。さらに、③に係わる「講師の指導・助言は役に立ちましたか」という質問には、第8回が96%、第9回が99%という肯定的な回答が得られ、「総合的にこの講座に満足できましたか」の質問には94%、98%という高い評価が得られた。研修を行った身としては、少しでも現場の先生方のお役に立てたことが大変嬉しく感じられた。また、オンラインによる研修でも、授業を互いに共有し、意見交換ができて意義のある研修ができることを実感した。横手市、妙高市、浦安市、いわき市、足立区と複数の地域にまたがる授業を見ることは、教員や私たち講師にとっても新鮮な経験であった。

第4回、5回の講義においては、子供の母語の言語獲得の過程においては、2歳児はひたすらに保護者の言葉を反復（模倣）し、その後3歳になると自分の言葉を加えて拡張した話ができるようになることを引用し、第二言語獲得においても授業において文を反復させることがいかに大切かを説明したが、こうした母語の言語獲得の話がもっと聞きたいという要望も寄せられた。また、リスニング指導では、詳細な情報を聞き取ることに焦点を当てがちだが、まずは推測力も利用して概要を聞き取ることの大切さ、またそのためのPre-listening Activityの大切などを具体的な例を示しながらお話したが、とても参考になったというご意見が多く寄せられた。日頃、時間をかけた研修でないと聞けない理論的な話や、明日の授業からでも使える具体的な指導法や活動についてもっと聞きたい、勉強したいという熱意が伝わってきた。毎回、講座後に多くの質問が寄せられたことからも、この気持ちがよく理解できた。

「このような機会がまたあれば、受講したいか」という質問には90%を超える肯定的な回答をいただいた。私共も、今回だけに終わらせず、また他の地域の小学校も交えてこうした研修の機会を提供させていただきたいと切に願っている。

6　坂本 純一　石鍋 浩

第6回講座では「小学校から中学校・高等学校への学びの接続」と題し、小学校から中学校・高等学校における指導へ円滑に接続できるようにするための指導方法や言語活動の在り方について述べさせていただいた。学習指導要領の改訂の最大の目玉の一つが小中高の接続だからである。講座では、小学校と中学校、中学校と高等学校の教員が一緒になってこの問題を考えていくことの大切さにも触れた。また、今回の学習指導要領では、英語による発信力の育成が課題になっていたことから「話すこと」の技能を（やり取り）と（発表）に分けた経緯を踏まえて、小中の言語活動の接続について「学校段階別一覧表」を提示しながらポイントを確認した。

講座評価アンケート質問2の「講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか」には87%の方が「そう思う」「まあそう思う」と肯定的な回答をしていた。講座評価アンケートに寄せられた質問では、高校生と異なり小学生では難しい言葉を易しい言葉に言い換えて理解させることが難しいとの感想があった。これに対しては、教員によるモデル提示や教員と児童とのやり取りを通して言葉の意味に気付き、理解していくことは重要なことであるともに、activityの英語での指示が理解できていない児童には、さらにジェスチャーなども使い、より易しい英語で言い換えて指示することも大切である旨回答した。こういった視点は、まさしく小中高の発達段階に応じて教師側で工夫をしていくべき大切なポイントであると感じた。

小学生が中学生になり高校生になるのは早い。小学校の先生方にはぜひともご担当されている子供たちの近い将来の成長した姿を想像しながら、外国語活動や外国語の授業づくりを楽しんでいただきたい。

12. J-SHINE 事務局

はじめに、本事業の委託を受け、講座の企画・実施をしていただいた明海大学の皆様に心より感謝申し上げます。また、実際に研修に参加していただいた、足立区・いわき市・浦安市・妙高市・横手市の教育委員会の皆様、教員の皆様にも厚く御礼申し上げます。

本事業は令和２年度に続き、２年目の実施となったが、前年度に本事業にご協力いただいた３地区の皆様に継続的に参加いただいたこと、また新たに２地域の皆様に加わっていただいたことは、本事業が既に小学校の外国語科の一助となっていることを表していると考えられる。

令和３年度においては、新たな試みとして各地の授業動画を通じて他地域の先生方との意見交換を行った。この取組はオンライン研修のメリットを活かした画期的な内容であった。実際の様子は各研修の項目を参照いただきたいが、各地の小学校で事前に収録された授業動画を通じて他校・他地域の授業の様子を観察することに取り組んだものである。各拠点での意見交換や授業実施者への質問など、参加いただいている先生方が主体的に研修に参加・発言できる仕組みが構築され、参加者の満足度の高さからも、今後の研修の在り方に大きな可能性を示したことになる。

今後に向けては、更に参加者同士の議論を深め、更に深い学びの機会を設けることを目的として、授業動画の視聴は事前タスクに更にしっかりと組み込み、研修時間内での動画の視聴を省略することも検討されたい。特に、オンライン会議システムZoomを通じての動画視聴は画質・音質面からも検討の必要性があると思われ、今後の更なる改善に期待したい。

最後に、J-SHINE事務局としては今後とも、明海大学の皆様と協力し、本事業の成果普及に努めて参りたいと考える所存であり、この研修が今後も継続的に実施されることを願う。

13. 運営業者（株式会社モアカラー）

講座配信（第１回から第６回）

本年度もWeb会議ツールZoomのWebinar機能を活用して配信を行った。

第1回から第6回の講座配信は昨年度同様に座学中心の講座形式となっており、昨年度の経験を生かしてカメラ・マイクなどの機材構成を最適化し、より効率的に実施できるように配慮した。

本年度は配信用のPCを各拠点での手配とし、会議用カメラ・マイク一体型の機器のみ貸与となったが、各市区の協力により不具合は少なく、全体的には平穏に配信を完了した。一部拠点校で発生した問題は現地訪問によるテストを行うことで解消した。

講座配信（第７回から第10回）

第7回以降は授業動画を閲覧した上での授業研究の方式をとるため、事前に各区市が撮影した動画と音声を預かり、担当者と協議しながら授業動画の編集業務にあたった。撮影環境の問題や時間的な制約により問題も発生したが、関係者の協力により、5本の授業動画を完成させることができた。

授業動画の視聴に関してはZoomで提供される共有機能を使用するのではなく、機材の構成を工夫することで拠点校での音声が聞き取りにくい問題を解消した。

また、講座の進行を各区市担当者が行う形式で、配信技術者が各拠点に配置されていない状況であったが、各区市の協力により配信を完了することができた。

Webサイトでの情報提供

本年度は明海大学のサイト内にページを作成する方式でWebサイトでの情報提供を行なった。昨年度同様に事前課題の掲出、配信後のアーカイブ動画及び資料の掲載などを実施した。管理ツールの制限の中で事務局と連携してスケジュールにあわせたタイムリーな情報提供を実現した。

終わりに

我が国の英語教育、とりわけ小学校段階における英語教育の導入については、平成4年の研究開発学校の指定にその端緒をみることができる。ここでは国際理解教育としての小学校英語の実験的導入であったが、平成10年の小学校学習指導要領改訂の告示により平成12年4月から「総合的な学習の時間」が導入され、全国の小学校でいわゆる英語活動が広く行われる契機となった。また、昭和62年からは、外国青年招致事業、いわゆる「JETプログラム」により来日したALT(Assistant Language Teacher)とのティーム・ティーチング(team-teaching)という手法が導入され、この頃から多くの小学校の現場では、外国人と日本人教員とが協働授業を行う風景が見られるようになった。平成15年には、構造改革特別区域制度の下、教育課程の特例を活用した英語教育が広く行われるようになった。平成20年3月には中央教育審議会の答申を受けて、小学校5年と6年に週1コマの「外国語活動」の位置づけをした小学校学習指導要領改訂の告示が行われ、平成23年4月から、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として、「外国語活動」が全面実施となった。とりわけ刮目すべきは、平成25年5月に教育再生実行会議第3次提言を受け、文部科学省が同年12月に公表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」であった。ここでは、小学校「外国語活動」を中学年(第3・4学年)に移し、高学年(第5・6学年)には、週3コマの教科としての外国語(英語)を実施すると明記したことである。さらには、この「実施計画」を検討するために文部科学省に設置された「英語教育の在り方に関する有識者会議」が平成26年9月に「今後の英語教育の改善・充実方策について―グローバル化に対応した英語教育改革5つの提言」と題する報告を行った。その後、平成28年12月には、中央教育審議会は、小学校第3・4学年に外国語活動を週1コマ、第5・6学年に教科としての外国語(週2コマ)を導入するといった答申を行った。これを受け、平成29年3月に、小学校学習指導要領の改訂が告示され、平成30年4月からの移行措置に伴い、「Let's Try!」(中学年)と「We Can!」(高学年)といった補助教材の配本・使用が始まった。令和2年4月から小学校学習指導要領が全面実施となり、小学校第3・4学年に外国語活動を週1コマ、第5・6学年に教科としての外国語(週2コマ)が始まり、現在に至っている。

令和2年からの小学校学習指導要領全面実施までの間、文部科学省の様々な環境整備についても計画的に実施されてきた。先に述べた補助教材の作成、英語教育推進リーダー養成研修、専科加配教員の配置、ALT等の配置拡大、英語教育強化地域拠点事業や外部専門機関と連携した英語指導力向上事業の立ち上げ、小学校外国語活動・外国語に関する各種映像資料の公表など様々な事業がその中心である。加えて、現職の小学校の教員に対する研修を充実するとともに、教員を養成する大学の教職課程の改善にも着手した。具体的には、英語教育コアカリキュラムの中で、小学校教員を養成する大学にあっては、これまでは、履修の義務付けはされていなかった外国語を学修することが求められ、令和元年度の大学入学生からは、小学校免許を取得する者は必ず外国語を3単位履修するよう免許法が改正された。さらには、令和4年度からの小学校高学年の教科担任制の導入、特別免許状を取得した人材の活用や力量のある特別非常勤講師を活用した人材の取組も始まりつつあり、小学校における英語の指導形態については大きく変化することが想定される。

こうした中にあって、令和2年度に引き続き明海大学が、「令和3年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業)」を受託して、小学校の先生方に講座を提供することができたのは、まことに光栄なことであると考える。受託期間は短いながらも、都合10回と特設講座に亘り講座を実施できたのも、J-SHINEや東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市教育委員会、福島県いわき市教育委員会そして新潟県妙高市教育委員会の皆様、㈱モアカラーの支援があったことに他ならないと考える。ここに篤く関係各位に対して深甚から感謝の意を表したい。さらには、今回参加された200名にも達する小学校の先生方の指導力向上を祈念するとともに、日本の小学生が英語の使い手としてグローバルな世界の中で成長することを願って止まない。

今後とも、明海大学は、英語教育に関する研究を重ね我が国をリードする大学として評価されるよう誠心誠意努めていく。